

剣八の墓標

点=嘘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作知識をインストールされた二代目剣八がいろいろと足搔くお話。

Twitterにて氷陰さん主催の「被殺願望杯」投稿用作品です。 でした。

目

次

まつくらい	ぼくの世界は	深淵の領域	雨は未だ止まず	ドロップアウト	最後（いやはて）の夜	C u t t h e t h i n s k i n a n d d i v i d e i t i n t o	t w o .	避けられぬ戦い	輔忌	クリサリス
						104 84 61 42 22 1				

The 11th Battle ag
ainst
決着
剣八の墓標
278 250 222

まつくらい

果てまで見渡せど尚果て知れない——達人として研ぎ澄まされた感覚すら疑われるほどの広大な空間にて、一人の男が座している。

鞘に納められた大刀を瘦躯な、しかし鍛え上げられた肩に立て掛ける男は、これから起ころる事柄に対して物憂げな溜息を小さく吐く。

まるで何者かを待ち受けるかのように虚空を見つめる男の、その瞳の奥に宿る巨大な感情。それは紛れも無い“諦念”、そして——

灼鉄の如く燃え盛る“使命感”だつた。

「……待つていたよ」

独り言ちると同時に、完全に閉ざされた空間へと一筋の光が舞い込んだ。たつた一つしかない扉から現れ出でたのは、溢れ出る闘志を隠そともせず、魔物のような兎相を愉悦に歪めた一人の偉丈夫であつた。

男の知る限り“この世で最も強いであろう怪物”が、唸るように嗤いながら言う。

「あア？ 手前えは待つてなんかいねえだろうが、この日をよ。寧ろ”永遠に来なきや

いい」とさえ思つていた筈だぜ。俺には分かる。……待つっていたのは俺のほうだとも、な?」

「おや、と思う。人の心など氣にも留めない獸のような男だと見做していたが……中々どうして、今日は口数が多いじゃないか。『獲物』を前にした貴様らしくもないゆらりと立ち上がる。この一瞬まで浮かべていた苦笑は搔き消え、音もなく刀を鞘から引き抜いていく。

「わかるさ。この戦いに於いて……貴様と彼女の因縁は完全に終わりを迎える。……僕は『あの人』の代わりだからな。一千年もの呪縛を断ち切るとあつては、さすがの貴様も幾らかの感傷だつて覚えるだろう」

ざらき
更木。

「御託はもう十分だろうが、さつさと始めようぜ!」

「ああ、更木。ただの更木よ。」

貴様から奪い取つたこの名を、再び貴様へと正統に受け渡す時が來た。

「ああ。最強の死神が相手をしてやる」

「此れを以つて。」

「僕は、生まれて初めて人を救うために剣を振るう事となる。」

「二代目『剣八』——卯ノ花剣八がな」

暗い。昏い、冥い、啗い、啖らい——
喰らえ!!

???????

「……い、……きろ」

頭が痛い。

意識がグラグラと揺らいで、どうやら吐き気もするようだ。

うだるような夏の日差しに晒されているのも相まって、今しがた全身に刻み込まれた打撲の痛みが、じんと熱を孕んで躰を包み込んでいるような錯覚を覚えずにはいられない

い。

「こ」は一体？ 僕は、何を――

「――い加減、起きろってんだコノヤロ――ツ！」

「ぐつはあ!?」

痛つつたい！?

いきなり響いた頭蓋への衝撃に瞠目しながら、僕はやつと完全に目を醒ました。はつきりしない視界をふらふらと彷徨わせれば、今にも鉄拳を振りかざそうとするガラの悪い男が目に入ってくる……。

「ま、待つて！ もう起きてますから――」

「どつせ――い！」

「ぶべあ!!」

必死に叫んだ制止の声は聞き入れられず、無意味な拳骨を二度も喰らった僕は、側から見れば氣味がいいほどに打ち飛ばされてしまう。ゴロゴロと不格好に地面を転がり、肌に刺さっていく細かい石くれなどに顔をしかめることになった。

「な、なにするんですか。これが医者のやること――」

「ついでにオラア！」

「ついでにオラア！」

「痛えなチクショ――!!」

いい加減にしろよ、こつちだつてそう何度も殴られるわけないだろ。調子に乗つて人を散々コケにしてくれたクソ野郎の顔面にボギヤツと拳を入れ、なんとかノックダウンすることに成功した。悪は滅びたのだ。

「う、ウデを上げたじやねえか。流石はアЙツのガキだぜ……」

つうと血の垂れる鼻を押さえながら悪びれもせずに言う男を前に、僕は苦い表情で吐き捨てた。

「……バカを言わないでくださいよ。貴方ほどの瞬歩の達人が、僕みたいなヒヨツ子のパンチをまともに喰らうはずはないんだ」

「フン、たりめえよ。『雷迅』とまで言われたこの天てん示じ郎ろうサマが、て前工まへの拳骨こぶごときを本当にかわせないワケねえだろうが」

「……じゃあ、なぜ？」

「ツツコミをわざわざ避けるような無粹なボケがいるかよ」

「漫才やつてんじやねえんだぞ……ツ！」

そんなくだらない理由で二回もぶん殴られたのかよ。死ぬほど憎らしいが、かといつてもう一度殴ろうとしても絶対に当たらないだろう。

こめかみをヒクつかせながら悔しさに身悶える僕を白い目で見てくる彼の名前は

麒麟寺天示郎。

きりんじてんじろう。隊士の治療を専門とする護廷十三隊四番隊隊長であり、世に言う医療靈

術『回道』を生み出した死神だ。

そんな大層な肩書きを持つ彼だが、隊長の仕事も放り出して何をやつているのかといえば……どこから嗅ぎつけてきたのか、剣術修行をしようという僕と師匠に勝手についてきたのだ。

彼ほどの達人に傷を癒してもらえるのというのは、なるほど確かに幸運なことだろう。しかし……見ての通り、彼はどうも治療者にしては性格に難があるような気がする。はつきり言つて、出来ることなら副隊長の数男さんか三席の数比呂さんにお願いしたい所だつたが、彼らはたぶんこの迷惑腹巻き野郎が放り出した隊長業務の代行に忙しいのだろう。

いや、彼らも彼らでとんでもない荒療治を強いてきたりするのだが、それはただ隊長の命令に従順にやつてているだけだ。本人達が至つてまともで余計なことをしないだけマシというものである。

「……つて、そうだ！ 先生は！」

——と、ここまで来て僕はようやく現状を思い出した。

先程まで僕と戦っていた師匠がどこにも見当たらぬ。僕にここまで傷を負わせ、あっさりと気絶させて見せたあの人があ……

「此処に」

「うわ——ツ！」

ぞつとするような冷たい声と靈圧を背後から感じて、僕は思わず飛び上がつてしまふ。

「常在戦場。氣を失った程度で靈覚を乱すとは何事ですか」

声のした方向に慌てて目をやると——抜き身の刀を胡坐こざに乗せつつ木陰に憩う、一人の女性が座していた。

あれはおそらく、刃禪じんぜんと呼ばれる型だろう。己の刀、つまりは斬魄刀、そして自らの精神と向き合うための古来から伝わる瞑想法だ。

「ゞ、ごめんなさい」

「天示郎。彼の怪我の具合は？」

「こつぴどくやつてくれたみてエだが、俺を誰だと思つてるよ？ 細けえモン含めて、骨折は粗方治してあるぜ。流石に打撲の痛みは薬を取つてこねえと暫く引かねえだろうが、いま動かすには十分だ」

骨まで折れていたのか。僕も相当鍛錬を積んだと思っていたが、まさか木刀でここまで

で打ちのめされる事になるとは。

ともあれ、それも治して貰えたのならば有難い。稽古の続きをしようと、迷わず得物を構えようとしたところで――

「そうですか。では、今日はこれにて仕舞いとします」

「えッ？」

斬魄刀を鞘に納めて立ち上がり、師匠は隊舎へと歩き去つていく。それを少しの間ぽんやり見つめていた僕だつたが……ハツと我に帰つて嘆願の声を上げた。

「ま、待つてください！　まだやれます！」

「聞こえなかつたのですか？」

ザツ、と立ち止まり、一瞬だけこちらに視線を遣つた師匠と目を合わせた瞬間――

恐ろしいほどの靈圧に、押しつぶされた。

「今日は仕舞い、と言いましたよ」

「――ッ!?」

「ぶわッ!!　と。

先程とは比較にもならない“圧”に思わず膝を突かされ、滝のような冷や汗が流れる

のを止められない。ぜえぜえと胸を抑える僕に関心を失つたのか、師匠は何事も無かつたかのような足取りで歩みを進めていた。

……正直、師匠が靈圧を控えてくれた今となつても動悸が治まる気配は無い。でも、このまま場を後にされる前に言わなければならぬことがあるはずだ。

一時は頽^{くずお}れた自分の足に力を込めてふらふらと立ち上がった僕は、精一杯の大声とともに深々と礼をした。

「御指導……ありがとうございましたツ！」

「…………」

こちらに目もくれずに去つていった師匠の後ろ姿を認めたのち——一気に力が抜けたのか、僕はそのまま地面にへたり込んでしまつた。

……憮然^{びんぜん}は百も承知だ。しかし、あの傑物が弱者の言葉に懃々耳を傾けるような人ではないと云う事は、僕が一番良く分かつている。

そう、彼女こそは『戦闘専門部隊』十一番隊隊長にして——最強の死神を意味する『剣八』の名を冠する唯一の人物、卯ノ花^や_ち八千流。

僕、卯ノ花輔^{たすき}忌の母なのだから。

???????

「……で、何だつて俺について来やがつたんだ？」

スツカリしおらしくなりやがつた輔忌のボウズに疑問をぶつけながら、俺——麒麟寺天示郎は四番隊舎に併設してある自作の温泉に浸かつていた。

救護詰所の公共施設として一応は自由に利用できるよう解放されてはいるが、なまじ薬効が強いだけに気軽に入れるような場所じやねえ。大した怪我でもねえのに平気な顔して俺に付き合つてるつてのは大したモンだが、いつ上氣のぼせあがつちまつても知らねえぞ。

「……僕は」

「あ？」

「僕が不甲斐ないばかりに、今日は師匠を……母さんを失望させてしまつたんでしょうか」

「俺の質問の答えになつてねえな」

「はは……どの面を下げて、のこのこと家に帰ればいいつて言うんですか……」

チツ、ぐちぐちとくだらねー事を抜かしやがるガキだぜ。

慰めるような台詞は言いたかねえが、輔忌の剣はその歳に釣り合わないほど鋭く研ぎ澄まされつつある。それこそ、俺が今までに見てきたどんな早熟の天才つてやつよりも

飛び抜けた早さでだ。

だからこそ、何故今まで焦つて力を付けようとしてんのかがわからねえ。……ま、わからねえ事は聞いてみるのが一番だな。

「て前エは何だつてそんなに強くなりてえんだ？ 隊長の地位が欲しいからか、強え奴と戦いたいからか」

「…………」

「それとも何だ……て前エが『剣八』の息子だからか？」

「…………違いますよ」

だーもう面倒くせえな、男ならハツキリ物を言いやがれ！

早くも苛々しきじめた俺の心中を知つてか知らずか、輔忌はぽつぽつとその胸の内を明かし始めた。どうせ言うんなら最初ツからそうしろよな。

「僕はただ——来るべき時に後悔したくないだけですよ」

「ほオ」

「どうしても、助けたい人がいるんです。例えば……大切な人が重い病気にかかっているとして、天示郎さん。貴方は医者としてその患者を治してあげたいと思うでしよう？ でも、もしその人が治療を拒んだとしたらどうしますか？」

「ブン殴つて言うこと聞かせた後に無理矢理治す」

当たり前だろうが、そんなもん。なんで俺が治したい奴を黙つて見過ごさなきやならねえんだ?

なぜかそれを聞いて驚いたようにこつちを見てきた輔忌は、ふと苦笑いと共に肯首してきた。へこんだり驚いたりしたかと思えば急に笑いやがつて、忙しい野郎だな。

「そう、ですか。いいですね。僕も出来ればそうしたい」

「じゃあ、そうするんだな」

「ただ……僕の“患者”の病はとても重くて。どうやつて治したらいいのかもさっぱり分からないんです。もしかしたら下手に手をつけるより何もしない方が良いような病気なのかもしね。今の僕には、とても判断のできない事です」

「…………」

「だから少しでも多くの選択肢が必要なんです。僕がいざれ来るその時に何をするべきか、いつか答えを出すまでに……そのために、僕は力が欲しいんです」

改めて、俺は輔忌の顔をまじまじと見つめた。

卯ノ花の奴とは似ても似つかない、毒つ氣のねえトボけた面をしてやがる。……だが、将来を語る時のこの表情はまるで――

「俺は、て前エのやりたい事なんざこれっぽつちも興味ねえ」

「構いません。これは僕の問題ですから」

「だからそのために強くなりたいつづたつて、俺から何か言つてやるつもりはねー。……だが、一つだけ言える事があるとすりやあ」

「?」

「卯ノ花がて前エに『失望』なんかしてゐ筈はねえ、つて事だ」

俺にとつちや尋常一様に過ぎない事実を言つてみれば、輔忌は呆氣にとられたのか、馬鹿みてえな表情で薄らと口を開けていた。……つくづく、面を被つた虚ホロウ共にも勝るような鉄面皮女が母親とは思えねーな、こいつ。

「これは確実に言える事だぞ。アイツは自分の息子だからつて勝手に強くすることに執心するような奴じやねえんだよ。何なら『戦いなんてしたくない、死神になりたくない』と言おうが、それはて前エの勝手だろうと、そうスッパリ割り切れるような女だぜ」

「……それは、僕に興味がないつて事ですか？　僕の力を取るに足りない程度のものだと思つてゐるから……」

「馬鹿か。あんなに戦いを好きだと思つてる——俺には分からん感覚だし、普通に”頭おかしーんじやねーの”とは思つてるけどよ——そんな奴が、自分のガキが他の誰よりも早く腕を上げてるつて事に期待しないわけねえだろ。だからて前エが剣を置けば確かにアイツは残念がるだろが、それはそれだ」

「じゃあ！」

「さつきの、ふあゝあ……『稽古打ち切り事件』のことか？」

欠伸混じりに言葉を遮つて訊いてみれば、あまりに予想通りな答えが返つてきやがつた。くだんねー。

「……そうです。あれは母さんが僕に見切りをつけて——」

「ありや大方、て前エを必要以上に痛めつけちまつたのに『やつちまつた』とでも思つたんじやねーの。あれで息子の骨をバキボキ碎くのには流石に堪えたっぽいしな」

「…………」

「ま、あれで冷血漢つてワケじやあねーつて事だな。……アイツも子に対する情けぐらいいは人並みにあるんだぜ？　あ、人並みつてのは言い過……たぶんな。たぶん」

……そこまでやる前に『我に帰る』のが普通だろうとは思うけどよ。ま、あの馬鹿に限つてはそこまで期待しちゃいけねえか。

俺が付いて行つてなかつたら結構ヤバい感じだつたぞ、あの様子だと。鬼道の才能もあるみてーだし、だから俺が『上』に行くまでに回道の一つでも仕込みたかつたんだが……人が善意で物を教えてやろうつてのに毎度毎度「必要ありません」と断りやがつて。あいつも今日の事で、今度こそ少しは懲りただろうな？　治したい怪我を前に指を咥えて見てるだけつてのは、存外気分の悪いもんだぞ。

「……て前工を諫めるためにだろうが、いきなりあんな靈圧垂れ流して来やがったのに
は流石に『何やつてんだ』と思つたがよ。幾ら何でもあそこまで不器用な奴だつたとは
……るこんがい
流魂街の破落戸どもを黙らせてた時から、やり口が変わつてねーんじやねーのか
？」

「……なんで、」

「おオ？」

「天示郎さん、なぜ貴方は母さんの事をそんなに知つたように話すんです？ 四番隊と
十一番隊の隊長同士、そう接点があるとは思えませんが」

おつと……喋り過ぎちまつたか。

いい加減、俺も湯に浸かり過ぎたな。暑さで口を滑らせないようにそろそろ上がろう
かとも思つたが、輔忌の野郎「話すまで出させねーぞ」って面してやがる。

しゃアねーな。言つても困るワケじやなし、もうちつと付き合つてやるとするかよ。
「そうだな……いつぺん、アイツが俺の診療所に駆け込んできやがつた時があつてな。
そん時からの付き合いつて事になるのかね？」

「すると、母さんは病気か何かを患つて？」

無意識かどうかは知らんが『怪我』の選択肢を真つ先に除いて質問してきた輔忌に、俺
は首を横に振りながら答える。

「ちげーよ。……どうしても治して欲しい奴がいるつてな、男を背負つてやつて来たんだ。信じられるか？ アイツがあんなに必死な顔してやがったのは、後にも先にもあれだけだつたかもしねえ」

「ははあ。さてはその人ともう一度戦うために、一度自分で斬つた相手を治せと言うんですね？」

「こいつ、時々とんでもねー事を言いやがるな……。

後で告げ口してやると言つたら絶望的な表情になつた輔忌を無視しつつ、俺は続きを語り始めた。

「そいつは妙な症状でな、原因らしき原因が見当たらない癖に、日に日に衰弱だけはしていつたんだ。俺も手は尽くしたが、完治させる事はできなくてな。担ぎ込まれてからちょうど七日目で逝つちまいやがつた。……屈辱だつたぜ。あんな患者は初めてだつた」

「…………」

「俺は結局何も出来やしなかつた。だが、卯ノ花の奴はそうは思わなかつたみてえだ。

『せめて彼が安らかに最期を過ごせたのは貴方の御陰だ』つてな。で、そん時からちょいちょい交流が続いてるつてワケよ」

黙つて話を聞いていた輔忌はどうやら何かを考え込んで

いる様子だつた。

そりやあそうなるわな。滅多に感情を表に出さねえ卯ノ花にもそんな一面があつたとは、コイツも初めて知つたんだろう。多分。

「……ありがとうございました。母はあまり自分の事について話しませんから、天示郎さんから話が聞けて嬉しいです」

「オウ」

……顔つきが変わつたな。

いつ泣きべソかき始めてもおかしくなかつたようなさつきまでよりや、大分良い。自分のやるべき事を捉え始めた奴の顔だ。

「僕は……そろそろ上がります」

「まだ何か、俺に訊く事はあるかよ?」

「大丈夫。——もう、大丈夫ですよ」

???????

僕は、他人には決して言えないある記憶を持つてゐる。

この世界の成り立ち、数百年後に起ころる出来事を示すもの……そして何より「卯ノ花
輔忌が存在しない世界」がどうなるかを、生まれた時から大まかにだが知つてゐるのだ。
物心のつき始めたばかりの幼い頃は「記憶」と「現実」の区別がつかずに戸惑つたも
のだが、今となつては割り切つてゐる。

当然初めは思い違いや、妄想の産物か何かだらうと疑つてゐた。見たことも聞いたこ
ともない事柄を、しかし「知つて」はいるなど……荒唐無稽もいい所だと自分でも思つ
ていたからだ。

それでも僕はこの記憶が事実のみを示してゐるという事を理解せざるを得なかつた。
現在の時点で確認できる範囲だけでも「記憶」との相違がほとんど見受けられなかつた
からである。

例えは——死神が戦闘に用いる呪術の一種『鬼道』についての記憶は、その番号や詠
唱の言靈が教本に記されていたものと完全に一致してゐた。

例えは——回道を開発した天示郎さんが『零番隊』へと近いうちに昇進するらしいと
いう事を、噂が流れるずっと前から知つてゐた。

いずれも僕が知る筈のない事を事前に知つてゐたということになり、どうやら思い違
いなどではないのだと確信するほかなかつたわけだ。

藍染惣右介の野望、滅却師の王ユーハバツハによる二度に渡る尸魂界への侵攻。こ
そ

の記憶が計り知れない価値を持つという事は、幼いながら当時の僕にも理解できた。何せ未来を知っているということは、自分に都合の悪い出来事のほとんどに対しても有利に動くことができるからだ。

やりようによつては、多くの人が傷付くであろう災いの芽を摘むような真似だつて簡単にできてしまうだろう。

僕はまだ、弱い。肉体的にも、精神的にも。

この記憶をどう使えば良いのか、それすら持て余しているのが現状だ。僕にとつて確定した未来とは、緻密に組まれた積み木の塔も同然だからだ。何処を動かせば何が起きるのか、どれだけの力を使えば結果が変わるので……願うならば、こんな記憶など持つて生まれない方が良かったとさえ思つたことも一度はあった。

しかしだ。

今の僕にはやらなければならぬことがある。

卯ノ花八千流、僕のたつた一人の母。

千年後の未来に於いて、最強の男に『剣八』を託す女。^{ひと}……更木剣八に、その手で殺

されるはずの人。

彼女は未来で言つていた。

——『それこそが 私の罪』

彼女は未来で言つていた。

——『役目を果たして死ねることの、

何と幸福であることか』

なるほど確かに、母さんは更木剣八と戦い、そして死ぬのが何よりの望みだつたのだろう。僕が勝手にしやしやり出て、その生涯を賭した決意を反故にする権利などというものは何処にも無いのかもしれない。

加えて言うなら、母さんは側から見てもあまり良い人物だとはとても言えない。尸魂界きつての大悪人だと後ろ指を指される事も、僕が周りからその煽りを受けた事だって一度や二度ではない。人としても母としても失格で、その命を救う価値も理由も無いのだと、見限つてしまうのが当然なはずだ。

だが、ああ、だが――！　この言いようのない思いは何だと言うのか。

救わなくては！ 母さんを、『卯ノ花剣八』を、僕が、この手で！

何が僕をここまで熱くさせるのか、自分自身でもとんと見当が付かない。無意識に刻まれた親子の情がそうさせるのか、『何者よりも強くあれ』とする剣八の血が、当代の剣八を超えたという証明を欲しているのか、それは全く分からぬが、そんな事はどうだつていいのだ！

彼女がそれを拒んできたら？ 『ブン殴つて言うこと聞かせた後に無理矢理治す』。目を覚まさせる！ バカげた剣八の呪縛なんてもの、僕がこの手で断ち切つてやる。やるべき事は既に見定めたからだ！

僕はまだ、弱い。精神的にも、肉体的にも。

何を以て母さんを『救つた』とするのかはまだ分からぬし、今の自分にそれだけの力があるとは思えない。だが確実に言える事は——この使命を、更木剣八なんぞにくれてやるのだけは、それだけは絶対に許せないって事だ！

百年、千年経どうとも……成し遂げて見せるぞ。
必ず——。

ぼくの世界は

走る、疾る、奔る。

『ハアツ、ハアツ……!』

護廷十三隊への入隊を果たしたばかりの少年は今、ただ只管ひたすらに走っていた。

それは何かしらの目的を持つての事ではない。とある根源的な衝動とでも言うべきモノ——つまりは“死”から逃れようとして、どこへ向かうでもなく、その恐怖から背を向けてただ逃避しているに過ぎなかつた。

敵と戦い、道も半ばに殺されるのは確かに恐ろしい事だ。それでも彼には護廷の二字を背負う者としての自覚があった。いざ強敵との戦いに敗れ、戦いの内に死ぬとして、その運命を一人の戦士として受け入れる覚悟もあつた。だが『これ』は何だ？ こんなものは……到底受け入れられる物ではない。

——塵芥にも劣る矮小な存在として、誰にも気づかれぬままに“消滅”する最期などと、いうものは。
カツ、と。

『ひ、ひいツ!?』

刹那、瞬く閃光。この戦が始まってから何十回と経験したその『兆候』に対し、無駄と知りつつも瓦礫の陰へと転がり隠れずにはいられない。

それが自分へ向けられた物ではないのだと、そう理解はしていたとしても――直後の事だった。

少年は、その時自分の意識がぶつりと途切れたのだと思つた。あらゆる感覚が搔き消え、耳も、目も、そして肌に感じていた焼け付くような熱気さえもが無くなつてしまつたのだと。間違いだつた。

ゴバツ――!!

それは、もはや爆発とも呼ばぬ“何か”であつた。体中のあらゆる内臓が、腹の中に直接巻き起こつた台風にすり潰され搔き乱されるかのような衝撃。地獄の窯に放り投げられ、一切の容赦も無く吹き付けられた業火をも生温いと思わせる程の爆熱。

気づけば少年は、焼け焦げた土が露出する通りへと身を投げ出していた。この戦いが始まるとまで整然と敷かれていたはずの石畳は見る影も無い。身を隠していた瓦礫の山はいつの間にか消えていたが、それは自分が吹き飛ばされたのか、あるいは瓦礫の方が根こそぎ碎け散つたのか。それもどうでもよかつた。

既に上下の感覚も分からなくなつてゐるが、それでもどうにかここを離れようと立ち上がろうとして——そして、見てしまつた。
でろり、と。

半端な形を保つてゐるだけに最悪だつた。

それは、見知つた死神の焼死体。

とりわけ仲が良かつた訳でもないが、比較的歳の近い者同士として何かと言葉を交わす事もあつた。それが、ぶくぶくと醜い水膨れに覆われ、苦悶の形相を浮かべて死んでいた。死因は全身を覆う火傷跡からも、それこそ火を見るより明らかだつた。

『うつ……』

喉の奥から込み上げるものを感じ抑え、驚愕に目を見開きながらズルズルと後ずさる。とにかく、とにかくこの場所から少しでも離れたくて……そしてその背中が瀕^{せい}靈廷^{れいてい}特有の入り組んだ路地の壁に当たつた時、少年はへたりと座り込んだ。

『死んで、たまるか……』

こんな所で、死んでたまるか。

そう少年は謔言^{うわごと}のように呟くも、この地獄からどうやつて生き延びるのか、それは全く絶望的な事のように思えてならなかつた。

自分の持つ“力”の象徴——己が魂の写し身である斬魄刀をその手に握るが、これが

一体どれほどの慰めになるものか。

そしてその時はやつて來た。

破壊の爆炎、世界を灼き壞す茫漠たる靈圧が、再び急激な高まりを見せていき――

『ああ……あああああああああああああああああああああああああああああああ』

!!!!!!』

???????

「――ああツ!?

極限まで高まつた恐怖にとうとう耐え切れず、卯ノ花輔忌たすきは布団からガバリと身を起こした。

くそ、あの戦争。ああ……なんて目覚めだ、寝汗も酷い。

「うつ、ぐ……」

ふさま

裸越しに戸外を見遣ると、群青色の朝日が薄暗くではあるが部屋を照らしていることから、どうやら明け方であるらしかつた。起床には少し早い時間だが……またあの悪夢を見るのだとと思うと、とても寝直すような気分にはなれないな。

「はあ……」

ああ、それでも碌に眠れていよいのは確かなのだろう。起きて身支度を済ませようと

立ち上がるのも気怠いように思えて、僕はそのままだらりと布団へ体を投げ出した。

「何やつてんだろ、僕……」

ポツリと。誰へ向けてでもなく口から漏れ出た呟きは、滲みるように冷たい明朝の空氣へと溶け込むように消えていく。

臆病者——僕の、僕自身に対する今の感情はそれに尽きる。

薄く視界が滲んでいるのは寝起きで頭がはつきりしないからか、それとも……

「御早う、輔忌」

「うわ——ツ?!?」

ビツツクリしたあ!?

背筋が凍るように低く静かなその声が聞こえてきたのは、光の差し込んでいる襖の側から僕を挟んで反対の方からだった。……あれ、かなり前にも同じような事があつたような気がする。

「か、母さん!」

落ち着いて目を凝らして見てみれば、そこに居たのは見知った女性——僕の母親でもある、卯ノ花八千流その人だった。

真麻の肌小袖に身を包んで佇む彼女は、どうやら枕元に座つて僕の寝顔を覗き込むようにして見ていたようだ。

「ど、どうして僕の」

「寝言が耳に障つたので」

「部屋に……あ、ハイ……」

聞こえていたのか……。母さんの寝間はこの部屋の隣だから、確かに声が漏れたりすることもあるだろう。

しかし、それにしても迂闊だつたな。これはマズいぞ。毎晩のように見るあの悪夢も……それを母さんに知られる事に比べれば、なんて事はない。

だから今まで必死に隠し通してきたのだが――

???????

十年前、首魁であるユーハバッハの率いる滅却師^{クインシ}の軍勢が戸魂界へと攻めて來た。

僕は今の時点で母さんが『剣八』であること、天示郎さんが護廷十三隊の隊長であることから、今が「記憶」の中の黒崎一護らの戦いから千年以上前の時代」だろうとう予想を付けていた。そう遠くない未来において滅却師と死神の間に巻き起ころる戦争

を、僕は知っていたのだ。

正直言つて、僕はこの戦争に對してさしたる危機感というものを感じていなかつた。

『記憶』の中で千年後のユーハバッハが『殺伐とした恐るべき殺し屋の集団』と形容した通り、この時代の護廷十三隊の戦力は正しく強力無比。安寧を得ると共に『大義』が枷となつていった千年後のそれとは全く異なる、純然な『武力』のみが寄り集う魔窟——既に結果を知つていたというのもあるが、それを差し引いたとしてもこの時代の十三隊が『敗北』する等という未来は微塵も想像できなかつたからだ。

蹂躪。この戦を表現するとして、これ以上に適當な表現は他にないだろう。侵略者である滅却師の部隊は次々と壊滅し、ユーハバッハでさえも一刀の元に斬り捨てられたといふのだから、両者に隔たる実力差は明らかだと言えた。

結局のところ、この時点での滅却師が死神に勝てないのだという僕の予想は当たつていた訳だ。

——たつた一つの誤算を除いては。

護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國。^{やまもととうりゅうさいしげくに}あの怪物の暴挙を、僕は生涯忘れはしないだろう。

未来においてユーハバッハは彼を『部下の命にすら灰ほどの重みも感じぬ男』と表していたが、あれはその程度の言葉で收まるようなものではなかつた。

僕は、その脅威に心の底から震え上がった。

滯靈廷を踏み荒らされ激怒した総隊長は、ものの一日で何千という滅却師を殲滅した。だがその過程に於いて……尸魂界全土を焼き尽くす事になろうと、彼は欠片ほどの躊躇いすら見せなかつたからだ。

炎熱系最強にして最古の斬魄刀、流刃若火の卍解『残火の太刀』。

その力は今回の戦争でさえ一部のみしか振るわれる事はなかつたが、それはこの際問題にはならない。重要なのは、そう。『斬るもの全てを爆炎で灼き尽くす業火の剣』が、その力を殆ど無差別に撒き散らせば一体どうなるのかという点だ。

結論から言おう。

この戦争で隊士の半数以上が犠牲になつたが、その八割は『残火の太刀』の爆熱に灼き殺された。

前線で戦つていた三名の隊長、二十六名もの副隊長以下上位席官が成す術もなく灰と化したのだ。

???????

尸 魂界は文字通りに“半壊”した。

この十年で瀧靈廷は徐々に復興の兆しを見せているが、人々の心に刻まれた傷はあまりに大きく、深かつた。

あの地獄から辛うじて生き残つた僕も、今なお『あの日』の悪夢に苛まれている。

僕は、戦いは怖くない。

東仙要はそれを悪徳と断じるだろう。だが、こんな僕にも『剣八』の血が流れているからか、或いはこんな世界に生まれ落ちてしまつたからなのかは定かではないが、剣を取り敵とまみえる事に恐怖を感じた事は一度としてない。

しかし……僕は今、“前に進む”ことを躊躇している。

この世界には元柳斎を遙かに凌ぐほどの敵がいる。僕の力など足元にすら及ばないような、世界を破壊する力を持つた存在がいる。

生まれた時から知つてしまつてゐる僕は、それに抗うのがたまらなく怖い。抗いようの無い巨大な敵に「もしかすると無駄かもしれない」と知りながらも抗うのが、この身にとつて度し難い程の恐怖なのだ。……そして更に厄介な事に、僕を真に苦しめる原因は恐怖そのものではない。

“母さんを救いたい”という願望が、この件を通してさえ只の一度も揺らがなかつた
という事実だ。

本当に、『諦めよう』などという考えがほんの少しだりとも湧いてこないのだ。

刻み込まれた傷を無視し、この衝動とでも言うべきモノが暴れ狂つてゐる。諦めてしまえば苦しまなくて済むのに、どうしても戦いの道を降りる事ができない。

そうしてそこから、更なる焦燥が湧き上がる。渦巻く意思の力とは関係無しに、この身体が既にして戦いを拒むようになつてしまつてゐるのだから。残火の地獄が事あるごとに脳裏を過り、剣を取ることさえままならない。迷いを晴らそうとどれほど鍛錬に打ち込もうが、今日に至るまで克服の兆しさえ掴めていない。

ここまで来てしまうと、自分の精神状態がいかに『異常』なのかを嫌でも理解させられてしまう。理由が存在しない、半ば本能的とすら言える、狂おしいほどの『救い』への渴望。矛盾を孕んだ内心に、しかし葛藤は含まれない。

だからといってやる事は変わらない訳だが、生きにくい性質たちを持つて生まれたものだと自分でも思う。こんな時だと尚更だ。

「——先程からそう俯いて、如何かしましたか」

「あ、ああ……大丈夫、です。夜分遅く、お騒がせして申し訳ありませんでした」

「…………」

この苦悩を余人に悟られる訳にはいかない。

天示郎さんが以前話してくれたことが本当なら、戦いに苦しむ僕を、母さんは戦いから遠ざけようとするやもしれないからだ。『剣八』絡みの問題を解決するのに必ずしも武力が必要だということは無いのかも知れないが、はつきり言つてそうなる可能性は高くなんだろう。

どちらにせよ、僕自身の都合や放棄ほうきで『選択肢』をみすみす捨てるような真似はこの衝動が決して許さない。

「そうですか。それにしては、今晚もまた随分と贋うなされていた様ですが」

「……つ」

だというのに今、それを他ならない母さんに問い合わせられるという失態を演じている。

『あの日』の悪夢を見る事は何度でもあつたが、その度に僕はそれを悟られまいと、必死に声を押し殺してきた。それを下らない寝言なんかで、今日に限つて――

「え?」

『それにしては、今晚もまた随分と麿うなされていた様ですが』

母さんは今、何と言つた？

『それにしては、今晚もまた随分と――』

それは、つまり、

『今晚も、また』？

「輔忌」

はつ、と。

掛けられた声に向き直る。対面に佇む母さんは、何時もながらのひどく読みにくい表情でこちらを見つめていた。

「貴方がこの十年間ずっと、『あの日』の恐怖に呑まれて過ごしていいたことは知つていました。……同時に、どうやらそれを私に知られたくないらしいのだとも」

「なん、で」

「その思いを尊重し、私は『然るべき』時が来るまで知らぬ振りを通してきましたのです。分かりますか？ これを今日打ち明けたという事が、一体何を意味するのか」

あまりの事に思考が追いつかない僕を横目に、母さんは――初代『剣八』は、その場

からゆるりと立ち上がった。

「今が『その時』だと云う事です。行きますよ、輔忌。十一番修練場へ」

その時だつた。

くう――

「……ん?」

突然にしてその場に響いた微かすかな音に、僕は思わず眉を顰ひそめる。

何の音だか分からずに当惑しているのではない。むしろ、それは今まで生きてきた上でかなり聞き覚えのある音だつたが、あまりに場にそぐわないものだつたので混乱しているのだ。

それは、腹の虫が鳴る音だつた。

「…………」「――

誓つて言うが、僕ではない。するどこの場にはあと一人しか居ないわけだが。いや、

しかし、それは……

「……あの」

あさげ

「その前に朝餉あさげ 朝ごはんのこととしましようか」

「あの、もしかして、一晩中枕元に座っていたんですか……？」

「何か？」

「いや、その……はい」

とても目を合わせるような真似は出来なかつた。

ただ、伏目ながらもちらりと上目に視界に入つた限りで見たものを言わせて貰うと——その時の母さんの顔は、まつたくいつも通りの、しかしどこか空恐ろしいものを感じさせる無表情だつた。

???????

十一番修練場。

その名の通り、十一番隊が領有する修練場の一つだ。十三隊の中で最も広い敷地面積を誇るだけでなく、総隊長率いる一番隊のそれに匹敵するほどに管理体制が厳格であるという事も知られている。

“記憶”の中の更木剣八はこういつた事にも無頓着だつたために隊員の風紀が問題視されていたきらいがあるが、『身内の恥は隊が恥として雪ぐべし』とする現隊長の母さんが取り仕切る今の十一番隊はそういうふた横暴さは見られない。

……その代わりにこの時点の十三隊をして随一と言えるほどの剣?とした空氣や殺伐さは、もはやある種の血生臭ささえ漂わせているほどではあるのだが。

「貴方が恐れているのは『巨大な力』。人という生き物がどう足搔こうとも抜き差しならない様な事態に陥つた際に感じるものです。其れを貴方は、先の大戦にて解放された山本重國の正解に見ていく。相違ありませんね?」

「は、はいっ」

三尺下がつて師の影を踏まず。修練場までの道中を母さんの……いや、先生の後に付き従いながら、僕はこれから行うことの説明を受けていた。

「正解を持つといふ事は、『一つの世界』を掌の上にする事と同義だと言えます。解放された靈圧は文字通りに場を塗り潰し、支配する」

正解。死神が用いる斬魄刀戦術の最終奥義であり、その戦闘能力は第一段階解放の始解から五~十倍とも言われている。『記憶』から数々の隊長格を始めとした死神たちのそれを知つてゐる僕としても、実物を目にしたのは『残火の太刀』が発した余波のみだ。

「個々の世界を現に映すその力は往々にして相対する者を圧倒し、膝を突かせるべく振るわれる事でしょう。ですが同時に、己の世界を持つ者ならば身を守る術もあるうとうもの」

「それは……」

「そう。貴方が内面に巣喰う恐怖——“あの人”的世界を打ち祓うための唯一であろう方法です。心傷もある程度落ち着き、それを成すに足る実力を付けたと判断したからこそ、今が『その時』です」

——正解なさい、輔忌。

そう淡々と言い放つた先生に、“出来るだろうか”と僕は思う。しかし同時に、この胸に熱く滾る使命感は“やるしかない”と吠え猛る。

何しろ自分一人では手掛かりさえ掴めなかつた暗闇の道に、救うと誓つたその人に手を引かれてまでここに立つてゐる。そして何より……

「直々に御指導頂くとあつては、先生の顔に泥を塗る訳には行きません。必ず……必ずやり遂げて見せます……！」

この人となれば、僕は何だつて出来るはずだから——。

「ああ、此度の卍解修行に私は関与しませんよ」

「は？」

意気込みも新たにいざ斬魄刀を抜こうとした瞬間、唐突にそんな事を言われた僕は思わず間の抜けた声を漏らしてしまった。

え……いや、それってどういう事？

「卍解の修行はこの上ない危険が伴う過程であるという事は語るまでも無いですね。そうなると、つまり……私では、果たしていざと言う時に收まりが付くものでしようか。そうは思いませんか？」

「ええ……？」

「天示郎が側に居れば”万が一”は防げたのでしょうか、あの男ときたら肝心な時に限つて『手が離せない』等と……瀧靈廷の復興に手を拘わされているのだと分かつてはいても、傍目には負傷者と共に湯に浸かっているだけのようにしか見えないというのが厄介なものです」

「あの、ちょっとといいですか……」

「零番隊への昇進を急かされてまで尚留まつて いるというのだから、まさか嘘を吐いて
いるとは思えないのですが……まだ何か？」

『いざという時』つて、まさか随分前に僕の骨を折った時の話ですか？」

「…………」

図星だ、これ……。

まさかまだ気に病んでいるとは思わなかつたぞ。らしくないと言えばいいのか、らし
いと言えればいいのか測りかねるな。

「そういう訳で、貴方の修行は別の人が監督します。さあ、着きましたよ』

どういう訳なのかはさっぱりわからなかつたが、いい加減これ以上触れると後が怖い
と察した僕は、大人しく指示された件の人物へと集中することにした。

「吼翔！」
〔くうとうび〕

「…………隊長？ こんな朝ツパラから呼び出し、一体どうなすつたんです」

「あの人は…………

見覚えがある。というか、ほぼ毎日のように見掛けているまであるような……話をし
た事こそあまりないが、僕はこの人を知つている。

「理由も話さずに呼び出したのは謝罪します。さて、用事があるのはどちらかと言ふと

私では無いのですが……」

「あつ、はい！」

言いつつこちらを流し目に見遣った先生の意図を読み取って、僕は慌てて挨拶をした。

「吼翔副隊長、お早うございます」

「おお……？　ああ、隊長のセガレか。こうして話すのは久しぶりやな。しかし、なんでまた俺が呼ばれたん——」

「——『正解』の修行を」

僕がその単語を口にした瞬間、元々やや硬い彼の表情が輪を掛けて引き締まつた。

そうだ、この時代の十三隊はまさに比類無きほどに強大な勢力を誇っている。その中でも戦闘専門、最強と名高い十一番隊の副隊長が、正解を習得していらないなんて事は有り得ないのだ。

少々逡巡する素振りを見せた後——身の丈六尺およそ180cm以上は明らかに超えるだろうという黒髪の大男が、確かに隊長格の威厳を伴つて声を放つた。

「そうか。……ええわ、付き合つたる。だが『覚悟』せえよ？　生半可なヤツに扱える力とちやうねんぞ」

「……ええ、承知の上です！」

「わかった。十一番副隊長、吼翔権十郎くうとびごんじゅうろうが面倒見たる。精々くたばらんようにな」

深淵の領域

それは、まるで水底に墜ちゆくかのようで――

意識はより深く、より奥の底へと溶け落ちる様に沈み込む。

形かたちの名は『刃禪』と云つた。

』……』

然后、青年の裡うちで何かが切り替わる。

薄く目を開けると、辺りはいつの間にか広がっていた“薄暗い陰”に覆い尽くされて
いる。

夏日が燦々と輝いていた外の風景とは明らかに『ちがう』が、――変化はそれだけに
止まらない。

ぶよ、ぶより

草履越しに鈍く伝わるその不気味な感触は、まるで地面に敷かれた動物の皮の上を踏
み締めているような錯覚を青年に抱かせた。

おおよその人間が“不気味だ”というような感想を抱くであろうこの感覚は、当の輔

忌にとつても好ましいものではなかつた。

だが、それも触覚で感じられる不快感など遙かに凌駕するほどにおぞましい、とある一つの事実の上に成り立つてゐるちっぽけな要素に過ぎないのだと考えれば、所詮は瑣末事の域を出ない程度のものだつた。

この空間は——總て、人皮で出来てゐる。

この事実を踏まえてさえ「ああ不気味だ」等と、これを知る以前と変わらない限りの感慨を持てる人間がどれだけいるだろうか。加え、他にも“もの恐ろしさ”を構成する要素が数え切れないほど点在する。

完全に閉じた闇には決してならない程度の厭らしい薄暗さ。

どこにも背中を預ける事が出来ない、四方へと果てしなく広がる空間。

それにも関わらずどこか閉塞感を感じるのは、これが天井だとでもいうように、地上数間の上方からは床と同じような人皮で空全体が覆われてゐるからか。

——そして何より、人皮の表層に何万と張り付く『目』。

人間のそれより何倍も大きい『目』は、一定の感覚を置いて床と天井の全体をビツシリと覆つていた。ここに来る度少しづつ観察した限りでは、これらの視線が一齊に輔忌

へと向けられる事は無いらしいが、こちらの動きに対してはある程度の反応を見せるようだつた。

ぎよろ、ぎよろりと、その動きは中途半端な知性のようなものを感じさせるだけに却つて見る者の恐怖を煽る。

初めて自分の精神世界へ入つた当時、輔忌はとある一人の滅却師を真つ先に連想した。

『F』の聖文字を持つ星十字騎士団、恐怖のエス・ノト。それは大量の目玉に囲まれた不気味なこの空間が、彼の『滅却師完聖体』である神の怯えの領域空間と酷似していたからに他ならない。

無論、例え大まかな特徴に相似している点が多々あつたとして、本質的にまで同じようなものかと問われるとやはり首を傾げざるを得ないのだが。

神の怯えとは異なり、こちらの目玉は球状に場を取り囲んでもいなければ斜に走る継ぎ目もない。そもそも死神に生まれた輔忌は、生糞の滅却師であるエス・ノトとは何らの関係も無いのだから。

『…………』

輔忌は、当然の事ながらこの風景が好きではなかつた。

それは己の精神が『恐怖』を象徴する悍ましき能力に相似するという事実によるも

のであり、人体で塗り固められた冒涜的な空間に対する、ごく一般的な感性からなる嫌悪感によるものである。明々白々たる感想だと言えた。

だが……何か、それだけでは決して無い。単なる嫌悪感だとか不快感だとかとは全く異なる、本能的な何かがあるような――

『全く、もつて……忌々しいな……』

ただし、今回はそんな事を考える為に此処に来た訳ではない。

暗く昏い、皮肉を象る隙間の世界。かたどここへ立ち入った当初の目的を果たす為、生々しい弾力を返す肉の足場に歩を進めようとして――

くひつ

小さな、しかし強烈な存在感をも同時に伴う、どこか調子の外れたような、笑い声がした。

『……居るんだろう?』

背筋に滲む昏い怖気を敢えて無視しつつ、輔忌は声の出所に確信をもつて問い合わせる。

くひひひ

『今日、僕が……何故貴様に会いに来たのかは分かつているだろう。出て来い……』

くひつ、ああ、勿論だとも

恐ろしく低く、嗄れしゃが、醜い、そして恐らくは男声。しかし氣のせいだろうか？ 調子つ外れの笑い声の中にだけ、時折まるで女性のような淑やかさが垣間見られる。

然れどもその淑やかさの裏には、声の主が單なる惡意をもつて意図的にそれを作り上げたに過ぎないのだという——則ち“底意地の悪さ”とでも言うべきモノがひしひしと感じ取られた。

ひたすらに醜いだけの声より、そうした一部の行き過ぎた清らかさが却つて聴き苦しさを助長させる。

人の不安を徒に煽り高める為だけに絶妙な加減を施された、相當に明確な悪意がそこにあつた。幽かなその声がこの日初めて意味のある言葉を発した次の瞬間——それは現れた。

否、それは殆ど染み出すと言つた方が適當かも知れない。

辺りを包む薄暗闇の内から、まるで紙に水が染み込む際に色が変わるように。その中の何処からとも知れず、薄つすらと、ゆっくりと姿が浮き出る様は、正に染み出すとしか言いようがない。

くいひーいひひひッ

すぞぞつ……と、そこに現れ出でたのはどこか海洋生物を思わせる、ぬらぬらと黒光りした皮膜の塊。輔忌青年に倍するほどの背丈を持ち、ぶかぶかに広がつたヒダを全身に纏い引き摺つている。

長身の割に瘦躯であるためか遠目に見れば外套を着込んだ紳士のようにも見えるが、それは正しく、異形の骨肉が寄り集まる怪物であつた。余つた皮に覆われて元の骨格す

ら判別できない顔をニタニタと嗤いに歪める様はひどく不快で、醜悪だ。

おまえの求める力は、ああ、確かにわたし가持つていても。くいひ。さあ、それが欲しければこつちにおいて――――

『…………』

その甘言に従つた末に何が『始まる』のかは、青年にとつて知る由もない。

だが、だとしても、それが少なくとも歓迎すべき事柄ではないだろうという事ぐらいは確かだと、悪魔のような怪物の嗤いを見て理解している筈なのに。
気づけば既に、輔忌は己の直感に背を向けていた。

くいひ……

一步、また、一步と足を踏み出していく。

けれど、平時の彼を良く知る者ならば分かるはず。

さあ、こつちだ……

どこか熱に浮かされたようなふらふらとした足取りは、未知へと踏み込む勇気だといふ挑戦に値する勝算だとか、そういうふうな捨て鉢の態度がありありと見て取れた。

言われた事をそのままに従い、置かれた状況を吟味しようとすらせす、己の意思などまるで存在しないかのように。

『……次は、何だ?』

彼我の距離は見る見る詰められていき、手を少し伸ばせば届くだろうという所まで縮まつた。

“近づいて来い”という言に則して見せた青年に、皮膜の怪物はたつた一言、とても奇妙な言葉を口にする。

わたしを寄越せ

ここに来て青年は疑いすらしなかつた。

腰へ差した斬魄刀を抜き取り——怪物に向けて柄を差し出す。

いい子だ

また怪物は、それをごく自然な、そうして当然だとでも言うようなやや尊大ぶつてさえいる様子で、長く鋭く伸びた悪魔のような五指を器用に操つて掴み取つた。鞘から刀身を抜き放ちながら、それは唄うように語る。

おまえはわたしに刀を渡したから、これで丸腰になつたというわけだ。でも、わたしはおまえから刀を受け取つたから、ほら、こういう風におまえを簡単に刺して殺せるぞ。

そう言いながら、怪物は今しがた受け取つた斬魄刀を輔忌の胸に突き刺した。どくどくと血が流れて、

え
つ
?

で、まあ、死ぬ――

どさつ、と。

それは人が倒れる音では無かつた。

事切れるのも時間の問題というような、力も命もぐつたりと抜け切った肉の器が、た
だ在るがまま地面に落ちるだけの音だった。

『かツ、あ――、?』

くいひツ、く、くいひひひひひひ

調子つ外れの狂つた嗤い声と死にぞこないの体から漏れ出す喘ぎだけが、肉と目玉の
スクエアに虚しく果てなく広がっていく。

胸を刺し貫いた、どうしようもないほどの痛み、苦しさ、そして驚愕。取りかえしの
つかない事がおこったのだという認識だけがきけん信号のように青年のあたまをかけ

めぐり。

その様なかんがいすらも、
いのちと共に、
ああ、ながれでて、
きえ　る　？

これはつ、くく、"予想してなかつた" つて……?

大間抜けが

そこで見ていろ。おまえの全てを支配してやるぞ

さあ殺せ！ 狡猾に、巧みに、鮮やかに艶やかに！

何より傲慢に殺せ！

殺せ、殺せ

.....

??????

「はっ？」

いつの間にか布団の中に横たわっていた体を起こしながら、卯ノ花輔忌たすきは我ながら気の抜けるような呆けた声を漏らしていた。

「……、…………？」

訳がわからない。

直前の記憶がどうも曖昧で、自分がどういった経緯で寝具に寝そべっているのかもはつきりしない。

とりあえず辺りに注意を向けてみると、何やら幾つかの薬品を混ぜたような、しかし良く嗅ぎ慣れている匂いがつんと鼻をついた。

「ここは……四番隊舎？」

より正確に言えば、併設されている救護詰所か。

時刻は真夜中のようで何もかも見え難い。それでも少し首を横にして見回してみれば、自分と同じく横になつている人たちが何人か視界に入つて來た。

さて、すると僕はここに來るまで一体何をしていたんだったか。曖昧な記憶を必死に

遡つてみると……

「つ！…………う、あ」

突如、刺すような痛みが頭に響くと同時に、急激に記憶が溢れ返ってきた。

「……そうだ、確かに副隊長と正解の修行をしていて、『対話』の為に刀禪を組んでいたんだ。それで……」

——自分の斬魄刀に、殺された？

「…………」

いや。

たかが『対話』がこんな結果に終わつたのも……僕が不甲斐無いからなのかも、知れないな。

吼翔副隊長との正解を習得する為の鍛錬が始まつたのは、もはや四年も前のこと。にも関わらず、正解を得するに至るまで必要な二つの条件のうち、僕は未だ前提となる『具象化』の糸口さえ掴めていないのだ。

具象化を物にするまでには、才ある者でも最低で十年以上の年月を要すると言われている。ならばその半分にも満たない時間を使つてしまつたとして、何をそう焦る事があるだろうかと人は言う。

だが、僕は一刻も早く力を得なければならぬんだ。この身に纏わり付く獄炎の幻惑

を取り除く為には、最早それ以外に方法は無いのかも知れないのだから。

そして何より——こうして足踏みを続けている事がそのまま“母さんを救う”といふ……生涯を賭した目的から自分を遠ざけているのかと思うと、それこそが堪らなく恐ろしい。

「クソツ……」

今考えれば、我ながらどうかしていたとも思う。まともな思考を持つていたなら、幾ら自分の斬魄刀とはいあんな奴に迂闊に近づくなどあり得ない事だ。

……とは言つたものの、もう他に方法が無かつた、というのも確かなんだよな。

「結局振り出し、か……」

この四年間、具象化はおろか対話にすら全くの進展が無かつたのも、全ては僕の斬魄刀が“あれ”だから。

来る日も来る日も「こちらに来い」の一点張りで、それは何故かと質問しようが全く同じ台詞を繰り返すばかり……“対話”をしている気にもなれやしない。幾年も同じやり取りを繰り返させられ、停滞の日々へと徐々に精神に焦りを募らせ始めた結果が——まあ、今日に至る。

しかし、今日の一件で流石に少しは目が覚めた。同じ轍は二度と踏まないだろう。

……それが再びの停滞を意味するとしても、僕にはもう、打つ手が無いのだから。

「……それにしても、ここまで僕を運んで来てくれたのは吼翔副隊長なのか？ 急に気を失つたものだから迷惑をかけたかもしれないな……」

そうだ、埒の明かない事を考えていても仕方がない。

今はそこが一つ気掛かりだ。直属の上司にここまで手間を取らせたとあつては申し訳が立たないし、流石に今はここを動けないが、これは後日改めて謝りに行かなければ

「あれ？」

ふと、違和感。

身を起こした時は周囲を確認するのに集中していく気づかなかつたが、両の肩口のあたりから妙な感触が……何かむず痒いような、そんな感じがする。

しかし暗くてよく見えない。何とは無い軽い気持ちで左腕の袖を捲まくろうとすると、できなかつた。

「え」

両腕が、無い。
右腕の肘から上、

左腕に至つては肩から丸ごと——切り落とされていた。

雨は未だ止まず

「うつ……うわああああツツツ?!?」

深く静かな真夜中の病室。

ふかふかの枕に頭を預け、ひどく疲れた体を休めようと気持ちよく眠っていた矢先。ハツと、突然に聞こえてきたとんでもない大声に俺は叩き起こされた。

「腕が、僕の腕が!!」

うおお、やかましい、クソやかましいぞ。こんな夜更けにバカでかい声を出しよつてツ。

「誰か——」

「五月蠅いんじやい!! 誰やこのつ、ふざけてンのか! ぶち殺したるぞコラ!!!」

俺の眠りを妨げやがったドアホへの怒りをめいっぱいに込めつつ、吼翔權十郎は寝具から飛び上がって猛烈な怒鳴り声を上げた。

「ひつ」

蚊の鳴くような声を漏らしたつきりドアホは押し黙りおつたが、むろんタダじやあ済

まさねえぞ。最低一発はぶん殴ろうという腹積もりで声がした方にズンズン向かつて
いくと……はて、腕だつて？

「この野郎、覚悟は出来てんだろう……ぬ、輔忌か」

「ふ、副隊長？ どうしてここに」

なんだ、隊長のセガレか。

すっぱりと両腕を切り落とされ、焦燥からかびつしりと冷や汗をかいている上司の息
子が目に入ってきた。

「…………あ、あの」

「…………」

…………どうやら顔を真っ青にしているのは、怒れる上司に出会でくわしたからつて訳じやあ
ねえだろう。そんな様子を見ているとバツが悪く思えてきた俺は、すわ噴火も寸前かと
いうほどだつた怒りが段々と収まつていくのを感じつつあつた。

ある意味では弟子とも言える小僧への“複雑な感情”をどう表したものか、暫しお互
いを気まずげに見つめあいながら言葉に詰まつていると……あああ、面倒くさい奴等が
来おつたぞ。相も変わらずドタドタと喧しい連中やな。

「如何なさつたか吼翔副隊長！」

「詰所は共同の施設ゆえ、夜半の騒音は謹んで頂きたく！」

「数男さん、数比呂さん!」

ちい、四番隊の副隊長と三席どののお出ましかよ。

性格からして真っ先に飛んで来そうなのは麒麟寺隊長やが、あの人はあの人で忙しいらしいからなア。

それというのも、はや十四年もの年月が経とうとしている滅却師^{クインシー}共との戦争がいまだに尾を引いておるからなんやと。

その爪痕は我らが瀬靈廷にいまだ根深く残つており、治療専門四番隊の長ともなれば以前のようには動けない、と、聞いたところによるとそうらしい。

……うちらの被害も大体は総隊長の仕業なんやけど、ま、それはさて置き。

「あのっ、夜中に騒ぎを起こしたのは申し訳ありません。でも、腕が……僕の腕はどうなつてるんですか!?」

「……！ 卵ノ花、それは……」

「いい、数比呂。あれについちゃあ俺が話す

「吼翔副隊長……」

……やつぱりあん時の記憶は飛んどるな。ま……その方がコイツにとつて“救い”

にはなるか。

遅からず説明しなけりやならん事だと、重い気持ちを抑えて俺は口火を切つた。

「単刀直入に言やあ——輔忌、お前の腕を切り落としたんは、俺や」「…………ッ！」

「だがまあ、ジツサイのところそれ自体は大した事やあらへん。……ああ、そうニラむなや。数男！」

餅は餅屋。この辺りは専門家に任せた方が良いだろうということで、俺は丸ぶち眼鏡の副隊長に声をあげた。俺の意図を汲み取った数男が輔忌の状態に説明を始める。

「はつ、はい。……よく聞くんだ、卯ノ花。君の両腕は殆ど完璧な状態で此方に保管してある。我々では迂闊な処置が出来ないのだが、つまり——」

そこで自分達の不甲斐なさを恥じ入るように一旦言い淀んだ後、救護隊の副隊長は努めて不安を煽らないような明るい声色で続きを口にする。

「麒麟寺隊長ならば繋げ直す事が出来る。手の空き次第に処置を済ませると仰つておられたよ。……いやはや、正直言つて、あれほど『綺麗な傷口』が戦いの中で付いたものだとはとても思えなかつた。君の副隊長がやつてのけた事は凡手の業ではないぞ。神業と言つても良い」

「余計な事は言わんとええ。つたく、つくづくお前ら二人に喋らせたら何を口走るか分

かつたもんじやねえ」

「…………治る……」

回道に明るくない俺がハツキリ言える事じやあないが、どうもそういう事らしい。自分の腕がキチンと元に戻るつてことを知った輔忌はというと、徐々に安堵の色を取り戻し始めていた。

だが……事の本筋はそこじやねえんだ。こいつはそれを、その顛末を知らなきやならねえ。

自分の口調が思つていた以上に重くなつていて自覚しながら、俺はゆつくりと言葉を紡ぐ。

「分かるか？」

そうだ。これほどの大怪我を俺との戦いで負つたのだという、その事実。同時に俺がなぜ四番隊の救護詰所で休ませていたのかに対する答え。

病衣の襟をべらりと捲り、首から下を隙間無く埋め尽くすように覆つている包帯を見せる。

顔色を驚愕に染めた輔忌を無視しつつ、俺はその包帯をおもむろに剥がしていく。数

男と数比呂がまた何か騒いでやがるが、知つたこっちゃねえ。

「殺し合つたんだよ、俺たちは。お前の腕を両方ブチ切つてよつ……そうして止めてな

きや、こつちが殺されてたんだぜ？」

そうして表れた、左腕の付け根。

斬魄刀を思いつきり突っ込まれ、めちゃくちやに搔き回されてドス黒く染まつた傷。凄惨な殺意の痕跡だけが、そこにくつきりと浮き出ていた。

??????

天示郎さんの尽力の甲斐もありすっかり元通りになつた両腕、それらをぼんやりと眺めながら、卯ノ花輔忌たすきは病室の天井に向かつて呟いていた。

「あいつだ」

いつまで経つても楽にならない現状に気が立つてゐるのだろう。“久しぶりに顔を合わせたと思ったら腕を切り落とされて運ばれてきた馬鹿”を処置する時の天示郎さんといつたら、それこそ怒髪天を衝くようだつた。

でも、彼は僕に“何があつたのか”とは決して問わなかつた。母さんから僕の状態を聞いていたのだろう。それは僕にとつては本当に、本当に有り難いことだつた。だつてそうじやないか。斬魄刀との対話に逸り、危うく同隊の副隊長を刺し殺しかけ

たなどと……一体、何と言つたら良いと云うんだ?

「…………」

先刻から薄暗くなり始めた窓の外にちらと耳をやれば、ザアザアという重たい雨音が辺り一面に響いていた。それがまるで今の僕の心境を体現しているようで……とかく、余計に気が沈む。

「あいつだ……」

再度、呟きを繰り返す。

無意識のうちに僕の体を突き動かしていたナニカ。吼翔副隊長から聞いた当時の僕の様子を鑑みるに、もはや確信をもつてそれを言い切れた。

『異変を感じ始めたのア、お前が刃禪を始めて半刻ばかり経つた時や。いきなりお前は——なんつーか、急に苦しむようなそぶりを見せて、ほんでブツ倒れた』

ようやくまともに動くようになつた腕で目元を覆いつつ思い起こすのは、詰所にて副隊長から語られた事の詳細だ。

『精神世界で何かがあつたつて事だけは分かつたけえ、すぐに俺は叩き起こしてやろうとした。あんまし適當な方法じやねえんだが、それでも応急処置ぐらいにはなるからな。だが……すぐにお前は起き上がつた。それも不気味なほど、何事も無かつたように平然とや』

『……今にして思やア、この時点でお前に意識は無かつたんやろうけどな』

『こちらに来てくれませんか』……「ヤツ」は、俺に向かつてそう言いおつた。当然俺は行つたさ。隊長にお前を任せとる身で、何かあつてから動くんじや遅いけえよ』

『そうして、そりやあ間違いだつた』

その『やり口』に、やはり僕はどこか既視感を感じていた。

それも当然だろう。……『こちらに來い』という台詞で相手を誘い込み、近づいてきた者を刺し殺す。それは正しくその当時、他ならぬ僕自身が身をもつて体験していたものに違ひなかつたからだ。

稚拙だが、狡猾。“相手に疑われてさえいなければ”という但し書きが付くものの、相手のカンがよほど鋭く、実力が高くなれば——その点で言えば居合わせたのが吼翔副隊長で本当に良かつたが——ほとんど確実に相手は死ぬだろう。そして「ヤツ」は今このところ、そのやり口を“疑われていない”相手に対してのみ向けている。

「——、

寝具のすぐ横を見遣れば、そこにそいつは在つた。

憎らしいほど自分の手に良く馴染む柄と、浅黒く染まつた緋色の鞘。それに納められ

たギラつくように鋭い刃は、いまだかつて斬れない物に出会つたことがない。不本意ではあるが紛れもない、相棒と呼ぶべきモノ。僕だけの斬魄刀。

斬魄刀は死神と寝食を共にすることとされている為、例え病室であろうと、……場合によつては独房の中のような場所であろうと、必ず近くに置かれるものだ。であるからして、それがそこに在ること自体に何らの際立つた事情があるわけでもない、のだが。ふと気づけば、僕はおもむろに眼前の刀を手に取つていた。

その行為に理由は無い。その筈だ。だが、どころか、それに止まらず——どうしようもなくやり場の無い感情にただ身を任せて、鞘から刀身を引き抜いていた。

戦時特例等非常事態下の外での『それ』が立派な隊規違反である事など、既に気にすらも留めていなかつた。

そうして、『呼ぶ』。

「開け」
ひらけ

酌奉嘶蜴
くみひきとかげ

直後。

変化は、呆れるほどに静かだつた。

その刀の形状を例えるならば、『古代遺跡のレリーフから直接飛び出してきたかのような』という形容を前提に語る必要があるだろう。波形に歪んだ長方形の幾何学模様があしらわれた精緻な掘り込みは、そのモチーフを全体的な形状に至るまで侵食させている。

しかしながら、その刃渡りが解放前に比べて確かに『短くなっている』というのは否めなかつた。

流石に脇差わきざしほどの短小ではないが、どちらにせよ殺傷力は多少なりとも落ちる。これは戦闘よりも形の上で優美を優先させた、古美術品のような斬魄刀と揶揄されても不思議ではないだろう。

だが。

先に語った形状の不利を根底から覆す、ある圧倒的なまでの特殊性がこの斬魄刀には秘められているというのは、『それ』を目でも見た者の誰もが瞭然として理解するはずだ。

「……戸魂界の歴史始まって以来、唯一にして初の事例、なんて言われるけど。こんな不祥が先輩になるなんていつたら、あの二人に悪いのかもな」

取り回しの容易な短い刃はその戦法の使い手にとつて有利にも働く。式撃決殺の“雀蜂”や爆風を生じる“断地風”的ような、殺傷能力の高さでリーチを補う他の小型の斬魄刀とはまた異なる形での矮小なる始解。

二刀一対。

解放と同時に左手の内に現れた、全く同じ形状をとつた二振り目。それが僕の斬魄刀“くみひきとかけ 酎牽蜥蜴”的最たる特異性だった。

「……花天狂骨」は、必要に応じて斬魄刀自身が片割れを産み出した

鈍に輝く双刃を睨みつつ、僕は斬魄刀の“二刀一対”について思いを馳せる。

「双魚理」……ああ、あとは“斬月”も。あれらの場合は、死神としての力とは全く異なる魂魄の力が裡に混ざっていたことが二振り目の存在に影響したんだと考えるのが妥当だろうな」

遠い未来の記憶によれば、二刀一対の斬魄刀は千年後に至るまでたつたの三組しか存

在せず、さらにその全てには“由来”と言うべきものがあつた。だが……：

「それなら僕の“蜥蜴”には一体——何の『意味』が在るんだろうな」

いくら思考しようと、応える者は、居ない。

???????

重ねて言うが、今この場で酌牽蠍を解放した事にさしたる理由は無い。ただ、『こいつ』なのだ。『こいつ』こそが僕を苦しめ、吼翔副隊長を傷付け、——そして恐らくは、あらゆる生命を殺傷することさえを欲望しているであろう邪悪の徒。そんな下衆が前回の刃禪で僕を刺殺し、意識を途絶させる寸前に放つたある一言を思い出す。

さあ殺せ！ 狡猾に、巧みに、鮮やかに艶やかに！ 何より傲慢に殺せ！ 殺せ、殺せ

—————

……あれは、何だ？

悍しいほどの悪意。人を傷付けようという意思。葛藤も、逡巡も、憎惡も理由も大義も鬱憤すらも無い。何も無い。ただただ何かを殺したくてたまらないというようにしか見えなかつた。あれはまさしく、化け物だ。そしてそんな斬魄刀を作つたのは、僕だ。

「は、はは……」

思わず笑いが漏れてしまう。だつてこんなの……笑うしかない。

僕はただ母さんを“救い”たいだけだ。本当に“救い”たくてたまらないのに、しか

し、その願いを悉く打ち崩しているのは、よりもよつて自分自身と同義たる斬魄刀に他ならない。

「ツ、うぐつ……!?」

と——鬱屈し始めた思考と共に、激しい頭痛が巻き起ころ。

もはや慣れた、とは口が裂けても言えないが。この現象に心当たりがあつた僕は、すぐさま酌奉蜥蜴の始解を解いた。重なるように一本の刀へと収束した斬魄刀を脇に放り投げ、苦しみ、悶えながら寝具に倒れ込む。

「く、あ……ツ!!」

また、まだ。

脳裏に文字通り焼きついた十四年前の地獄の光景が、鮮明に浮かび上がつて離れない。鼓膜を破るばかりの轟音、総てを紙のように吹き飛ばす爆風、そして、そして、……でろりと焼け焦げた、人の臭い。

あれ以来まともに刀を振ることさえ出来なくなつた僕が斬魄刀などを解放すれば、果たして如何なるかも知れないというのは薄々分かつていていた事だ。ああ——それでも、やらずにはいられなかつた。

発作のよう時に時折現れる幻影は今も徐々にこの身を削つてゐる。喉まで出かかつた吐瀉物を何とか押し込み、思う。

もう、時間が無い。

更木剣八をどうにかするとか、卍解を習得するとか。そんな悠長で先の長い目標を構えている暇なんて、何処にも残つてなどいないのだ。

こここのところ、力が先細るように目減りしていくのを感じる。長い間放置されてグズグズに腐った心の傷に、もはや体のほうが保たなくなつてきているのだ、と。

「ぐ、がはつ、げほツ……」

胸を搔き抱き、目に涙さえを浮かべながらうずくまる。

酌牽蜥蜴は強力な斬魄刀だ。並一通りのそれらと比べるならば、寧ろ突出しているとさえ云えるだろう。卍解さえ……『残火の太刀』と同じ領域である卍解さえ習得する事が出来れば、心へ巣喰うこの“恐怖”さえも母さんの言う通りに取り払えるのではないかと、そう思える程に。

だけど、そんなの……僕には無理だ。

「おい」

例え“力”を得たとして——内外すら問わず殺意を振り撒く斬魄刀。どうして己のものであると、そう胸を張つて言えるだろうか。

生命を預けるに足る、全幅の信頼を置けるだろうか？

「輔忌？」

前進を恐怖し、挙げ句の果てに自分自身さえをも遠ざけ、また恐れ……

「輔忌——……」

ぼく、は……

「呼ばれたら返事ぐれえしろやツ……」のボケがああ
!!!!

「散々呼び掛けてやつたのを片つ端から無視しやがつてよお！ 退院がてら人がせツツ
かく見舞いにでも来てやろうつてのに、おめーは自分の隊の副隊長を何だと思つとるん
や！ あア!?」

「つづあ…………！」

呆然。

突然の罵声と側頭部を通り抜ける拳骨の衝撃に何が起こつたか理解できず、僕はしば
らくの間口を半分開けて呆けていた。

ひとしきり捲し立てた後に、その誰かがこちらを見下ろしている。数日前の病衣と違
い、身に付けているのは黒色の死霸装。短髪黒髪の偉丈夫。そこに居た人物とは紛れも
無く——吼翔副隊長、その人だつた。

「も……申し訳ありません、全く気が付きませんでした」

「あーそーやろうなア！ 周りなんかちいとも気にしてなさそーやつたもんな！ こつ
ちが見とつて寒氣がするほど辛氣くつせえ顔しとつたでお前！ 昨日の朝飯何やつた
か思い出そうと考えとる猿か！」

「そ、そこまで言わなくても」

「あ“あ”!? 黙れたわけ馬鹿この舐めどんのかコラあ!!!」

「ちよ、やめつ、ぐぶ……ツ!!」

痛い痛い痛い!

あろうことか、副隊長は襟を引っ掴んでガクガクと首を揺さぶってきた! 今にも殴り付けられそうな勢いだぞ……!

こちらが全面的に悪いにしてもやや理不尽な仕打ちに涙目になつていると——どすん、という音を立てて寝具に腰を打ち付けてしまつた。半ば放り投げられるような形で手を離されたからだ。

次は何と言われるのか、当然僕は身構えていた。すると黒髪の大男は大きく息を吸い込んで……

「お前が何に悩んだるのかなんぞ、そのツラ見てりやすぐ分かんだよ!!」

——。

「えつ?」

「ああ、お前は結局なんにも言わへんかつたがな! その“酌奉蜥蜴”がクソ難儀な性

格した野郎だつて事ぐれえ、お前の刃禪の後のくつせえ顔を何百回も見させられた俺が
氣付かねえとでも思つてんか！ ウジウジウジウジよお～ッ!! それで大方こう考
えとんのやろ！ 『あいつを今の形にしたのは僕だ。僕にあんな一面があつたなんて
……』自分で自分に幻滅しどんのや。見下げ果てた奴だと思つとる！』

「そんな事は」

「バツツカじやねえのか」

僕の掠れるような声など耳に入れようとすらしていない様子で、吼翔副隊長は腕を組
みながらあつけらかんと、言い放つ。

「俺の親父は、お前の母ちゃんに殺された！」

「…………」

「隊長がまだ隊長じやなかつた、流魂街るこんがいでただ人を斬りまくつていた頃の話や」

今までの文脈を清々しい程に無視した唐突極まる告白に、僕の頭は真っ白になつた。

「う、そだ」

「何が嘘なもんか。息子のお前が、自分の母親がどういう人間か知らねえ訳はねえだろ

「なら、どうして」

「…………」

「どうして、そんな素振りを見せずにいられるんですか。親の仇が隊長を勤める十一番隊で、副隊長なんか」

返答が、ほんの少しの間だけ詰まつた、ような気がした。

「俺の親父は、そりやあ強え男だつた」

しかし、その沈黙が決定的なものになる寸前。

「——そして、呆れるほどに血の氣が多かつた。そんな親父はある日噂を聞いた。『幾度斬り殺されても絶対に倒れない』……それを指して自らを『剣八』と称した、ある女の噂」

「…………」

「お前、さつき言いおつたな。『親の仇の下でどうして副隊長なんてやつていられるのか』……『遺言』だよ。俺がガキの頃、斬られて俺の目の前で死におつた、クソツタレの馬鹿親父がただ一つだけ残していつたモンだ。『それ』を果たすためだけに、俺はここに居る」

どんな内容かは言えんがな、と副隊長は前置きしつつ、

「俺の言いてえ事が分かるか」

一拍だけ置き、そして語る。

「人なんぞを殺して悦に入つとる卯ノ花隊長も、手当たり次第に斬りまくつて最後にや返り討ちにされて死んだ親父も、そんな親父の遺言を律儀に守つとつたら仇の下で働いていた俺も、どいつもこいつも気狂いみてえなもんだろう。どうだ、この世界つてやつは存外……救いようがねえもんらしいじやあねえか」

だから、何だつていうんですか。

それで、周りを傷つけるだけの斬魄刀を作ったという、その程度の事で自分を嫌うことはないとでも言いたいんですか。

「違う」

「なら、それなら……」

「お前は『独り』じゃねえ、つて事だ」

「…………」

「お前の周りに、お前を頭ごなしに責められるような真人間がそんなに大勢いるってのか？　いいや、おらんな」

「…………」

「いいか、お前は俺にどこか似とる。だから一つだけ教えてやる」

「…………」

「こんな狂つた世界には——お前みてえなろくでなしにも味方でいられるようなクズどもが、存外多く居るもんだからよ」

そう言い放ち、吼翔副隊長は背を向けた。

去り際、呴くようにして。

「頑張れよ。お前のこと、大切に想つてくれてる人がいるからな」

——じゃあな。言いて工事はそんだけだ。

???????

嵐のように過ぎ去つていく吼翔の背中をじつと見つめた後、輔忌は側に放り投げられた斬魄刀を再び手に取つた。

憎らしいほど自分の手に良く馴染む柄。浅黒く染まつた緋色の鞘。ギラつくよう銳い刃。そこにある様は先と何らの違いは無い。しかし——青年の瞳に宿る“色”だけは、数分前と比べべくもない決意の情熱が宿り始めていた。

???????

一方。

「ご無事ですか、隊長!!」

「た……隊長！」

尸魂界の片隅、果ての果て。

北流魂街80地区『更木』に於いて、とある決定的な一幕が終わりを迎えるとして

いた。

この子だ

この子こそが

“剣八”の名を持つに相応しい

雨は、未だ止まず。

ドロップアウト

明くる日。

覚醒と睡眠のはざまを揺蕩う意識の中、仄かに香る薬の匂いに自分が起きた場所が四番隊舎の病室であることを思い出しながら、青年は珍しくも“あの日”の悪夢に苛まれない内に目を覚ました。

「う……ん」

それが果たして自隊の副隊長から投げ掛けられた昨晩の言葉によるものであつたのか、
扱は——^{さて}

「くくを……、」

「…………に……。 ——ツ！」

——本来ならば病室という場所までは及ばない筈の、四番隊員らによる奇妙な喧騒の声によるものだろうか？

無用な心労を負傷者に与えぬ為、救護詰所は彼らの細心の注意によつて静寂を保たれなければならない。昨晚の騒ぎは十一番隊の輔忌たちによる揉め事だったが、その対処

へ早急に当たつたのが『副隊長』と『三席』だということからも、患者に対する彼らの精神が特に表れていると云えるだろう。

「……？」

早朝ともなれば尚更に、このような病室にまで届くほどの喧騒は普通ではないと言える。

一抹の胡乱を感じ取った輔忌は身体を起こし、ふらふらと引き寄せられるように現場へと歩いていった。

??????

「だからオメー、靈湯液の在庫は捌番薬棚のどつかだつてんだけ！ ませたやつを適當な大きさに切つて持つて来い！」

「どう……したんです？ 隨分と騒がしいようですが」

「ああ、何を眠てえ事を言つてやがる！ この期に及んで呑気にはつき歩いてんのはどこの馬鹿だ!?」

声のした方向を見もせずに、麒麟寺天示郎は苛つきを抑えようともせずに怒鳴りを上げた。

ばかりぬの
秤布に染み込

「オオ!? 手が空いてンならうろうろしてねーで……何だ、て前エかよ」

「え、ええ」

「て、こいつは輔忌のボウズじやねーか。こいつの声を四番隊のどいつかと間違えるなんざ、俺もいよいよ焦りが過ぎているのかもしれねえな。

しかし——こいつは一体どうしたもんか。事が事だ、後先も考えずに話してやるつてのはちと拙い気もするがな。

無意識に指の爪を噛みながら、ほんの僅かの間だけ考える。

「隊長! 器具と薬品の準備が完了致しました!」

くそ、悠長に構えてる時間はねえな。

……仕方ねえ。遅かれ早かれつて奴だ。

「輔忌、今から発つぞ」

「え?」

「死霸装は向かいの部屋に何着がある。適當なのを着てこい。……さつさとしろ! 3秒以内に戻つて来なかつたら連れてつてやんねーからな!」

呆けて動かない小僧を有無を言わせずに叩き出し、俺は部屋の戸を閉める。余計な荷物も増やしちまつたもんだが、まあ支障にはならんだろうよ。

「…………ふう」

そして、——すらりと目の前に並んだ医療道具の数々に思わず顔を顰める。小山ほどもあるこれらをそのまま担いで行けるだけの薬籠に詰め込む作業が残っているのだ。くそつたれ。俺に面倒事を持ち込んできやがるのはいつだつてお前らだよ。

「こいつらが必要にならなきやいいが。……頼むぜ、卯ノ花よ」

その都度首を突っ込んでしまう俺も俺だがな。

「て前エや吼翔（こうとう）は滯靈廷に残っていたが、十一番隊が数日前から遠征とやらに向かつたってのは知ってるだろう」

卯ノ花の奴、子供ができて少しは丸くなつたかと思えば“これ”だからな。即座に考えを改めさせられる。今回もあいつのバカな思いつきか暇つぶしにしか見えなかつたが……まあそりや置いといてだ。

輔忌の腕を引っ掴みながら超速の瞬歩で駆け抜ける。途切れ途切れにうつろう視界、景色がぶつ飛ぶように後方へと流れ過ぎていく。流魂街と滯靈廷との境界はとつくに置き去りになつていた。

「よつと！…………こりやついさつきの話だが、連中の一人が帰ってきたんだよ。それも

ほうぼうの体というふうだつたがな」

「……それっ、て！」

流石だな。

いや、見込んで連れてきたが見込み以上だ。輔忌は俺に引つ張られながらとはいえ、戸魂界でも随一の瞬歩の速さに体勢を崩さず、俺の荷物にはならんようにと自分の足で対応して付いてきている。そして滝のような汗を流しながらも何かに勘づいたように声を発した。

「“非常事態下”の緊急伝達!? 出向した隊が対応不可能な状況に陥った際のつ……」

「ああ……最低でも一人を寄越す。そういう決まりだ」

「でもつ……ただの隊士だけじやない！ 十一番隊の席官級だって大勢同行していまし
たし、何より……！」

ああ、そうだよくなつたれ。

卯ノ花の奴でも“対処”ができねえ、しかもそれがたつた一人の餓鬼つてのあどうい
う化け物だ……!?

「各隊の隊長格には全員お呼びがかかつてているだろうよ。一番最初に着くのは俺達だろ
うがな……輔忌？」

ふと、すぐ後ろを疾る輔忌を見遣る。

「まさか……」

流れる汗をそのままに、その俯きがちな顔を見るに俺の問いかけなんか耳を素通りしているようだつた。

「おい、何を考えてやが……ツ！」

る。というセリフの続きは見知った靈圧の感覚に途切れていつた。輔忌も全く同じものを感じたようで、進行方向そのままへ安堵とも驚きともつかない反応を示す。

「あれは……」

「母さんの靈圧!? どうやら無事のようですが……つ」

戸魂界の最果てにまで離れていて碌に追えなかつた靈圧をやつと捉えられた。だが普段のそれとは……想像も付かない程に弱々しい。立つているのもやつとという状態だろうつて事は簡単に想像がつく。

更に奇妙な事には……卯ノ花の奴をそこまで追い込んだつてえ餓鬼の靈圧までは感知できないつてところだ。

つまり、勝つたのか……?

「……何れにせよ急ぐに越した事アねえな。しつかり掴まれ、こつからはちいとキツいぜ！」

「つ、はい！」

近づけば近づくほど、だな。十一番隊員のものらしき靈圧も一緒に感じられるようになってきた。

弱り切つてさえ雑魚連中のそれを塗り潰すばかりの卯ノ花の靈圧の存在感には呆れちまうが、隊もろとも全滅つて場合は考えなくつても良くなつた。

さて、この辺りの筈だが。見るとほんのちよっぴりだけ木々の少ない開けた地形に、酷く小さなボロい小屋が数軒ばかり立ち並んでいるのが見えた。十数人ほどの死霸装を着た死神たちがその内の一軒を取り囲むようにして辺りを警戒しているのがわかる。
……五つ前後の死体が血塗れで転がつてゐるにはツッコまねえぞ。見たところ隊士のうちの誰かでもないようだが、小屋の持ち主をぶつ殺して乗つ取つたんじやねえだろうな。

まあ、もともと『更木』はイカれた破落戸どもが羽虫みてーに湧いて出てくるクソみたいな土地だ。例え穩便に建物を借りようつつても、住人の方から急に襲い掛かつてくるつてのもザラだろうしよ。

……ホントに連中が“ 穏便” な対応を試みたかつてーと、かなり怪しいモンだがな。

「うわあ、命の価値が軽い……」

輔忌も同じように考えたようで、ポツリと一言だけ言及するに止まつた。まあ、ここはそういう場所だしな。

「おい野郎共！ 四番隊隊長の麒麟寺だ！ 被害はどの程度か言つてみろ！」

大声を出して呼び掛けてやると、まさに打てば響くつて感じだな。こちらから見て先頭に立つ男が少しの動搖と安堵を挟みつつも返答を寄越した。

「麒麟寺隊長!? 良かつた、霧崎きりさきが間に合わせてくれた……卯ノ花隊長が中におられます、手当よもしまを！ つて、輔忌さん？」

「四方島よもしま、説明してる時間は無い。僕も通してくれ」

「……ええ、分かりました。貴方にはその理由もあるでしよう。麒麟寺隊長、卯ノ花隊長を宜しく頼みます」

霧崎つてのは確か伝令の為に瀬靈廷まで戻つてきた十一番隊員の名だつたか。そして目の前のこいつも輔忌と知り合いらしいが、つくづく連れて來たのが隊の“身内”で良かつたな。話が早くて助かるぜ。

「任せとけよ、死んでねえ限りは助けてやるさ」

たつた一人の例外を除いて——いつだつて俺はそうしてきた。それなら今回も同じ事だ。

隊員の包団を通り抜けて、ギシリと軋んだ小屋の引き戸を密かな決意と共に滑らせた。

そこには寄せ集めのものと思われる布団が一枚、その上に稚拙な手当らしきものを施された卯ノ花が横になっていた。

その辺の布を破つて包帯代わりに巻いてあるんだろうって事がからうじて見てとれるぐらいのモンだが、そもそも十一番隊の脳筋どもに期待なんざしてもなかつたしな。そりやまあ良いだろう。

入ってきたのに気づきもせずに虚空を見上げる卯ノ花を怪訝に思いつつも、俺は何時もと変わらない調子で声をかけた。

「こつ 酷くやられたな」

「天、示郎？」

「輔忌もいるぞ。ああ、無理に体は起こすな。服はこつちで脱がせつからよ」

「パツと見た限りでは……思つた程の傷ではない、か？」だが、それにしては靈圧の揺らぎが酷いもんだ。戦いの消耗が祟つたのか、或いは俺の預かり知らない何かがあつたのか。こちらを見ているようで見ていなさそうでもある、どうにも焦点の合つているの

かもハツキリしないうつろな目をこちらに向いている。

どのみち詳しく述べる必要はあるな。背負っていたバカでかい薬籠を下ろして早速診察に取り掛かるうとすると——何だ、輔忌が俺の腕をがつしと掴んできやがった。邪魔だぞ。

「何だよ」

「分かつてます。当然の流れですよね、勿論分かつています。……僕は外で待っていますので。ひと段落したら呼びに来て下さい」

「なに?」

どういう事だ。と言いかけたが、やめる。ガラガラと引き戸を開けて外に出て行く輔忌の背中を、わざわざ止める事はしなかった。

ああ、実の母親の裸をまじまじ見るのはきついだろ?
わからんでもない。

「こんなもんか」

全ての傷に処置を施した訳じやないが、とりあえず服に隠れる範囲は済んだな。一番

深刻だつた胸元の刺し傷を勘定に入れた所で命に別条は無えだろう。だが、あー、こ
りや跡は残つちまうな。

しかし卯ノ花もこういう時に輔忌ほど——色んな意味でだが——自分の身体に頓着
するタイプじゃねーだろうとは分かつてゐたが、こつちもやり易くて助かるぜ。

「…………」

だがそれについても、やはりどこかうわの空だな。訊かれた事に返事する以外にほとん
ど喋らねーし——それはいつも通りか。ともかく、まるで“されるがまま”といった様
子で、こうなると寧ろこいつらしくもない。どうしちまつたんだ?

「……良いぞ! 入つて來い」

この沈黙に耐え切れなかつたつて訳じやあねえが、そうだな、外で氣を揉ませてゐる
だらう輔忌をそろそろ中に入れてやらないとな。腰を上げて戸口に向かいながら声を
かけると——

内側から開けた戸を挟んで目に入つてきたのは、思いもよらない男の姿だつた。

「き……麒麟寺、隊長」

地に蹲るように荒く息を吐きながらこちらを見上げて来たのは——十一番隊副隊長、
吼翔権十郎その人だつた。

「て前エは」

「一人で来たそうです。瀧靈廷から、この更木まで」

限界まで疲弊しきつて いるらしい、ともすれば今 の卯ノ花よりよっぽど具合が悪そ な体を脇に屈んで慮つていた輔忌が補足を入れる。

「ここに着いたのは本当に つい先程の事でした。卯ノ花隊長の事を聞いて飛んで來たそ うですが……」

……大した野郎だ。俺たちに続いて二番目にここへ來るのが他のどの隊長でもなく、
吼翔だとはな。

こつから瀧靈廷だぞ？ 尸魂界の半分を横断するような距離だ。俺が言うのも何だ
が、これを日が中天に昇るまでに走つて越えられるような奴が他にいるとは思わなかつ
た。

そのせいか息を整えるのにも必死で碌に声も出ないようだが、その抉ぐるように俺を
見上げる懸命の表情。いくら俺でも、それが一刻も早く自隊の隊長の安否を耳に入れたい
と思つて いるからこそそのモンだという事は直ぐに分かつた。

幾らかの逡巡すら挟むまでもなく、俺ははつきりと答えを口にする。

「卯ノ花は深手を負いはしたが、報告にあつた餓鬼は見当たらねえ。奴は……勝つたん
だろオよ」

「！」

「詳細はまだ何も聞いていちゃいねえがな。話はこれから始まる。吼翔、て前工も副官として此処に居るんなら——聞くべき事は聞いておけ」

上がつた息も抑えつつある吼翔。

「つ、く……。分かり、ました。せやけど、

麒麟寺隊長」

そう言つてよろよろと腰を上げた大男は、俺の視線を受けながら深々と体を前に傾けて、

「その前に——有難う御座いました。隊長の命を繋いでもらつて、俺は感謝してもしきれんのです、本当に、恩に着ます」

頭を下げてこう言つた。

……つたく。羨ましいとはケほども思いやしねーが、奴の周りにもいつの間にか人が増えたもんだな。あいつと初めて会つた頃、元柳斎にしょっぴかれてやつて來たあの当時とはどこか違う。

例えそれが小さくたつて、一つの人の輪の中心にいる。そいつはやつぱり、孤独に剣を振るうだけだつた昔から何かが変わり始めているつて証拠なんだろう。

それでも、ああ。

やつぱり羨ましくはなんねーな。

卯ノ花剣八を“マトモな形”で慕つてゐる奴は、誰もいねえんだから。

??????

「…………」

小屋の裏口をくぐり、後ろ手に戸を閉める。

ガタン。古くなつた木材のぶつかり合う音が聞こえると同時に、背後から注がれる視線がそこで途切れてくれたような気がして、そこで吼翔権十郎は大きく息をついた。

自隊の隊長から語られた事の顛末に、呆然としていた。

無理も無い。ここ更木で彼女が遭遇したという子供の話だけは前もつて耳に入れていたが、それが卯ノ花剣八という死神に与えた影響は、一朝一夕に飲み込むにはあまりにも大きすぎた。

『あの子は、私よりも「剣八」に相応しい』

『この名を名乗る資格は、敗けた私には最早ありません』

それを聞いた吼翔は天地がひつくり返るような驚愕を受けた。正しく狼狽えていた。

“剣八”が明け渡される。そんな事実が何より信じられなかつた。

『ですが……』

けれど自ら”剣八“を棄てた、一人の女の悔恨を極めるといった様子で吐き出された次の言葉だつた。先んじて生じた驚きは更に強いそれによつて容易く塗り潰される事になる。

『私はあまりにも弱過ぎた。そればかりか、初めて知つた”戦い“の愉悦を失う事に恐怖さえ感じさせてしまつた。あの子は自分の強さに枷を掛けた』

『敗けた私は剣八として死んだ。ですが、私を越える”次の力“は他ならぬ私の剣によつて喪われたのです』

『それこそが、私の罪』

言葉を、失つていた。

『……これから前エはどうすんだ。“剣八”を棄てた卯ノ花よ』

そこで麒麟寺の質疑が想起される。剣八の価値観に然程重きを置かない彼の考えはこの時も冷静だつた。

『天示郎。貴方が私へ再三繰り返してきた言葉の意味が、今になつて漸く分かつた気がするのです』

『…………』

『目の前の疵きずを、治したい時に治せないというのは。存外気分の悪いものですね』
卯ノ花の発する台詞に誰よりも既視感を覚えた麒麟寺は目を見開き、まるで不愉快な

ものを見たとでも言わんばかりに睨み付ける。

『そんな分かり方をしろなんて一言も言つた覚えはねえぞ』

『ええ、そうでしょ。周りの人々が幾ら傷付こうとも動かなかつたこの心の初めてそれを欲するに至つた切つ掛けが、他ならぬ自身の窮地に依るもの等と』

自らの醜悪な性情は重々理解しているといったふうに自嘲し、女は肅々と言を紡ぐ。
 『天示郎……若し貴方が許すのであれば、どうか私に回道を教授してくれませんか。私は初めて、真に”疵の痛み”を知りました。この痛みを、苦しみを癒す術を知りたい。そしてどうしてか、他人のそれをも理解しなければならないと想うようになつたのです』

無論、時間はかかるでしょうが。

そう締め括られた言葉を聞いた麒麟寺は、眉根に皺を寄せたままそれ以上を語ることはしなかつた。

『剣八は……』

未だに動搖が抜け切れていない吼翔を差し置き、恐る恐るという調子で輔忌が呟く。

『母さんも、”更木の少年”も名乗る資格を逸した。それで失われた、宙吊りになつた剣八の名は、どうなるのですか』

結論から言って、現在の吼翔が抱えている動搖の殆どはこの問い合わせ齎したものであ

る。この事実は……護廷最強と言われた戦闘部隊の副官にまで上りつめた男にとつて
さえ、とても受け止めきれるような事ではなかつたからだ。

『私は、十一番隊長を辞します』

『次の隊長に相応しいのは、吼翔、貴方を置いて他に居ないでしよう』

『そしてこれは……無論、荷が重いと感じるならば断つてくれても構いませんが』

——“剣八”の名を預かる覚悟があるならば ——

「……………」

卯ノ花が倒れたと聞いた時点で、少しでも考えなかつたかと言われると嘘になる。

十一番隊副隊長。剣八に最も近い男は他ならぬ自分であると、自他共に認める立場に
彼は居た。

「俺は……」

自惚れている訳では無い。

埋めようもない実力の差が彼我の間に横たわっているという現実は良く理解してい
る。だからこそ、果たしてこの提言を受けてもいいのだろうか、この身に余る“名”だ
ろうか、と。自らに向けられた疑念は精神を揺さぶり、止め処無く噴き出し続ける。

「つ？」

と——背中を預けていた小屋の戸がガタと動き、体の重心がずらされた事で前方向へとよろめいた。

中の二人が出てきたのだろうか。そう思つて後ろへと目を向けると、そこへ顔を出したのは輔忌一人であつた。

「…………」

「……吼翔副隊長」

暫し向き合う両者。

果たして、先んじて口を開いたのは輔忌であつた。

「お受けするつもりですか、あの話を」

そう来るだろうというのは薄々分かつていた。

態々一人で聞きに来た。それはつまり、母親の名を継ぐ男へとその心意を測りに来たのだろう。真っ直ぐにこちらを見据える瞳に応えるため、吼翔は静かに、しかし確固たるものを持つて告白した。

「『剣八』は——先代を討ち取つて初めて受け継がれる血塗られた名だと、卯ノ花隊長は常に言うとつた」

「ええ」

「もし俺がその名を預かるとすりやあ、それは卯ノ花隊長を越えた時だと……ずっと、そ
う。ずっと思つとつた。だが、そうはならんみたいだなあ……」

「それで困惑が勝つてゐる、と？」

どこか遠いものを眺めるように視線を宙に投げながら、男は首を横に振る。

「いいや」

言葉が、一拍だけ空いた。

「受けるさ」

長い、長い息をつくようにポツリと吐き出された一言だった。

隣の青年は理由を問う事をしなかつた。

それは男の中だけで完結していれば良い思いが結論を付けたものであり、横から口喧
しく物を言うような事ではない。

「そう、ですか」

それを聞いた輔忌は俯くように目を伏せ、

「ならばあなたは僕の敵だ」

心胆を寒からしめる、絶対零度の声だった。

「な……？」

「妥協も、放棄も。僕には許されていないから」

底冷えするような冷たい靈圧を一身に浴び当惑する吼翔に向けて。剣八の血を引く唯一人の息子は、この世で最も『その名』に近い男へと叩き付けるように宣言した。

「真剣勝負です、副隊長。剣八の名を掛けた——」

果たし合いを申し込みます。

最後（いやはて）の夜

その夜は静かに凧ないでいた。

日頃の喧騒から唯一解放されるこの刻限ばかりは、耳鳴りを引き起こすほどに広大な静寂に包まれた十一番修練場も単なる無人の荒野としての存在意義を全うするだけの場所に過ぎない。

しかし、詰まる所を語るとすれば。

ここ連日に渡る夜に限り、終ぞ土地の安息が保証された瞬間は来なかつた。

「はっ、はあ……！」

青白く幽かそけき月光に微睡む世界。

その安眠へ文字通りに影を落とす、とある一つの、異類の存在が蠢いていたからだ。それの正体である僕——卯ノ花輔忌たすきは、一振りの斬魄刀を手にただ立ち尽くしていた。否。ただ、というには語弊がある。からうじて正眼の構えは維持されているものの、その剣先は目に見えるほど震えており、持ち手の内心の揺らぎをそのまま伝えている。

火

もえる

千切れる

焼けて 痛い

いやだ

助けて やめろ

立てない

敵わない

怖い

とかされる

根底にこびり付く感情はいつもそれだつた。

前に進もうとする意思、すなわち運命に抗う力。すべてが灰塵に帰したあの日、人が持ちうるそれらの能力の一切を粉々に打ち碎かれたからだ。

“いくら手を尽くすとも覆す事のできない現実がこの世界には幾らでもある”と

真に理解し、心の底から恐怖した。それからというもの——この身命を賭した野望を果たすために力を使うことを、他ならぬ自身の体が拒否するようになつていった。幸か不幸か、既にその時点では僕は一人の死神として生きていくには十分過ぎる程度の実力を備えていた。

だから個々の力量が重んじられる十一番隊に於いても一定以上の立ち位置に甘んずる事が出来たし、何ならこれから長きに渡る人生を惰性に任せて生き永らえようとも、自分の居場所を自分で作れるだけの能力は持ち合わせている、のだが。

「ふう——」

噴き出る汗と共に抜け落ちる腕の力に任せて剣を降ろし、そのまま地面に杖のように突き立てる。支えが無ければ立っているのもやつと、それぐらいの消耗が積み重なつていた。

斬魄刀を構えてただ立つてゐるだけ。
それだけでここまで追い詰められていた。

本当ならこんな筈ではなかつた。吼翔副隊長への“果たし合い”に勝つため、僕はここで斬術の鍛錬を積もうとしていただけ。僕の心にのし掛かる恐怖の、真に恐ろしい点はこれなのだ。

“これだけやつて敵わなかつたらどうすれば”

“どうせやつたところで無駄だろう”

“きつと成し遂げられない”

強烈な敗北、そして失敗の疵痕。

何事かを成そうとする度に脳裏に浮かび上がるそれは、謂わば絶対的なものに対する忌避と恐怖の感情だった。

今この瞬間にさえ、刀の柄を握る手への感触が卯ノ花輔忌という死神の怖れる情感を痛いほどに叩きつけてくる。

皮膚をすり抜け骨まで達し、心の臓を握り潰すかのように襲い掛かる“疑念”とでもいうべき感

『なりません』

『いいえ』

滅多な事では揺らぎを見せないのにも関わらず、その否定の声には僅かな怒りの色が垣間見えるようだつた。

多少の驚きは抱くが、表には出さぬように努めて言葉を受け流す。

『既に決めた事です』

『死にに行くようなものだと、理解しているのですか？』

『そうは思いません』

迷いの無い即答。これを予想していなかつたのか、未だ床に伏せるままに未成りの女性はほんの少しだけ目を見開いた。

『思うに、僕と副隊長の実力は然程に離れてはいません。……分かつています。彼と違つて僕には占解が無い』

それは、死神同士の戦いにおいて致命的ともいえる前提ではあるが。

『ですが、僕の斬魄刀の能力はご存知でしょう。どこまで持ち堪えられるかに依るとは
いえ——』

『勝つ見込みがあるとでも?』

威圧するような靈圧を真っ向から受けつつ、黙したままに『肯首』を返す。

『…………』

暫し、沈黙が部屋を覆う。

先んじて言を発したのは——

『その裡に潜む』恐れ』を捨てられない限り、貴方に辯解を持つ吼翔は殺せません』

断言。

『重々、承知の上です。それでも僕は……』
素氣無い断言だつた。

『重々、承知の上です。それでも僕は……』

分かりきつていた事だ。だが、僕は思わず歯噛みした。

自分というものの無力さをまざまざと言い付けられた気がして、どうしようもなく情けなかつたんだ。

はつきりいつて、その時の僕はかなり取り乱していたんだと思う。

絶望的な無力感、胸に刻み込まれた信念、そして——今にも全てを放り投げてでも逃げ出したいという、逃避の願望。相反する三つの思いにすり潰されて、頭がどうにかなりそうだった。

でも。

それでも何かを言い返さないといけない気がして、誰に向いているのかももう分からなくなってきた言葉を吐き出そうとして。

俯かせていた顔を上げた時。

目に入ってきた母の表情を前に、思考は消えた。
千切れんばかりに布団の端を握りしめていた。

静かに、激しく。

長い長い、射干玉ねぼたまの髪が乱れているのを気付きすらしていなかのように、ただ項垂うなだれていた。

失望か、激情か、憐憫か？

いや。

ひどく悲しそうに。

ただ涙を流していたんだ。

ああ。

その涙の理由が、ぼ

くには分からぬ。

ただ、それを理解出来ない者が“救う”等と——
烏滌がましいのではないだろうか。
ぼんやりと、そう思つたんだ。

ぐるんツツ!!

「やめ、
ろ」

視界が明瞭になつていく。

意識に覆い被さつていた膜のような何かが一気に吹き飛んだような、はたまた世界の全ての景色や物事がぐるりとひっくり返つたような、そんな感覚が襲い掛かる。夢中にまどろんでいたかのような脱力感が未だに残つてゐるもの、倒れ伏していた上体をゆっくりと起こした。

「…………」

周囲を見渡せば十一番修練場の変わらぬ風景が目に入る。月の傾きを見る限り、あれからほどんど時間が経つていないらしい。

夢を見ているようだつた、とは不思議と思わなかつた。

吼翔副隊長に果たし合いを申し入れ、その話を先代の剣八である母さんに持ち込んだ日の”光景”……と云うより、あれは。

「記憶、そのものか」

あたかも、”あの場”で感じた全てがそつくりそのまま反芻されたかのようだ。

今も尚、たつた数分前まで自分が正に”あの場”にて、同じ事を言われ、同じ事を

言い、同じ事を感じたのではないかと錯覚しそうになるほど鮮明かつ強烈に蘇った、いや、こじ開けられた記憶。

どうやつてかは分からない。

だが、こんな事が可能な存在は一つしか思い浮かばなかつた。
「……酌牽くみひき、蜥蜴とかげ?」

くひつ

それは滲み出るかのようだ。

濁つてているような透き通つているような男声のような女声のようだ。結果として人の不安を煽り高めるためだけに調節されたような嘆しづかれた笑い声が、鼓膜を通さず脳裏に響く。

「なつ——」

ただし、そうして自らの斬魄刀が現れるという事はなく——

する り

——引き摺り込まれた、という方が適切だろう。

全く意図する所では無かつたのにも関わらず、薄暗く、胎動し、酷く冒涜的な肉と眼の精神世界に足を踏み入れさせられていた。

???????

くいひつ、くひひひ

……例えば、持ち主の魂魄が過度な消耗を負つた時に限り。

それが肉体的なものであれ精神的なものであれ、斬魄刀は使い手の自我を繋ぎ止めるために精神世界へと引き込むことがあるという。

死神とは共依存の関係にある斬魄刀は押し並べて“忠実”な存在であり、持ち主の意に反する行動は滅多に取らないとされている、らしい。

悲しいなああ？
いとしい　いとしい　我が息子が

しかし……強行に意識を引き摺り込みながら愉悦に満ちた悪辣な笑みを浮かべるこの姿を、僕にはとても“忠実”である等と見ることは出来そうにない。

瘦躯の怪物は引き裂けるかのように醜く嗤い、顔を歪めて囁いた。

身に余る“名”に飛び付き、その若い命を散らそうとしている……くひひつ
『私が名を捨てなければ』
なんて 後悔してゐるか も

『何だと……、っ』

いや待て、考えろ。

母さんを引き合いに出された事で危うく乱れかけた感情を落ち着かせる。こんなもの、僕を苛立たせる為だけに放たれたであろう単なる挑発に過ぎない。

ならばこいつが……僕の精神を執拗に揺さぶろうとする理由は一体何だ？

本来ならば斬魄刀にここまで之力は無いはずだ。持ち主の合意無く意識を落とし、自

由自在に夢を見せる。死神と斬魄刀の関係は対等で、だからこそ一方が他方を支配するような事があつてはならない。

……まさか。

酌牽蜥蜴は、あの“能力”を僕使つてはいるのか？　あの力なら持ち主の僕にさえ強い影響を与えることができるかも知れない。

だがそれは一体いつからだ？　その力を知つてはいる僕がそれを易々と見逃すはずはないだろう。

長年をかけて僕を騙して、精神世界で突き殺したあの時か？　だとすればあの時から何が変わった？　力を奪われたのか？

おまえが考へているそれは、正しい

思考を回すべく沈黙する僕を酌牽蜥蜴は面白そうに見つめ、

わたしがこうしてお喋りに興じていられるのは余裕があるからだ。おまえをやつけるために頑張らなくつてもよくなつたからだ。
そうち。今のわたしにとつて、おまえが見ること、聴くこと、そして……：

考える全てのことさえ、思いのままだ……！

けらけら、げらげらと、皮膜の怪人は下劣に嗤う。

知らず知らずの内に“自己”的一切を侵略されていたという事実。確かに、全くの容赦無く突き付けられたそれは例えようもない恐怖となつてこの身に襲いかかってくる。しかし、だ。

『貴様は、何がしたいんだ』

——ん？

『何を思つてこんな事をする？　何を願い、何を望んでいるつていうんだ？　……僕には分からぬ。僕を食らつて殺戮の限りを尽くすことか？　貴様は前にそう囁いたな。それが貴様の——求めることか』

自分が自分であるかもわからない、見ているものが目の前にあるものではないかもしない、それは僕にとつて真に恐ろしいことじやない。

僕が本当に恐れること、それはこの手で母さんを救うことが出来なくなることだ。それを邪魔するものに感じる思いは恐怖ではなく——怒りと、そして侮蔑でしかない。

いいやア……

怯むどころか挑みかかるような口調でにじり寄る僕を見て何を思つたか——あるいは何も思つていなかもしれない——そんな嗤いをたたえて斬魄刀は言う。

穏やかで善良で、何より平和を愛するわたしに『殺戮』など。とてもとても……くいひ
ひつ

『……戯れ言を』

ただ、まあ、おまえの言つたことは殆ど合つてゐる

一つだけ

おまえが一つだけ思い違いをしているとしたら、それはね……

そこで酌牽蜥蜴はその骨ばつた体を弓なりにし、なんとも芝居がかつた様子で天を仰ぎながら両腕を広げ、仰々しくもこう言い放つた。

おまえだよ！ 他ならぬおまえ自身が、殺すんだ

最後に手を汚すのは全部全部おまえ一人さ！ わたしはその手助けをしているに過ぎない……！

無益な殺生、無用な殺戮、大いに結構じやあないか！

おまえはそれらを好まないらしいね、だからわたしはそれを好むのだよ

おまえがわたしを振るい、刀身を血に染めまくったあと！ おまえの価値基準倫理観、おまえをおまえたたらしめる内面のすべてが歪みに歪むだろう！

言葉の波は、まるで濁流のようだつた。

それを目の前の死神が理解しているかいなど関係ないとでも言うように、最後の一息は聞き分けのない子供にものを言い聞かせるふうな口調で吐き出された。

わたしは、それが、見たいのだよ……！

焦がれるほどの興奮が、落ち窪んだ眼窩の奥に燃え上がっていた。

そして渦巻く情熱はそのままに——両の目が同じ方向を見ているかも怪しいギョロギョロと跳ね回る視線を急に束ねたかと思えば、その正気とは思えない瞳で僕を見た。

それがどうだい？　じき叶うのさ、この夢が

ああ。

そろそろ我慢の限界だ。

『……黙れ！』

その怒声は考えるよりも先に、猛烈な激情を伴いながら口をついて吐き出された。

叶う？　夢が叶うだと？

『貴様の思い通りになどなるものか！　薄汚い下衆め、殺せ殺せというのなら、いいだろう。貴様の力で僕を殺意で満たしてみろ！』

決して許してはおけない。

その邪悪な野望を“夢”などと、まるで希望を見るように綺麗な言葉で語る事それ自体が許せない。

『だが「最初」は貴様だ！　最初に死ぬのは貴様だ、何者に操られようとも！　これだけは忘れさせられるとは思うなよ……！』

あやつる？ わたしの力で？ くつ、ひひひ

左様に無粋な真似をする等と思われているとは——それこそ心外というものだなあ？

『何を……！』

わたしがわたしの意思でおまえを操つて、誰かを殺して、で、それが何だ？

まさか楽しい訳はあるまいよ

何もそんな事をしなくて……：

ゆつくりと頬を撫ぜる声、諭すような息遣いすら感じる。

こんな事も理解できないのかと、いつそ清々しいと言えるほど高慢な態度。あまりの怒りには目が眩むほどで、その衝動が決定的な所まで来る寸前、その時だ。

そら、おまえは吼翔を殺すんじやあないか

息が、詰まつた。

昂つていた精神はその言葉になりを潜め、曇りがかつていた頭の中が途端にクリアになる。

おまえのその、母親を助けたいだとかいう訳のわからん身勝手な我儘が人を殺すんだろう？

待て、当ててやろう。大方こう考えているんじゃないか

それは愉しそうに、瘦躯の怪物は細く長く伸びた指をこちらに指して言う。

おまえの母は『更木』が力を取り戻す為に死ぬる役目を一番に買って出る筈だ、と、おまえはこう考える

周囲も否はないだろうなあ。戸魂界きつての大罪人どもが勝手に殺し合う機会を喜んで迎え入れる――：

それだけは回避しなくてはならんと、おまえは必死に知恵を絞つたことだろうよ

かわいそうに

これぐらいしか打つ手が無かつたんだもんなあ

そう。母の始めた全ての事を終わらせる事ができる者が母以外に居るとすれば、それは他ならぬ……

剣八の名を持つ者しかない、と

『…………』

そうだ。

僕は、更木剣八と誰よりも先に戦うために剣八の名を求めている。

いくら母さんでも、いや『初代剣八』であるからこそ、当代を差し置いて戦いに赴くことは決して無い。僕より先に母さんが死ぬ可能性だけは、これで完全に潰えることだろう。

剣八を名乗るという事は——母さんを“救う”ために取り得る最高の手札になる。
その結論に辿り着いてからは早かつた。

この身には妥協も放棄も許されない。それを成し遂げるために僕自身の命を含めた全てを犠牲にできる。例え吼翔副隊長を殺さなくてはならないとしても「それは仕方の無いことだ」と、本気でそう思うことができる。できてしまう。

解つて、いる』

解つて、いる。自分が紛れも無い異常者であり、たつた一つの執着のために他者を害すことが出来るという点に於いては目の前の怪物とそう変わりなど無いといふ事。今更否定するべくも無い事実であり、それを奴は僕と同じか、それ以上に理解している。

そうだ……おまえはわたしと同じだ

同じなんだ。化け物なんだよ

この、残酷な世界に産まれ落ちたその時から解つていた。

この膨大な強迫観念に対してもどうしようも無いほどに『凡庸』な感性は、千年の時を罪の意識に追われるにはあまりにも弱い。さりとて、自らの性情を律する術など模索しようとするしかなかった。

謂わば、これはその罰なのだろう。理性と衝動の矛盾に苦しみ、足掻き、尚も血塗られた“救い”を希わずにはいられない。

だからこうなつて当然。畜生にも劣る卑劣な殺人者として、僕はその行いが報われる最期の時まで進み続けなければならぬ。

奴を殺そう

その為の力を与えてやる

目を上げると、酌牽蜥蜴の手には刀が握られていた。

直ぐに覚る。死神となつたその時から片時でも離れたことのないそれは、見間違えようも無く『酌牽蜥蜴』そのものであると。

絶え間無く醜悪な笑みを顔面に貼り付ける骨と皮の怪人。そして斬魄刀の取った次の行動に、僕は思わず目を見開いた。

わたしを受け取れ

僕を突き殺して力を奪つたあの日、その焼き増しのようだつた。

ただ一点の違いは——鋭く伸びた五指に握られた奴自身を、ぞんざいな手付きで僕へと差し出したのだ。

受け入れろよ

さあ、おまえ自身の為だけにこの力を使え

力だ。

そして世界を、敵を、何より自分自身を！

わたしを遣つて死に染め上げるところを、どうかわたしに見せておくれ……

どれだけ強く求めても手に入れる事は出来なかつた”力“がある。
何かを考えるよりも先に、手が動いた。

さア……

刹那の逡巡すらも挟まず、目の前に差し出された刀へと吸い寄せられるように近づいていき、そうして――

『一緒にするなよ、クソ野郎』

差し伸べられたその手を、弾き飛ばした。

あ？

ああ、ちくしょう。冷や汗が止まらない。

僕の衝動はあの手を取ることが最善だと判断している。なのに拒絶した。魂の奥底から溶岩のように沸き立つそれに、他ならぬ自分が背を向けた。

想像を絶する苦痛だ。金属が擦り切れるような警笛の音が耳の奥でけたたましく鳴り響き、心臓は狂ったように早鐘を打つ。頭痛もするし、吐き気もだ。だが――こうなる事を全く予想していなかつたとでもいうように怒りの色を滲ませた目の前の怪人の

顔を見るだけで、少しは胸がすくというものだ。

話が理解出来なかつたか？

おまえにとつてこれほど都合の良い取り引きは無いと言つているんだ
母を、救いたくは、ないのか？

『可笑しいとは思わなかつたのか』

昏く誘うように囁き掛けられた——僕にとつてはこの上なく甘美な響きを伴つた——
問い合わせを全く無視して言い放つ。

『“ただ”剣八が欲しいなら、何も今。この機会に副隊長を殺して奪い取る必要はどこ
にも無いだろう』

前提が間違つてゐるのだ。

僕は未来の“記憶”を持つてゐる。千年後までに護廷隊の戦力が少なからず落ち込
むという事を知つてゐる。名だけが欲しいのならば、実力を徐々に弱めていく代々の剣
八のうちいづれかを殺せばそれで済むのだ。十分に力を付ける時間も得られるし、確実
に行くならこの手に限る。

……最も、流石に九代目剣八^{継り上り横取り野郎}や十代目剣八を狙うという訳には行かないが。

難易度云々という話ではなく、そんな体たらくでは『剣八として真っ先に更木と戦うこと』を母さんが許さない恐れがある。

母さんが執着を持てなくなる程に『剣八』の格を落としては、態々僕がそれを目指す意味も無くなってしまう。だから僕は出来うる限り早く名を受け継ぐ必要がある。

まさか……

しかし、何故この挑戦を吼翔副隊長が二代目を受け継ぐ直前というこの時に行う必要があるのか。それは“先代の死により受け継がれる”剣八の名が唯一、確実にその前提を覆す継承の機会が他に無いからだ。

『次の戦いで、僕は勝つ。勝つて』剣八を手に入れる
つまり、これは。

『だけど副隊長は殺さない』

……

これは謂わば、最後の抵抗。

自分の為だけに誰かを殺せという、僕自身の嫌つて止まない醜い衝動を可能な限り押し殺すための悪足掻き。

『二代目剣八の継承権は、母さん先代を殺すという条件が奇しくも満たされずに降りてきただけの物だ。……分かるか？』

『これは先代の剣八から受け継ぐための殺し合いではなく、ただそこに在るだけの名を巡る戦い。殺さずに決着を付ける事ができる戦いなんだ。他ならない、今回だけは』『当然、僕の身勝手は押し通させてもらう。もらうが、そのためには人が死ぬのは——』やつぱり、嫌だ。と。

莫迦な、そんな事、有り得る筈が無い

それに”意味”はあるのか？いいや、完全にムダ足だ。母を救いたいと……おまえが本当に只一つの願いを抱えて生きているならば、そのような選択が出来る筈はない

確かにその通りだ。自分の状態ぐらい分かつていて、このまま吼飛副隊長と戦つて生き残れる、どころか、相手を殺さないようになどとは口が裂けても言える敵では無い。更に言えば、副隊長が同様に僕を殺さずに勝とうとする、などという甘い考えも捨てるべきだ。彼は”剣八の名を受け入れる”という事の意味を知らぬ人ではない。そう

してここで僕が死ねば、全ては僕が見た“僕が存在しない歴史の記憶”を辿るだけの結果であり、それは母さんの避けられない死を意味する。

酌奉蜥蜴の言う通り、僕の生きる意味そのものである目的を鑑みればこの寄り道はどうしようもなく無駄でしかない。事実、僕自身の本能はそれに対して惨烈たる拒絶感を抱き、今すぐこの戦いを避けろと悲鳴を上げている。

だが、本当にそれでいいのか？

出来ない事には出来ないと目を背け、己を騙し、後の人生に消えぬ後悔を残すような者が本当に母を助けられるのか？ 自分すら救えぬ者が、本当に？

おまえは、自分で何をやつているのか理解していないだけだ！

『さあ、その通りかもしれない』

それを決して否定はしない。時々、僕は何がしたいのかも分からなくなる。

『何が正しい選択かなんて、僕に分かる訳は無い』

それは断じて諦観ではない。僕は強欲で、何よりも多くを求めているから。

おまえ……！

『だが僕は抗つてやつたぞ！ 貴様はどうだ、酌^{まか}奉^{まつ}蜥蜴^{リザイ}ッ！ ここで貴様の教唆を跳ね除けた僕が最大の敵と見えんとしている所を、貴様はただ見て^{まわ}いるだけなのか！』

両の拳にぐつと力を込め、皮膜の天井が覆う空に向け、張り裂けるばかりに——叫ぶ

！

『僕は変わる。貴様もそうだ！ 自分を誇つて生きる事を諦めるな！ こんな僕達でもそれが出来るんだ!! だから先ずは——』

『僕に、力を、貸せえええええ!!!!』

???????

ちりちりと、明け色の陽射しが瞼越しに目に入る。

未だ肌寒い外気に身を包まれているだけに、よりその陽光が顕著に感じられるよう

だつた。覚醒した意識と共に薄つすらと目を開き、薄暗くも青々と地面を照らす暁の空をぼんやりと見上げる。

「はあ」

帰ってきた。

全く浮かない気分ではあるが、今はその事実を噛み締めよう。ゆっくりと上体を起き上がらせ、片膝を投げやりに立てながら傍らの斬魄刀に視線を移す。

“まるで見当を違えたよ”

精神世界から離れる直前、酌牽蠍の放つた言葉に思いを馳せる。

何しろあの顔だ、表情こそ読み取れなかつたものの……あの声色は奴の思うところを余す事無く僕に叩き付けてきた。

“がつかりした”

“じやあな”

……極々短い、まるで一人きりで呟く愚痴のような単語を二、三と零して奴は消えた。

ただ一つ分かる事は、あいつは本当に“がっかり”している。文字通りではある。しかしそれは、もはや絶望の域に達するほどの失望であつたらしい。ほんの少しだけ時間を戻せばあんなに愉しそうに嗤いの形相を浮かべていた事なんて、それこそ想像も付かないほどに……萎え切っていた。

つまり結局、協力を取り付ける事すら出来なかつたわけだ。
この分では正直……勝ち目はあまり無いだろうな。

まあ、それでも。

「良いんだ、これで」

これが本当に僕のやりたかつた事なのかは分からぬ。ただ、今だけは、この清々しい胸の気持ちに従つていいたい。

もうすぐ朝日が昇る頃合いだ。

さんさんと輝くそれを見上げながらゆっくりと立ち上がり、纏わりつく冷氣を振り払いながら歩き出す。

新しい一日の始まり。

そしてこの日こそが、全てを決める一日だつた。

さあ、戦いを始めよう。

Cut the thin skin and divide it into
ide it into two.

この日。

明け方の僅かな明るさに目を醒ましたその瞬間から、全ての景色が違つて見えるような気がした。

「.....」

布団をどかし、顔を洗い、朝餉あさげをとり。

何故だか、普段から何気なく行なつていた動作らが今日ばかりは新鮮な感覚を伴つていて。その時その時に自分が何をしているのかがハツキリと分かり、改めて自分というものを意識させられた。

「.....」

いつも通りに畳まれている死霸装を着付け、しかし一つだけ今までとは違う“それ”に目を向ける。

隊長羽織。

十三隊の各隊長にのみ着用が許される、死神にとつてあまりにも重い意味を持つ羽織。前任の隊長は、隊の異動にあたり既にその立場を辞していた。

それから程無くして、彼は隊長の地位を任命された。

「…………ふう」

袖を通したうえで、これは面白いほどに違和感しか感じないと肩をすくめる。それでも——隊長羽織に“十一”の文字を背負うという事の重責を噛み締めながら、これら起ころる事柄を鑑みれば自分でも妙だと思うほど落ち着いた気分で吼翔權十郎は家を発つた。

???????

道を歩けば、目が醒めてから感じていた景色の見え方の違いがより顕著に感じられるように思えた。

「今日は確か十一番隊の……」

「——ああ、まさかあの輔忌が……」

護廷隊が、いや——瀧靈廷中がさざめいている。

二代目『剣八』を決する戦い。まず間違い無く尸魂界の歴史へと永遠に刻まれるであ

ろう出来事におよそ全ての死神たちが多大なる関心を注ぎ込んでいるのが分かる。

「しつ……吼翔隊長が通るぞ……」

(……そとか)

他ならぬ当事者である自分がこの変化を誰よりも鋭敏に感じ取っているというはある種当然の事かと、ひとり納得して。

すう、と目を閉じた。

視界が暗闇に覆われつつも吼翔の足取りに不安は無い。この程度で歩行に支障が出るほどヤワな鍛え方はしていないし、何より今は——声が聴きたいヤツが居る。

「なあ

『なんだい?』

一瞬の間も置かずに声が返つて來た。

誰に向けてかも判然としないような呟きの意図をやはり汲み取つて返事を返していくこいつは、これから自分が何を言うのかも正しく理解しているのだろう。

それでも何事かと訊き返したということは——この気持ちを伝えたいのではなく、言いたいからこそ言うのだと。それを分かってくれているからに他ならない。

やはりこいつには敵わんな。そうほんやり考えながら、他の何よりも信頼を置く自らの相棒に対してその心中を吐露し始める。

「ご免な」

『なにが?』

「オマエを遣つて、輔忌を斬ること」

『オレはあの子に情なんて持つてないよ。知つてるでしょ? そんなセツテンも無かつたしさ』

「ああ知つとる。オマエが俺を慮つてくれとるつてこともな」

『……ん』

少しだけバツが悪そうに言葉を詰まらせた胸中の声に、やはりそうかと眉を顰める。

「俺は——こんな日が永遠に来なけりや良いと思つとつた。輔忌を斬るのに思うところが無い訳がねえ。……知つとるよ。オマエは、俺に自分を曲げて欲しくねえんだろう?

俺が嫌だと思う事をやつて欲しくない

『……ソレが分かつてゐならさあ、どーしてここで止まらずに突つ張つちやうかなあ。

ねえ、主様?』

「いや……済まねえ……」

自分から話を切り出しておいて何だというのは否めないが、自分の問題に対する推測

にこうも真正面から肯定を返されると罪悪感が強くなる。

思わず落ち込んだ様子を見せる吼翔だが、無二の相棒はくつくつと笑いを堪えてこう答えた。

『冗談。^{ワケ}まあ、全く思つてないってんじや無いけどさ——今までしなきやならない理由があるつて事、オレは知つてるから』

「……」

『うん、大丈夫。今日まで色々な事があつたけど——オレはオレで、主様はやつぱり主様で、それは今も昔も変わつてない』

暗闇に紛れて耳朶を揺らすその声はしかし、自分たちが進む道を指し示すように迷いの無い朗らかな色があつて。

そうして再び目を開いたとき——吼翔の目の前に広がるその光景は、尸魂界のいかなる地にも含まれない絶景の様相を呈していた。

まずあつたのは、地にも空にも果て知れず広がる青空であつた。

空中には無数の岩石の欠片が散りばめられており、吼翔が立っているのはその内のひとつ、一際大きな、まるで無人の荒野を切り出して浮かべた小島のような大地。

『何があつても、どんな結果が待つていても』

目を細めつつ辺りに吹き荒ぶ風を感じながら、この世界の主は目前に立つ異類の存在を真っ直ぐに見つめる。

『——最後までそばにいるからさ！』

次の瞬間、周囲が強い光に覆われた。

「待つ……」

眩さに思わず目を閉じ、そして開くと——平素と変わらぬ瀬靈廷の街並みがあるだけだつた。

暫し辺りを見回して余りにも突然な現実への帰還に呆然としていると、突然、吼翔はふつと笑いを吹き出した。その意図を徐々に察し始めたのだ。

「野郎、照れてやんの」

慣れない台詞を吐くからだ、と独り言ちる。

そんな悪態にもキレがなく、どうやら彼自身、その献身に報いたいと思つてしまつているらしい。それがまた心底おかしくて、額を押さえるも笑いが止まらない。

ひとしきり笑い切つたあと。目の端に少しだけ浮かんだ零を指で拭い、あの世界と同

じようによく晴れた空へと向かつて囁いた。

「ありがとうな。——行つてくる」

??????

世紀の対決を見届けようとの場に集まつた隊士の総数、實に数百を優に越えていた。

周囲の喧騒を歯牙にも掛けず、輔忌たすきは十一番修練場の中央に於いて結跏趺坐の姿勢に耽つていた。

「…………」

これ程まで的人数がここに集まつたのは、ひとえ単に護廷十三隊が定める次期隊長の決定に関するとある揃に由来するものがあるからだ。

隊士が隊長へと至る条件。その一つが『隊員二百名以上の立会いのもと現隊長を一対一の対決で殺害する』こと。

曲がりなりにも隊長としてその任を受けた吼翔が同隊の隊士である輔忌と果たし合いを行う——例え輔忌自身にその気が無くとも周囲の認識は違う。この死合しゃいにて勝鬨を上げた者が次代の剣八のみならず、隊長の座までもを手にするのだと。

(殺しはしない)

四方より注がれる色めきだつた視線。それは時の『最強の死神』を簒奪せんと目論む青年に対する好奇心であつたり、卯ノ花八千流という咎人を憎む者からの怒りであつたり、或いは——限り無く勝ち目の薄い戦いに何故赴いたと、輔忌という青年を知る者たちからの当惑。

いや、勝ちの目が薄い、というのは理由の一つにも入らないのかもしれない。彼を知る者らにとつての輔忌とは親を敬い、吼翔を慕い、部下からの信頼も厚く、何より……戦いに狂う剣八としての性分など到底持ち合わせていらない筈だつた。

(ただ、勝つ。勝つてようやく——全てが始まる)

当の輔忌は彼らに対して心のどこかでは申し訳ないと感じていて、一方で、やはり思考の大半はこれより始まる戦いに向けていた。

この試練を吼翔と共に生きて終える事が出来たなら、その時は帰りを待つ人たちに頭を下げて謝ろう。ただ、^{いま}今日を越えられない者に明日を語る資格は無いというだけの事。

「よオ」

斯くして青年がただ時を待つていると——群衆の中から割つて現れるように、一つの
人影が寄つて來た。

視界にちらりと映つた隊長羽織。すわ吼翔がやつて来たのかと身構え目線を上げれば、そこに居たのは四番隊隊長、麒麟寺であつた。

「何か御用ですか？」

この場に隊長格が躍り出たという事実に場の空気が一斉に緊張するが、当の本人らは周囲などまるで気にしていないかのように言葉を交わす。

嵐の空氣。この場は差し詰め台風の目か。時代の嵐の渦中に居ながら、覚悟を決めた者的心を常に支配するのは理性の二文字だつた。

「常日頃から多忙を極める四番隊の隊長が」

「馬鹿、十四年も経ちやあ俺らの仕事も減るつづーの。こんなが永遠に続いて堪るかよ」

「それもそうです」

麒麟寺がこの場へ来ない理由として使うにはそろそろ無理があるな、と思い直す。

「なら、どうして？」

「実を言やア、これも仕事だ。……次の隊長を決める死合いが執り行われるとくれば、そいつを仕切る役が要るだろう。二百人の立ち会いとは別にな」

「それが天示郎さん、何故貴方なんですか？」

率直な疑問を輔忌が口にすると、麒麟寺はいかにも気怠げに頭を搔きながら答えを言

う。

「こーゆーのは普通、総隊長とかの出番なんだけどよ。それが止められたんだ。誰について？……卯ノ花にだよ」

「…………」

「誰がやるつて話が隊首会で出てよ。『じやあ定例通りに』つて事で纏まる直前、吼翔の奴が懐から手紙を取り出してきやがつた。誰からつづーのは言うまでもないだろうが、とにかくその内容をなぞる形で元柳斎がハブられたつてこつたな。それでお前らとも何かと縁がある俺に白羽の矢が立つたつてのは俺にとつちや迷惑なことでしかねー訳だが……」

（ああ……）

輔忌は、ここで母の意図する所がすとんと理解できた。

山本元柳斎重國。護廷十三隊総隊長でありながら、先の大戦で猛威を振るつた災禍の元凶。そして——輔忌が抱える傷心の直接的な根源そのもの。

眞面まともに剣を振るう事すら儘ならない今の輔忌に、これ以上の心労を与えたく無い、と。剣八として相応しいのは吼翔であると理解している『卯ノ花剣八』としては、この戦いに於いて輔忌を手助けするという事は己の矜持に反する行為。

そして一介の四番隊員でしかない自らに新しくその名を付けたという『卯ノ花烈』に

は、次代の隊長を決するものとも見做されているこの戦いを止める力は無い。

だからこれは、ただ一人の『母』として。

卯ノ花輔忌という青年が赴く戦いに母として出来る行いを全うした。例えそれが本当に微々たる、事の大局には殆ど影響を齎さない行動であつても。

「——ありがとうございます」

静々と、しかし万感の思いを乗せられて零れ落ちた眩きへと繋がった。

「……いいか、輔忌よ」

麒麟寺はその輔忌の様子についてとやかく言う事をしなかつた。彼の母からは僅かな話しか聞いていないが、それでも目の前の青年がどういう状態でこの場に居るのか、またこのやり取りがどれほど輔忌にとつて救いになつたかぐらいは言葉に表されずとも大方見当が付く。

だから伝えるべき事を伝えた今、次に口にする言葉は彼等の情感についてなどでは無い。

「瀧靈廷の復興も終わりが見えてきた。俺の技術ワザを継いでくれそうな奴らも揃つてきた。俺の役目は……そろそろ終わりだ」

それはつまり――

「卯ノ花にはもう少し教える時間が必要かとも思つたが、奴の才能は折り紙付きだ。俺の遣していつたモンで十分な腕になるだろう。――数男と数比呂も連れて行く。卯ノ花が四番隊に来るなんて事が無けりやあ後任は取つて行けなかつたが、状況が変わつたからな」

「…………」

「――『上』に行つてくる。だからまあ、俺の仕事はこれが最後つて事になるな」

「……それを今、何故僕に?」

「分からねえか?」

全くこいつは信用できない。そう言いたいかのように大きく呆れた素振りを見せた麒麟寺は、この期に及んでさえまるで普段通りの、人を小馬鹿にしたような調子でこう言つた。

「俺あ自分で言うのも何だが、仕事に関しちや、『完璧主義』だ。……て前工が何のつもりでここに居るのかは知らねえ。興味も無いし、どうでもいい。だがよ、これだけは覚えておけ」

――俺の最後の仕事に、後味の悪いモンを残していくような真似だけは許さねえ。

「…………」

「ああ、て前工が俺のために動くなんて事がある訳は無いってのは良く知ってるぜ。だが俺は——て前工らが知つての通りどうしようもなく”我儘”な奴らしいからな。どう転ぶにせよ俺にとつて納得の行く結果を見せてみやがれ」

生きて帰つてこい、とは口が裂けても言えやしないんだろうな。

そんな益体もないことを隠げに考えながらその実、輔忌は麒麟寺の横柄おうへい極まりない態度にどこか安堵のようなものを覚えていた。意識しているのかどうか定かでは無いが、いつそ拍子抜けする程に普段通りの様子は——今の輔忌に”帰るべき場所”を示してくれたからだ。

「天示郎、さん……」

恐らく、麒麟寺は感謝の言葉を素直に受け取りはしないだろう。

それでも、彼は決して見失うべきではないものに再び目を向けさせてくれた。その事実に対しても輔忌が今一度言葉を返そうとすると——

存在を感じた。

「——井戸端会議をしている時間は無くなつたみたいだぜ、どオやらよ」
「…………！」

麒麟寺が輔忌の元を離れ、これより戦場と化す舞台の中央にまで進み、一層騒めく群衆の中のある一点を見遣る。やがて自おのずから引いていく人の波をゆるりと搔き分け、そうして現れたのは。

「——ちいとノンビリ歩き過ぎたみたいやなア」

黒髪短髪の大男。

十一番隊の命運を一身に背負い、輔忌との雌雄を決するべく死合う事を余儀無くされた男——吼翔権十郎だった。

「来たか、吼翔」

「遅うなつてすんません、麒麟寺隊長。始めましょうか」

「……良いのかよ？ これが最後になるかもしねえぞ」

「構いませんよ」

様々な意味が込められた問い掛け。どんな結果に至ろうともこの戦いは彼らにとつて大いなる変革を齎すだろう。一つだけ確かな事実は、今まで通りの日常が再び訪れる

事だけは決して無いということだが。

「——たつた今、発破ならかけられて来たもんで」

そう言いながら自らの斬魄刀を軽く撫ぜた吼翔に目を細め、『何も言う事は無い』と判断したのか。麒麟寺は周囲の群衆へ向けて声高に宣言する。
 「——此れより!! 十一番隊隊長吼翔権十郎、並び同隊士卯ノ花輔忌による『果たし合い』を始める! 隊長就任の資格に基づく掟により、この戦いで卯ノ花輔忌が吼翔権十郎を殺害した場合は……』

普段の斜に構えた態度からは想像も付かない程に凜とした声で場を仕切る麒麟寺。護廷十三隊の隊長として『最後』の仕事に悔いを残したく無いとの先程の言は伊達や醉狂ではないらしい、と輔忌は考え——ゆらりと立ち上がり、こちらへ歩みを進める吼翔に目線を向ける。

「御早う御座います、吼翔隊長」

「おう」

これから死闘を演じるにしては余りにも平静を保つた視線。それが既にして覚悟を決めた両雄の間に交錯する。遂に対面を果たした二人の間に横たわる沈黙の中で、先んじて口を切ったのはやはり吼翔だつた。

「今更理由は訊かねえ」

「…………」

「あの日、俺が剣八の名を継ぐ気でいるとお前に言つた時。お前は何も訊いてこなかつたな。それはお前が、俺の『決意』が何なのかつてのは俺だけが知つてりやええモンなんだと考えたからだろう」

「…………」

「——正直、あの時はそれを言わずに済んで助かつたと思つたよ。だつたら俺も同じ道理を返すまでや。無理に踏み入ろうとはせん。ただ、これだけ覚えとけ」

そこで、絶えず響き渡つていた麒麟寺の声がピタリと止んだ。最後に周囲へここから更に離れるように言つた後、こちらに向かつて目で合図を送つてくる。——配置に付け、という事だろう。

そうして吼翔は大きく溜め息をつき、背を向け、楕円形に形作られた広場の内に輔忌の対面となる方向へと歩いていく。頭を後ろ手に搔きながら、まるで独り言ちるかのようにこう呟いた。

「俺も、引いてはやれん事情を持つてこの場に立つとるつつう事をな」

この戦いを、自分が制する。

「それでは——四番隊隊長、麒麟寺天示郎の名の下に、決闘の開始を此処に宣言する！」

吼翔が抱き続けてきた“何か”を確実に打ち碎く結果になるであろうその勝利が彼にとつてどれほどの無念か、輔忌は想像することさえ儘ならない。

「……開始めッ!!」

ただ、譲れないものがあるのは此方も同じだつたというだけの話。

「開け、——酙牽蜥蜴」

じやらん、と。

その場に現出したのは二振りの刀。本体の凶暴性などまるで感じさせないほど精緻に彫り込まれた古美術品のような外見は元より、その真価には秘められた力がある。

尸魂界に一組しか存在しないと言われる二刀一対の斬魄刀。一生の内に一度でも実物を見れるとも限らない稀有な存在に観衆が俄かに沸くが、極限の集中状態にある輔忌に周囲を気にかける余裕など無い。

いや、この場合——集中を保つために極限まで精神を削つていると表すべきだろうか。

「ぐッ……！」

臨戦態勢へと移行した瞬間、身を焼くような獄炎の幻惑が辺りを包む。視界に映る全ての死神の体が焼ける臭い、顔が融け、剥き出しの眼球がこぼれ落ちる妄想が頭蓋に響くように駆け巡る。

輔忌が“あの日”を思い出すのは、果てしなく困難な道のりへと足を踏み出す行為によつてだ。

それはどうしようもない力に押さえつけられ、振り回され、失敗し、傷付く事が恐ろしいからだ。それだけの体験が彼をそうさせた。そういう意味では、“ほとんど勝ち目も無いような”この戦いに対し感じる恐怖は最も強烈な類のものになる。

本来なら——立つて、こうして息を吸えていることすら奇跡のようだと青年は思う。それでもどうにか構えの体裁を保つていられる。

(……母さんのしてくれた事のお陰に違いない)

災禍の元凶、山本元柳斎がこの場に居ない事が直接の理由という訳ではない。母の想いが子に伝わり、その胸を満たす感謝の心こそが輔忌の足を支えているのだ。

本来の実力が出せる等とはとても言えない。だが、それでも戦うことはできると分かつた。それだけ分かれば十分だつた。

腕の震えは徐々に收まり、目には闘志が宿る。

154 Cut the thin skin and divide it into o.

飛と
挂び
「引か
掛け
けろ」
る」

輔忌の様子を黙してただ見ていた吼翔は、遂に刀を抜き払う——

避けられぬ戦い

見届ける資格など、ある筈が無い。

戦士としての矜持を軽んじてはならない——等と、身の毛もよだつばかりに無責任な題目をさも『仕方がない』とでも言うように振りかざし、私が語るところの『誇りに殉ずる道』に従つて進む息子を——それがまるで無謀な、自殺まがいの愚行だというのに止める事さえしなかつた。

……いや、それも、それすらも。

今にして思えば、輔忌あの子に対して抱いてしまつた厭わしい感情に対する言い訳に過ぎないのだろうか？

私は——あの子が分からぬ。

その違和に初めから気付いていた訳ではない。けれど今回の件と言い、あの子が命まで懸けるに足る『何か』は確かに在る筈なのに、それが全く理解できない。

そうして輔忌が「吼翔との決闘を決めた」と一方的に言つて聞かせたあの日に漸く、私

はその事実に克明に気付かされたのだ。

何を見ているのか、何時を観てゐるのかすら判然としない視線はまるで“あの人”にそつくりで――

かつて惹かれた筈のその色を。

得手勝手にも、『恐ろしい』等と感じていた事を。

???????

きりきり、きりきり……と。

金属がゆっくり引き延ばされていくかのようなその雜音を耳にしながら、吼翔^{くうとうび}は目前で姿を変えていく斬魄刀の様相を確かめていた。

その刀からは、まず鐔^{つば}が消えていた。

至近距離にて相手の刀から手指を守るための役割を果たすそれが無くなる。これが彼にとつて不利な変化になるのかと言えば……答えは否だ。

その斬魄刀――飛掛^{とびかけ}にとつて重要なのは、そう。

柄を鞭のように振り回す際に不自由があるかどうか、という点にあるからだ。柄の片側に寄りながら先細つていく刀身はやがて鋼という材質にあるまじき“柔ら

かさ”を帶びていく。刀身……いや、もはや鋼線とでも呼ぶべきか。何重にも巻き束ねられた長大なそれは武器として十分な破壊力を既に持つてゐるが、あの飛掛の真価はそんなものではない。

注目すべきは刀身にあたる鋼線ではなく、刃にあたる部分だ。

その在り方を刀身と合わせて身近な物で表すとすれば、最も適當なものは“鍵束”になるか。

先端は鋭く尖り、逆に根本は丸みを帶びる。水の雫を縦に潰したような形の細長い金属板が、根本の中心に空いた小さな穴を鋼線が縫うようにして纏めている。何枚も何枚も……。

鋼線に括り付けられた総計十八枚もの金属板。

それが斬魄刀『飛掛』の刃。

お前にや 言うまでも無かるうが

ぱつり、“剣八”に最も近い男は——他の誰にも聞こえぬよう、心中に言葉を連ねてゆく。

いま直ぐにだつて お前の喉^{アキラカ}づ工搔つ切ツちまえる 冂解 使つちまやアな
正味 そうすりや俺は一步も動かずにだつて 向かつてくるお前を近付けさえせんで
息の根止めることだつて出来ちまう しかしよオ……

傲りでも何でも無く、それは单なる事実であつて。業腹ではあろうが輔忌自身さえ認めざるを得ないような現実を頭の中に並べ連ねつつ。
しかし。

しかし、十一番隊隊長は己の前言を全く無視するかのように——自分から一步を踏み出しだ。

声が 聴こえるんや

巻き束ねられた斬魄刀、飛掛を横薙ぎに振るい……バシンッ!! と、一瞬にして伸び切つた鞭のような刀身が空気を引き千切る音が炸裂する。

歩みは、尚も止まらない。

今日この日まで 僕の心に取り憑き 巣喰い そしてどうあれ 明日にも消え去る

亡靈の囁く——最後の声が

思い上がるなんよ 権十郎 “剣八”を争うつてえこの期に及んでも そうもアツサ
リ終わらせるなんてのは ちいと横柄が過ぎやせんか……とな
その まるで踊らされてるような必死さが 輔忌 たとえ お前の目から滑稽に写つ
たとしても

「ああ」

歩みは止まらない。

見遣れば輔忌も同様に、その歩みをじりじりと進めている。抱える思惑は違えども、
ことこの戦いにおける姿勢は奇しくも全く同じであつた——。

これは 呪いを解くための戦いで

これは 弔うための戦いで

これは 捧げるための戦いだから

だから かかるつて来い とは言えねーけどよ

「行くぜ」

「行きます」

瞬間。

緩やかに、しかし鮮烈なまでの緊張感を孕みながら近づく二人の影が——消失した。

大半の観衆は何が起きたのか理解すらできず。それが『見えた』数少ない実力者の内ある者はさつと顔を青ざめさせ、またある者は興味深そうに眉を上げる。

『魂界屈指の実力者らが互いを仕留めるために放つ全力の瞬歩。再び両者の姿が像としてこの世界に映った時。

敵を食い破らんと奔る刃同士の哭き声が、蒼天の空に木霊した。

???????

——見届ける資格など、ある筈が無い、のに。

ああ、今日、私はその場所に行くつもりは無かつた。会わせる顔も無いと思つていた。

ギツ、ギイイ……イン……

あの、空を軋ませるような靈圧と剣戟の音を感じるまでは。

——輔忌、つ

どうして私は、走っている。

「はあっ、はあっ」

傷は癒えようとも靈圧を測れば些かの爪痕を引き摺つていると言わざるを得ないこの体で、というだけの話ではない。

どうして涙が溢れるのだろう。

どうして胸が痛むのだろう。

母親のくせに、私自身が捨てた名を懸けて戦う息子を止める事さえ出来なかつたくせに。

それでも、貴方に一つだけ。

恥を忍ぼうと”母親として”、訊きたいことがまだ一つあるから。
輔忌、貴方は——

??????

ギン、ギン！ と、刃を纏つた鋼線による連撃を二本の刀で捌きつつ、卯ノ花輔忌たすきはどうにか思考を巡らせていた。

鞭のような特性を併せ持つ斬魄刀、飛掛とびかけ。遠心力を利用した一撃の威力は軽い酌奉蜥蜴を優に上回り、こうして攻撃をいなしていられるのも二刀による型の広さがあつてこそだ。

時に流し、時に弾き、時に躱し……しかし防戦一方では削られるだけ。すぐにも攻勢に回らなければならぬ。

手数ではこちらが勝っている分、付け入る隙は必ずある筈なのだが――

(……、つぐ)

その隙をどうしても見付けることが出来ない。

流れるような吼翔隊長の剣捌きが飛掛の弱点である隙の大きさを見せないようにしているというのは勿論そうだが、それ以上に。

(頭が割れそうだ……！ クソッ！)

未だに癒えない心の傷が、僅かに必要な集中すらを搔き乱して止まないのだ。

多少は持ち直したとはいはり一時凌ぎに過ぎず、徐々に思考の余裕が奪われていくのが分かる。このままでは飛掛の攻撃に耐え続けることさえ儘ならなくなるのは必然だ。

増してや——吼翔権十郎の持つ斬魄刀に秘められたあの能力までもを使われ始めては、とても。

と……攻勢に回る為に裂ける余裕が圧倒的に不足する中、ジリ貧のままに押されていると。

「矢張り調子は出ねエかよ」

ガギン、と一際強い衝撃音を響かせると同時に吼翔隊長は飛掛と共に後方へ下がった。

明らかに優勢である膠着状態を解いてまで、何故——？ 胡乱に思う僕の思考を他所に、この戦場を支配する彼はどこか憂鬱な色を覗かせて言う。

「これが最後なら……」の日は全力のお前と戦おうと思つとつた。だがそりやあ、どうやら叶いそうも無え

「……らしく無い、ですね」

確かに、全力を出せない事は僕にとつての不都合に違ひない。だがだからと言つて、それはあなたにとつての好都合でしかないじやないか。

「…………」

「僕達は互いに想像の及ばないような決意を以つてここまで來たはず。……だからこそ僕には分かる。この期に及んでまで戦いの拮抗なんかを望むようであれば、あなたはたつた二文字の名前を巡つて僕と殺し合いなんてしないでしょ？」

どんな手を使ってでも——『剣八』が欲しい。その欲求に関して言えば僕と隊長はこの上なく通じている。例え、一体何が互いをそうさせるのかを互いに知らないのだとしても。

「……俺一人の戦いなら、そら、そーやろうなあ」

俯き、項垂れ、だらりと両腕を下ろしながら懇々と言葉を垂れる。それなのに流石は十一番隊隊長の成せる技か、一見した感触とは違つて付け入る隙が全く無い。不用意に近づけば直ぐ様斬られる——その緊張感を手放さないよう気を張り詰めつつ、吼翔隊長の言に耳を傾ける。

「それじやアカンのや。俺は今日……俺の戦いを捧げるために、ここに居る。^おだから……その姿が俺自身のモンだろうと、相手のお前のモンだろうと、不甲斐無い格好は見してやりたくないかった」

「…………？」

捧げる？ 見せてやりたくない？ 一体……何を言つてゐるんだ。

「まあ……お前が調子を出せん事情も分かつとるし、そりやあ仕方の無い事やと割り切つてもいる。納得してくれると、思うしかねえか」

「何を……」

「——お喋りが過ぎたな」

どこか自分自身に言い聞かせてているような独り言をひとしきり語り終えた後、吼翔隊長は目線を明確に僕へと向け直した。

「そろそろ息も整えられたか？ そんなら精々、『戦い』のティぐらいは保ててくれとでもお祈りしつつよ——ちよいと本気でやらせて貰うで」

「…………つ！」

来るか……あの能力が！

ただならぬ気配を表出させながらも、ぶうん！ と、先程までと同様強烈な“飛掛”的一撃が飛来する。

(——弾く！ 一発を凌いでから様子を見る！)

何時だ？ 何処で仕掛けてくる？

唸りをあげて襲い掛かる鋼線だが、一回までなら確実に払えることは分かつてゐる。飽くまでも迎え撃つ姿勢で二刀を構え、右手から横薙ぎに振るわれる斬魄刀に沿わせる形で接触させた瞬間——。

「つ
!!」

がツギい——!! という轟音と共に、そのまま払い飛ばせるはずだった刀の動きが完全に拮抗した。

(ま、——ずいツ!)

飛掛の能力から何が起こったかを辛うじて把握し、それならば次に取るべき行動は何かと逡巡……する暇も惜しみ、全力で体勢を低く屈めるしかなかつた。

斬魄刀“飛掛”の能力——それは、鋼線に括り付けられた十八枚の刃を個別に『固定』する力。

横薙ぎに振るわれ、酌率蜥蜴に払い除けられるはずだつた刀身が接触する瞬間、付属する刃が『固定』された。結果として僕の防御は受け止められ、停止した刃よりも先端に位置する刀身は依然勢いを殺されずに——

ズパッ！ と。

咄嗟に低く屈めた体を掠るように、僕の頭上を猛然と刈り取つていつた。

「良く躲した。ほんなら——こいつはどうや」

「おおおッ！」

ギリギリで躲し切れなかつたのだろう、額の片側を斬られたのか右目の視界が血で滲む。それを拭つている暇などある訳も無く、いつの間にか手縛られていた飛掛が今度は真っ直ぐに飛んで来る。

鞭という武器は一撃を放つた瞬間にしか攻撃の意味を成さず、また防御の手段も持たないという弱点を持つが……飛掛は違う。

伸び切つていようが撓んでいようが『迫り合い』を一方的に引き分けにまで持ち込めるという強みは恐ろしいまでのプレッシャーを与え、続く攻撃を一手でも読み間違えれば——絡め取られて殺される。

(「いつ」「固定」される……!?)

直線の軌道でこちらに走る飛掛はただえさえ防ぎ難い威力を持つというのに、例え弾き飛ばすことが可能だととしても固定の能力で押し切れない。
ならばここは……！

「ふつ——」

正面から相手をするのは間違いなく悪手。飛んで来る一撃の側面へと這わせるように刀を押し当て、軌道をズラしながら直撃を避ける！

例え迫り合いに強かろうが、一度攻撃を外せば隙が大きいのは変わらないはず。伸び切った飛掛の導線に沿うようにして一気に距離を詰めることができる――！

「これ、でつ」と。

一旦は過ぎ去った危機から注意を逸らす余裕が生まれ、待ち望んだ攻撃の機会が訪れたと思った、瞬間。

「引っ掛けろ……」

意識を向け直した先の、吼翔隊長のその表情には、『不正解だ』とでも言うかのような落胆の色があつて――

「飛掛け工！」

ぐわんっ！　という音さえ聞こえるようだつた。

敵の攻撃を捌き切り、隙だらけの相手の懷へ潜り込もうと前に進んでいた僕を上回る速度で、吼翔隊長が身体ごと突っ込んで来たのだから。

「なん――」

「らおオ！！」

ゴツバギイ！ と。

「ぐつ——」

攻め手の反応を正に擦り抜けた速度で、意識の外からの蹴りが僕の肋骨を抉り砕いた。

「が、あつあああ？！」

カウンター！？ まさか、そんな——こちらが反撃に移るタイミングとしては完璧だつた！ そもそも一撃を放つてからあんなに速く体勢を立て直して、しかも飛び蹴りを入れる余裕なんて出来る筈が……

「つは？！」

血を吐きながら吹き飛ばされて倒れ込む寸前、伸び切った飛掛の刀身がはたと目に入った。

“固定” されている……まさか？

(空中に刃を『引っ掛けた』まま、柄側から引くことで本体を引き寄せた！？ さながらゴム紐に物を挟んで飛ばすように……！)

戦闘経験の差か、または戦いに向ける覚悟の差か？

変幻自在、無数の戦術。その飛掛の力の一端すら引き出せていないはずなのに、ただ一つ確かな事。それは“固定”的能力を解放してからたつたの二手にして、絶体絶命に

まで追い込まれて いるという事実、だけだつた。

輔忌

それは遙か遠く、昔々の出来事だつた。

その子供は物心の付き始めた頃、自分が周囲の“大人たち”から強い憎悪の目を向けられていることに気が付いた。

そういうもののから自分を守ってくれる“大人たち”も居たが、既に頭の中に内包されていた未来の記憶との折り合いも付けられていなかつた彼にとつて“身に覚えの無い事”で訳のわからない恶意を毎日のように浴びせられる日々に、当然の事ではあるが疑問や恐怖を感じずにはいられなかつた。

言うに及ばず、少年が暗い幼少期を過ごしていた事は誰の目から見ても確かであつた。

そして——普通の子供になど向けていい筈が無いほどの恶意は、彼らに手の付けようもない程の広がりを見せていく。

大人が向ける視線に影響された同年代の子供たちからすら無邪氣かつ心無い言動を

受け始めた頃。幼かつた彼は自分自身の運命をこう思つた。
『忌む』を『輔たすく』べくして生まれたのだ、と。

???????

一瞬だけ、意識が遠のいていた。

「…………」

明滅する意識を手探りで押さえ込みながら、卯ノ花輔忌たすきは青空を見上げていた。

随分と——懐かしい記憶が開いた気がする。

あの頃はまだ自分がどういうモノなのかも分かつていなくて、世の中が窮屈で仕方がなかつたな。

(なんで、こんな事考えてんだっけ)

鼓動が脈打つ。脳の奥底が弾けるように熱い。これは戦いの感覚だ。自分の中で戦意は未だに煮え滾っているんだと確かに分かる。

なのに、何故だろう。

この青い空の真ん中から照りつける日差しに感光したものだろうか——瞼の裏に映り込んだあの時の記憶が、妙に頭から離れない。

扱は……制御しきれなかつた酌牽蜥蜴の能力にアテられてゐるのかもしれない。この体が、なにか思い出すべき事を引き出そうとしている予兆を勝手に感じでもしているんだろうか。

いや。

(いいか、どうでも。そんな事は)

そう。結局のところ僕にとつては自分自身の事などどうだつていい。やらなければならない事が、まだ他にあるから。

思考を切り替え、現実に引き戻す。地面に倒れ込んだまま身体の具合を確認する。

あばらを何本か折つたらしい。(こ)まで漕ぎ着けるのに払つた代償としては少々重いが、逆に言うならそれだけだ。……まだ戦える。体が動くことを確かめながら、膝を突きつつもどうにか立ち上がる。

だけど、これ以上は持ち堪えててもいられない。

そろそろ手札を切る時か――。

(如何なつてやがる)

自身の脚が輔忌の身体を碎いた感触を確信しながら、しかし吼翔は即座に追撃を仕掛るという事をしなかつた。

(野郎の靈圧が一回り膨れ上がりおつた。蹴りを食らつて倒れ込んだと直ぐに。……奴にそんな余力があるとは思えんかつたが?)

否、仕掛けることが出来なかつたと言うべきか。

靈圧の上昇は死神同士の戦闘において最も重要な意味を持つ。輔忌が何をしたのか、あるいはしようとしているのかが不明な現状、杞憂であるなどと考えはしない。

圧倒的に優位な状況にあるからこそ、ここで無理に攻めた所で得はしない。

そして何より——吼翔は輔忌の斬魄刀、酌奉蜥蜴の能力を知らないからだ。

彼自身が戦闘専門部隊の副隊長として幾多の戦場を駆け巡り名声を轟かせてきた一方、輔忌はここ十余年の間全くと言つて良いほど戦闘行為に関わつて来なかつた。

斬魄刀の能力に目覚めてから程なくして件の戦争に巻き込まれたという輔忌の実力は誰の目にも晒される事が無く、その理由の実態を知る数少ない一人である吼翔ですらも例外ではない。

(出し惜しみなんぞしていられる状況でも無し。二刀の特性を発現しただけの直接攻撃・系かとも思つたが……)

その斬魄刀に何らかの『底』があるならば、それを出してくるのはこの場面を置いて

他に無い。警戒を新たに、ゆつくりと立ち上がる青年の一挙手一投足を見逃すまいと注意深く観察していると——、

(あ？)

ふと、気付く。変化しているのは靈圧の強さだけではない。

過去の心傷によるものだろうが、輔忌はこの戦いが始まつてから常に息を少しだけ乱し続けていた。加えて肋骨を数本折つた影響もあり、肉体、精神状態は共に最悪に近いだろう。

だが……今の彼はどうだ?

滝のように流れ落ちる汗——良いだろう。

苦悶に満ちた表情——この状況、そしてダメージを鑑みればそれも道理だ。

しかし、その“息”だけが何処か違う。

平常時と比べて明らかに大きくなっているのは確かだ。だが、その、最早一切の乱れを見せないほどに規則正しく整つた、一定の出力をパターン化して繰り返す機械のような、とすら表せる呼吸は一体——

「な」

一瞬、だつた。

敵の動きに応じて思考を切り上げる、といったプロセスを踏む間も無く。

吼翔権十郎の目の前に、既にして斬魄刀を振り上げた状態の輔忌が姿を現した。

「ツは疾——!?

言い切る隙さえ与えられなかつた吼翔は即座に鞭のような斬魄刀を振るうことで攻撃を防ごうとし、そして。

「——ふつ！」

下段から薙ぎ払われる、余りにも鋭く重い一撃。がギいん！ という莫大な金属音が響き渡つた。

「ぐあツ……！」

これは如何なる不条理か——質量に何倍もの開きがある酌奉蜥蜴の一振りに、飛掛の防御がいとも容易く打ち崩された。

異常だ。これは——輔忌自身の膂力が上がつてゐる。

飛掛の強みであるリーチの長さは、裏を返せば懷に潜り込まれると本領を発揮できなくなるという事だ。しゅんぼ距離を離そと瞬歩で後方に下がれば、幸いにも深追いはしてこなかつた。

しかし、これは。

(速さや力だけじゃねえ、最初のアレは……瞬歩の『出始め』に気づけんかった！
技術ワザそのものが洗練されていやがる！)

こんな馬鹿馬鹿しい話があるか、と十一番隊長は思う。靈圧、身体能力、技術……死神としての戦闘能力、およそ全ての要素が一瞬の内にハネ上がっている。

「有り得ん！」

既の所で凶刃を免れた自分にゆらりと向き直る輔忌の視線。

吼翔にはそれが獲物を絡め取る蛇のような、しかし今まで目にしてきたあらゆる生き物ともまるで異なる別の何かのようだと錯覚されてならなかつた。

両者動かず睨み合う事暫し——自身の予想を遥かに上回つた輔忌の底力に対しても、吼翔は問う。

「何故そんだけの力を持つときながら——そいつをたつた今まで抑えながら戦つとつた……！」

言いつつ、彼も輔忌が敢えて手加減をしていたとは露ほどにも思つてはいなかつた。

ただ単純に疑問だつた。肋骨の負傷を負う前にこれだけの力を発揮させていたなら、さしもの吼翔とはいえ始解で相手取るには難儀な戦いとなつていただろうに。

「人間の肉体は」

そこで輔忌は淡々と、まるで朗読するかのような平坦な口調でもつて言葉を発した。

疑問を放つたのはこちらだが、さりとて殺し合いの場で悠長に返答を寄越すほどの余裕があるとも思えず吼翔は眉を顰める。

「どう足搔いても”不完全な力”しか發揮し得ないという事を知っているでしょうか。それは自身の全力に骨や筋肉が耐えられないために脳が制限を設けている事が原因ですが、それは魂魄の身に於いても例外ではありません。……いや、自らを容易く害し得る『靈力』という力を孕んでいるだけ、僕達の身体はより強い制約をかけられていると言つてもいい」

生物の脳は常に大量の制約を”無意識の内に”肉体へ強制している。つまり誰しが身体機能の大半を意識の奥底に封じ込められており、それが『潜在能力』として眠つているのだ。

「しかし唯一、この卯ノ花輔忌だけはその制限を無視することが出来る。……理解して頂けたでしょうか。”自己の完全な支配・掌握”。それが僕の能力の正体だと”ありとあらゆる肉体の制約を無視する事によつてのみ成し得る『身体能力の最大活用』。

「限界の扉を”開く”力——それが、生來の使命に狂う青年の斬魄刀。酌奉蜥蜴の能力だつた。

「……成程」

その事実に吼翔は、しかしただ溜息を吐くように言つた。

「確かに、恐ろしく強え。細けえ理屈はともかく、要はアタマン中を弄^{いじく}つて力を引き出しておる訳や。まだ技術はともかく、実際に俺の腕力をアツサリとぶち抜いて見せた程に、か。……理解したぜ」

「ほんで、お前が今までこんだけの力を使わずにいた理由もな」

「…………」

チラリと目線を動かし、輔忌の腕を見遣る。

先程吼翔の飛掛を打ち崩して見せた青年の両腕がほんの僅かに、しかしまるで痙攣するように震えている。

「その腕を見るに、本来はカラダを守る為に『使わない』力を無理矢理使うつてのがどれ程の事かはよう分かるわ。それだけの負担を主人に強いるたあ、全く難儀な刀だよ」良くて重度の疲労、悪ければ多少の肉離れ——つまり筋肉の断裂を引き起こしていける可能性すらある。それでも剣を手放す気配すら見せないあたり、どうやら繼戦の意思は微塵も揺らいではいならしいが。

しかし、輔忌が起き上がりつてからあの一合。あれは後方に下がつた吼翔が追い縋られなかつたのでは無い。追い縋ることができなかつたのだ。

こうして輔忌から会話を切り出すのも、言つてしまえば少しでも回復の時間を稼ぐ為だつた。時間の猶予が必要だつたのは吼翔の方では無く、他ならぬ輔忌の方だという事。

こうした会話が長引く事がどちらの益となるかを正しく理解しておきながらも、しかし吼翔は尚も探るような口調で言葉を重ねる。

「……だがそれだけじゃあ出し惜しみをする理由にはならん。消耗が速いだけの手札なら尚更直ぐに切るべきやからな。すると浮かび上るのは、お前のその能力の『本質』。アタマン中の領域を余すことなく使い倒すつつう事は、一度覚えた事を絶対に忘れることが無いって事だ。……いや、『何を忘れないようにするかを選べる』つつた方が正しいか」

ヒトの脳は何かを覚えることにつけても取捨選択を常に行う。最も分かりやすい例は短期記憶と長期記憶か。耳慣れない言語の単語を覚えたり、初見の折り紙の折り方を習つたり。そういった事は得てして短期記憶、つまりは意識しなければ明日にでも忘れるような儂いものでしかない。

だが、もしも自分の脳を自由自在に一から十まで操ることが出来るとすれば？

さして興味も無い折り紙の折り方や聞きかじつたばかりの異国の言語を、それこそ『自分の名前』や『誕生日』のような長期記憶の領域に無理矢理押し込めることが出来る

とすれば？

それは、つまり。

「一度受けた攻撃が二度と通用しない、一度成功させた事のある動きは何回だろうと繰り返せる。——馬鹿馬鹿しいたらありやしねえや。お前がその斬魄刀を信頼しとつたかはともかく、その強さには矢鱈と信用を置いていたような素振りにも今なら領ける。……まつたく、こいつを早めに引き出せたのは俺にとつてラツキーだつたぜ」

輔忌が全力を出し渢つていた理由がこれだ。消耗の早い能力の解放を前にして少しでも吼翔の攻撃を『記憶する』。

持ち堪えようによつては逆転も十分に可能ではあつたが、たつたの二合で本気を出さざるを得なくなつたこの状況は青年にとつて非常に不味い。

自ずから『切る』のではなく『切られた』手札は、弱い。

「とは言え」

「…………」

「無理くり俺の懐まで潜り込めるだけの力をお前が手にしてんのは確かや。しかも打ち合う度にお前の動きが良くなつて、俺の手札は減らされていくときた。今までのやり方を続けてりやあ、少しばかりの距離を保つて戦う俺の”飛掛”だとキツいものがあるやろな」

そう。弱点を暴いた所で生半可な事ではどうにかなる物でもない、酌率蜥蜴の無敵さはそこについた。

だが吼翔の表情は未だに曇らない。何気なく言い捨てながら、斬魄刀を軽く横薙ぎに振るい『固定』する。横一直線、ぴたりと刀身が固まつた飛掛を確かめる。

「…………？」

何をする気だ、と怪訝に思う輔忌を他所に。

まるで『面白くなつてきた』とでも言わんばかりの声色で。

「ほんなら俺も——ほんの少しだけ冒険しよか」

その柄から手を離したのだ。

「は……？」

輔忌が愕然とするのも無理はない。地面と水平になるよう傾けられた『飛掛』が、ただ両者の間に目線ほどの高さを保つたまま留まつているだけなのだ。

(まさか本当に素手で戦う訳じやないだろう。しかし何故手放す?)

奇策。

良く捉えてもそうであるとしか形容できない吼翔の行動は、しかし確実に輔忌を混乱

たらしめていた。本来ならば戦いの放棄とすら取れるようなふざけた一手だが、それが吼翔ほどの男にとつてどれほどの意味を持つ物なのか、と。

「はよ来んかい。休憩時間は終いやで」

「——つ

そして短髪黒髪の大男は、そこから一步たりとも動かなかつた。

完全に“待ち”的構えだ。今の輔忌を相手に自分から攻めるのは厳しいと判断したのかは定かでは無いが……しかし輔忌はその誘いに敢えて乗る事にした。

(……いいや、乗つてやる。この能力の消耗は早いが、並大抵の策は容易く踏み越えられる)

強化された速力と技術を以つて——ただ地を駆けた。

ごうつ!! と。一瞬にして最高速まで達した体で風を切りながら、些かの翳りも見せず完全に機能を掌握した思考を高速で拡げ続ける。

(武器を持ったままの近距離では分が悪いと判断したからこそその素手？……それなら防御はどうする？すべて躲せると踏んでいる訳じやない筈だ)

絶影を思わせる俊足を維持するのに必要なだけの集中力を注ぎ込み、一方では敵の觀察に一切の余念が無い。

身体と思考が切り分けられる。その両方を支配する酌牽蜥蜴の凶刃からは、自らの得

物を手放した男に逃れる術など有りはしない

——かのように思われた。

(……！)

あと一步で剣が届くという間合いまで迫った瞬間、輔忌の目にはとある“違和感”が映り込んで見えた。本来ならば思考の余裕などありえない刹那の間、しかし加速した思考は寸前でその違和感を看破した。

“飛掛”が、ゆっくりと落下し始めている。

それは即ち『固定』の能力が解除された証。通常の運動法則を取り戻し重力に従つてただ落ちているだけで、それだけならば特に問題は無かつたのだが。ただ何度も言うが、輔忌は気付いたのだ。

その落下先が、彼の酌奉蜥蜴の太刀筋にピッタリと重なつていてる事に。

「ツ、く――」

このままでは不味い。ここで再び『固定』を喰らえば隙を晒す事はおろか、止まる事を知らずに強化された腕力が自分自身の手首を挽き潰す――！

その結果だけは回避するべく、輔忌が臨んだ対応は迅速だった。

すなわち脱力。極限の反応速度から為されるそれは威力と反動の大幅な減衰と同時に、手首から先への衝撃を急速に受け流す！

(……コレに気付くかよ!!)

からん——という『空洞の音』が響くのを瞬時に聞き分けた吼翔は、僅かな驚きと共に

流麗な動作にて反撃に移る。

(やはり近距離を白打で押さえる気か、防御は宙吊りにした『飛掛』に任せる事で……
!)

(だが俺の『固定』はこいつにや破れねえ、防御に回す力も隙も最小限にてめーを刈り取る!)

(それでも甘い! 酽牽蜥蜴は二刀一対、最初から片方が防がれようと意味は——)
(——とでも思つてんだろうが)

時間にして僅か一秒か三秒、それぐらいの一瞬だつただろうか。思考の応酬。ここを制する者が次の攻撃を与える機会を得るだろう。

半端に空中に留まつた飛掛をかいくぐり拳の距離まで間を詰めた吼翔へと、向かつて右方向より絶死の二撃目が襲い来る!

飛掛の『壁』を潜り抜けたのは吼翔自身、彼を守る物は既に無い。
だが一体、誰が言つただろうか?

飛掛の絶対防御が、『壁』などという一つの形にしか比喩され得ない、と。

「おつ……らア!」

「！」

ある前提として。

吼翔は無策で輔忌の前へと躍り出た訳では決して無かつた。彼我の間に飛掛の防御無くして接近戦に挑むのは自殺行為だと分かつていてからこそ、潜り抜けた時に『掴んでいた』。

それぞれが個別に固定される十八の刃、その先端の一枚を。ほんの僅かな力で、指に挟んで。

がギン——！ 一体何度目だろうか、硬質な音が再び軋る。

迫り合いに持ち込めば“必ず”引き分けにまで持ち込める——例えこちら此方がほんの指先で摘む程度のごく僅かな力しか用いていなかつたとしても。それこそが十一番隊隊長、吼翔権十郎の斬魄刀。『飛掛』の防御の恐るべき脅威だつた。

(まツ、ず——!?)

いざれも必殺を想定していた攻撃を両方とも防がれた事で大きく隙を晒す。そうなれば当然、吼翔の白打はその身に届く！ がすつ、という鈍い音だつた。

「あ……？」

一瞬、何が起きたか分からなかつた。

辛うじて輔忌が目視できた攻撃の像は、拳ではなく『掌底』。大きく身を振りかぶった吼翔が、掌の付け根を用いて体の内部に深いダメージを負わせる事を目的としたそれを横薙ぎに振るうところまでは辛うじて目視することができたのだ。そして次の瞬間、

「あがあッ?!」

ぐらんツツ!! と、まるで天地がひっくり返つたかのような感覚がその身を襲う。

(顎あごを、揺らされた……!?)

酌牽蜥蜴（しょくせん）という斬魄刀の性質上、痛覚に訴える類のあらゆる攻撃は無意味となる。思考と感覚を切り分けて行動すらできる輔忌にとつて、例え金的を食らおうが目玉を潰されようが即座に反撃に移ることができるからだ。

ならばこの状況、このたつた一手分のみ生まれた攻撃の機会をどう使うのが正解だろうか？

(脳を直接叩きに来た、か……くそ。意識、がつ)

脳震盪（のうしんとう）を誘発する事で更なる“隙”を作り出す。思考の余地を奪われ放心状態となつた哀れな案山子（カガシ）に繰り出す次なる一撃。

それは靈力の源、魄睡（はくすい）への刺突。指先で摘んだ刃を掴み直し。死神を含めた靈的存在

が例外無く急所とする部位が一切の容赦無く碎かれようとしていた、まさにその寸前――

「――あああアアツ!!」

「んな……つ！」

絶叫。

本当の際々、もしかしたら偶然とすら呼べるかもしれない反射の動きがあつた。

明滅しながらも飛び込んで来た視覚情報を辛うじて処理する事が出来たのは、しかし酌牽蜥蜴の能力によつて自我を支えるのに全力を出すことが出来なければ叶わなかつただろう。

当て身を放つた吼翔の認識が浅かつた。見誤っていたのだ。輔忌という死神が持つ奥底までの限界を。

碌に判別すら出来ていない危機に対し選択したのは――果たして捨て身の対応であつた。

ザクツツ!! と。

咄嗟に翳した腕が、上腕が。

橈骨とうこつと尺骨しゃくこつの間に滑り込んだ飛掛の刃を貫通させてでも、防ぎ切つたのだ。

「なん……」

「――、

飛掛の刃ただの一枚ではこれ以上押し込む事は出来ない。どころか、輔忌を『固定』の能力でさんざんに翻弄してきたその刃自体が皮肉にもこの場に吼翔を縛り付けていたのだ。

そして当然、懷に飛び込んでまで押し通すつもりだつた攻撃が失敗に終わつた際に食らう反撃がどれだけ不味いか。それをたつた今まで経験していた輔忌が知らぬ筈は無かつた。

ゆらり——上段へと繰り出された一発の『蹴り』が、対する相手の側頭部へと吸い寄せられるように伸びていく。それを認めた吼翔は半ば無意識的に右腕で頭を覆うが、

バキべきどりイ!!

「うツ、があ……ツ?!」

想定したものをおよかに上回る『衝撃』!……受けてはいけないものを受けてしまつた事に気がついたのは、それが終わつてからだつた。

(…………あ…………)

もはや原形を留めないほどに——破壊され尽くした利き腕だけがそこに残つていた。

身体能力がこの上なく、上振れ” ている今の攻撃を何も考えずに食らって無事にいられる筈が無いのだ。

綱渡りで成功させ続けてきた飛掛の防御の感覚に狂わされてしまったのか。どちらにせよ、脳の領域を最大限に活用できる輔忌との“思考”の遅れがここに来て現れた。思わず目の端がじんと滲む。人として逃れられない生理現象としての涙だつたが、同様に腕を犠牲にした輔忌の目にるのは純粹な一つの思いだけ——闘志。

体も、力も、命も、彼がただ一人全ての能力を戦いにのみ注ぎ込むことが出来る存在だからだ。その一点はまるで二人の間に介在する“生物としての差”を象徴しているかのように見えた。

「――おおおおツツ!!」

だが吼翔も伊達に靈界の頂点、その一角に座す死神ではない。風に揺れるほどひしやげた利き腕に見切りを付け、次に放つたのは意趣返しとも取れる渾身の蹴り。しかしその矛先は先程のような致命傷を狙う上段ではなく、掬うような下段。

ばすンッ！ という、まるで何かが破裂でもしたかのような尋常ではない音を響かせ、足を刈られた輔忌は凄まじい勢いで倒れ込む。

「がつ……」

と——先程の掌底が脳へ与えたダメージは、完全に抜け切つてはいなかつた。地に倒

れ伏した状態から一瞬、輔忌はほんの一瞬だけ動くことが出来なかつた。

だが吼翔はその『一瞬』に勝負を賭けた！

「引っ掛けやがれ……っ」

——その“刀”は常に彼に寄り添つていた。

宙に散乱した刃など見もせずに、それが自分を斬りつけるなどと考えもせずに。ほんの少しの躊躇もなく後方へと伸ばした左手はまるで計つたかのようにその柄を手中に収め、そしてこう叫んだものだつた。

「飛掛けえッ！」

倒れ伏した輔忌の正中線へと振り下ろされる、正真正銘渾身の一打。

構えも碌に取れていない今、まともに食らえば今度こそ死は避けられないだろう。

(ほんの……少し……)

もう殆ど意識が擦り切れている、朦朧としていると言つてもいい。体力もいよいよ限界に近付こうとしていた。

(少しだけでいい……体が動いてくれれば、あんな大振り……直撃さえ避けられれば……)

だがあと少し、たつたの二尺か三尺、それだけでいい。それだけ体を横にずらす事さえできれば、この一回を回避する事さえできれば。

「うー、け……」

それだけの時間で頭へのダメージも回復するだろうという算段が付いていた。
(動け！　くそ、動けっ……)

最後の望みだつた。希望が残されていた。

それだけはこの土壇場で輔忌の肩を押すものだつた。

かくして致命の一撃が振り下ろされると同時——青年は体の奥の奥底から絞り出したほんの小さな、しかし確かな力が四肢に漲るのを感じたような気がした。

「あ、があああああツッ!!!!」

???????

自らの運命を名前から悟つた卯ノ花輔忌という少年が次に思つた事は、何故自分にこ

のような名が与えられたのか？　という疑問だつた。

生まれた瞬間、あるいはこの世に生を享^うける以前の自らの名付けなど当然知る由も無く、名親が誰であるかなど聞いたこともなかつた輔忌は、しかし実際には誰に聞くべきなのだろうかと——子供心ながらに直感していた。

おかあさん

ある夜、少年は母親の寝間を訪れた。就寝前の僅かな時間を瞑想に耽つていた卯ノ花八千流は黙したまま静かに子を部屋に迎え入れ、そうしてただ無言で言葉を促した。

少年は話した。憎しみを輔^{たす}き周囲に忌み嫌われる事となつた自分という存在に、一体如何なる理由をして輔忌などという名前が与えられたのか、と。

——そうですね

長い長い瞠目と沈黙の末、母は応えた。

『忌む』を『輔く』とは、成程、余りにも適當な貴方の境遇を鑑みればどこか確信めいて

いる

それでいて痛烈とすらいえる皮肉の悪辣をその名付けに感じるのは道理でしょう。——その上で今から貴方に教えるのは

幼き輔忌には何故母がそのような表情をするのか、当時は理解が及ばなかつたが。憂いを帶びた彼女の顔は、どこか悲しげに見えるようだつた。

『輔忌』。

その名前は、他ならぬ私が付けたものだという事

少年の胸に驚きは無かつた。怒りも、嫌惡もそうだつた。ただ単純に疑問だつたから再び訊いた。

卯ノ花八千流はおもむろに立ち上がり、息子の側へ歩を進めながら言葉を連ねた。

自らの行いを悔いた事はありません

それは過去にも現在にも、いついかなる未来に於いても変わらぬ必定。ただ——

囁み締めるような、吐き出すような言葉だつた。

罪人の子として、貴方に生まれながらの咎を背負わせる事になると分かつていて尚、私は何も変えることが出来なかつた

幾度と無く考えました。貴方を私の手元で育てるのは間違いなのではないかと
貴方にとつて好ましいか否かで語るとすれば、きっとその方が正しいのだとも分かつて
いました

だからこの選択は間違つていた。恥すべき事に、私は結局、たつた一つの身に余る私欲
を抑えられなかつただけ

独り善がり、とも取れる。

まるで眩きにも似た抑揚の抑えられた言葉を発し続ける彼女にとつて、女の我が身よ
り数段小さい子供が自分の言つている事を正しく理解できてるか否かは、あまり気に
するべき事柄では無いのかも知れなかつた。

だが、ゆっくりと息子の頬に手を伸ばし、撫ぜるように添える——その彼女の表情は
翳りに覆われて輔忌には良く見えなかつたが、たつた一つだけ確かに分かることがあつ
た。

——貴方を、愛したかつたから

いかなる夜闇にも遮ることの出来ない、悲哀と親愛の情だつた。

……輔忌、という名は

そつと、名残を惜しむように手を離す。

一人の母はくるりと振り向き、やがて思い出したようにこう言つたものだつた。

今貴方のような境遇を暗示して付けたものには違ひありません

ただ、その暗示には“続き”があるのです

貴方の人生はきっとただならぬ辛苦を伴うものとなるでしよう。 そうあるべくして運命付けられた樋を、私は余りにも多く貴方に繫ぎ留めてしまつた
故に私は願わずにいられなかつたのです。世界がどう在ろうと、せめて貴方自身は自分ためだけに生きて欲しい

すなわ
即ち――

『己』が心』を『輔ぐ』べし、と

クリサリス

——またもや、短い夢を見た。

卯ノ花輔忌という死神がその名前と共に生まれてくるまでの起源。遠い記憶よみがえが甦よみがえつた気がした。

酌牽くみひき蜥蜴とかけは所有者が持つ脳の領域全てを自意識の下に支配する斬魄刀。過去の体験が時折浮かび上るのは、その能力の制御を誤る所為だ。

だけど、こう何度も似たような回想が甦るのには理由がある。

わたしがこうしてお喋りに興じていられるのは余裕があるからだ。おまえをやつづけるために頑張らなくつてもよくなつたからだ。

そちら。今のわたしにとつて、おまえが見ること、聴くこと、そして……
考える全てのことさえ、思いのままだ……！

皮膜の怪人、その下劣な嗤いが脳裏を奔る。

所有者の脳を自意識の元に支配する能力——その力は、元を辿れば僕にとつて最も手渡してはならない者の手に委ねられていることを忘れてはいけない。この力がある限り、僕の全ては奴の思いのまま。

だから、尚更それが疑問なんだ。

『夢』は全て酌牽蜥蜴が見せようと思つて見ているものだ。それが何故あの夢なんだ？ 僕を潰したいなら別の記憶を見せればいい。例えば……十四年前の、あの猛火の記憶だろうか。

いいや、違う。

あいつの目的は——僕を、奴自身と同じ殺人鬼に仕立て上げること。そこに並外れた執着を抱いているのは確かだ。

もしかすると、奴はこの記憶こそがその邪悪な目的を叶えるため僕に見せるべきものだと判断しているのかも知れない。

……だとすれば、それは全くの見当違いだ。

己の心を輔く——今が正にその時ではないのか。母を救うためにはどんな犠牲も厭わないという破滅的な欲望に少しでも抗つてみせる。今の僕の“心”はそれだ。

何としてでも吼翔隊長と生きてこの戦いを終わらせる、その意思を貫く。なら、するべき事は一つだろう？

「ハア、ハア——……」

吼翔の仕掛けた最後の攻撃は成功に終わった。

倒れ伏した輔忌を全力の一撃で即死させる、という当初の目的がそのまま果たされた訳ではない。しかしながら、それに等しい程度の成果を『飛掛』は挙げていた。

這い出るかのようにして絶死の太刀筋から逃れた輔忌の体は、しかしその“右腕一本分”を覆うように巻き込んでいたからだ。

飛掛が可能にする無数の戦術の中で最も厄介なもの一つ——拘束だ。

たつたの一度でも絡め取られた上で『固定』を受ければ絶対に逃れられない。どんな縛道をも凌駕する“絶対性”がそこにあつた。

(…………終わり、か)

揺るぎない勝利を確信してはいたが、しかし慢心は無かつた。輔忌の左腕はまだ自由な上、こちらは拘束に回した斬魄刀を満足に振えもしないという状態。今でこそ地べた

に縛り付けられているが、その覚悟や能力を思えば自らの右腕を切り飛ばしても顔色一つ変えずに一矢を報いようとしてきたとしても全く意外ではない。

無論、そうなつた所で右腕を失つた輔忌に負ける道理など有りはしないのだが。やはり勝ちを確信しながら、輔忌の左手から如何にして斬魄刀を弾き飛ばした後に止めを刺すかという算段を立てていると——

「破道の五十七!!」

「な……!?」

突如として響き渡る怒号にも似た叫び声。その出所は誰であろう、他ならぬ輔忌の口から出たものであつた。

その口上が何を意味するかを知らない吼翔ではなかつたが、それでも驚愕を隠せなかつたのには理由がある。

—— 大地転踊 ——

瞬間、輔忌を中心とする周囲の地面が凄まじい勢いと共に隆起し炸裂する。

鬼道——死神が戦闘に用いる呪術の一種。習熟すれば強力な手札となり得るが、それには極めて纖細な靈力の制御と言霊の詠唱を必要とするはず。

(どうなつてやがる……)

そしてこの場合に於いて何よりも重要なのが。

(輔忌が鬼道を修めとつたやと? ……ンなもん、見たことも聞いたこともねえ)

実際に術の効果として表れた現象を見るにその筋は直ぐに消えたが、一瞬は単なるグラフではないかとすら考えた。事実、そんな話が風の噂にも聞こえない程度には輔忌の修練は剣術に重きを置いていた。

五十番台後半。鬼道を軸に戦う死神にとつて決して高くはない数字だが、ぶつつけ一番でこれほどの威力を出せるものでもない筈だ、と。

ただ――

(――長期記憶に! 野郎にとつちや過去に一度でも上手くいった体験をそつくりそのまま准^{なぞら}えるだけで良^え……隠し札を揃えるのにも絶好の能力かよ、クソツ!)

反復練習を必要としない輔忌にとつて鬼道とは『鍛え、研ぎ澄ます』のではなく『終える』ものでしかない。

斬魄刀の開放状態に限り永遠に鈍ることのない技術を通常の何百倍もの速さで修め

ることができる。そんな輔忌が鬼道を鍛える所を誰も見た事が無いとしても無理は無い。

無数の岩石群として次々と地中から飛び立つていくそれらは、同時に術者の周辺に巨大な風穴を残す。

それは斬魄刀と地面に挟まれた腕を自由にするために、どうする事もできない飛掛ではなく下に広がる地面を先んじて破壊するという発想。

巻き付くのではなく、ただ覆い被さるように『固定』していた飛掛の拘束はただの一手で意味を成さなくなつた。激しく舌打ちしつつ、吼翔は『大地転踊』の対処に追われる事になる。

「くッ」

避ける、叩き壊す、弾き飛ばす。身の丈を優に超えるほどの巨岩を後方へ跳び回りつつ次々と捌いていくが、視界を埋め尽くさんとするばかりの質量を防ぎ切るには広範囲に手が回るような鬼道系の能力を持たない飛掛では分が悪い。

片手間に揃えた付け焼き刃の手札とはまるで思えないほど——その術は完成されていた。

(この潰れた利き腕庇いながらじやあ全部を相手しとる余裕は無い。……ならう!)
だんつ!! と。

飛来する岩石群の間に僅かな隙間を見出し、吼翔はそこに迷わず飛び込んだ。そうして時に身を捻り、時に避けられぬ岩を蹴り飛ばし——時間にして一瞬にも満たない内に岩石の壁から脱出する。

（『大地転踊』は威力こそあれ所詮は中位鬼道、相手を追尾するような術じやねえ！こうして向かつて来た方向から追い越してしまえば直ぐに撒ける！ そして——）

空高く跳躍した吼翔が一直線に向かう場所、そこは未だ体勢を立て直せてもいな輔忌が蹲つている地面だった。

（これ以上の余計な時間もやらんッ！ これで終わり……）

と。

「散在する獸の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪……」

(――!!)

耳朶を揺らす言霊の詠唱と靈圧の高まり。ここに来て輔忌の狙いをようやく把握した吼翔だが、しかしその表情に焦りは全く無い。

（空中なら避けられない、とでも考えたかよ？ ……馬鹿が！ 『飛掛』の能力を忘れたか！！）

完全詠唱で威力を高めに来た。つまり次の一撃は必ず当てようという気でいる筈だ。

……だからこそ。武器を空間に『引っ掛ける』能力によつて空中であろうと構わず動

き回れる吼翔は、その瞬間思わず安堵した。

「——動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる
 (来や、がれ！ 際々の所で『固定』してやる……)」

「縛道の四 『這縄』」

だからこそ、その言葉は吼翔を驚愕せしめた。

「は——」

ひゅんつ、と。

輔忌が指先を横薙ぎに振るうと同時。

握りしめていた飛掛の柄が、その手からこぼれ落ちた。

「斬魄刀を、片時でも手放したのは。失策、だつた……」

俯きがちに呌く輔忌の表情は窺えない。

しかし、その人差し指と中指から薄つすらと伸びる光の筋は——正しく飛掛へと直結

していた。

「そして……簡単だつた。絶対に気付かれないように、小さく薄く抑えた靈圧の『紐づけ』——あの数合の間にあらかじめ結んでおくのは、本当に簡単な事だつた」

二重詠唱、という技がある。

鬼道戦術の極みとされる超高等技術。げに恐ろしきは、その片方を同様の高等技術である詠唱破棄にて発動させた事。つまり、更なる本命の鬼道が控えている。

「漸く、捉えた」

回避手段の武器を失い、無防備を晒す吼翔を仕留めるに十分な威力を込めた破道が——。

破道の六十三『雷吼炮』

——淡黄の爆雷が、晴天の空に響き渡つた。

???????

「うわあッ……!?」

「あの鬼道は何だ!?　あいつ、いつの間に……！」

「さつきの剣戟が見えた奴はいるか……!?」

二百名を優に超える立ち会いの騒めきを耳にしつつ、麒麟寺天示郎きりんじてんじろうは鬼道の余波に顔を腕で覆っていた。

「……通し、やがつたのか」

輔忌のヤロウがここまでやれるとは。十四年間も前線から退いていたとは思えねえ、この短時間で隊長レベルの戦いに適応しやがつた。
濛々もうもうと立ち込める粉塵から中の様子は見えねえが、あれじや吼翔も無事じやあ済まんだろう。……しかし。

——俺の最後の仕事に、後味の悪いモンを残していくような真似だけは許さねえ

「……」これからて前工はどうするつもりだ、輔忌

戦いが始まる前、あの時の俺の言葉を忘れたとは言わせねえぞ。て前工が迫られた選択の結果は、俺を納得させてくれるほどのモンなのか?
ここで吼翔を始末する。それも一つの選択だろうよ。

だがな、それじやあ俺は満足できねえんだ。

て前エが腹の底で何を企んでいるかなんてのは知らねえし興味も無え。それでも、そ
の傍わきで前エが「出来る事なら」と考えている望みは分かる。

誰も殺さなくていい、呆れるほどおめでたい平和な生き方つてやつを。
この世界で意思を通すには力が要る。体も、心のそれも。

俺が“上”に行つちまう前に、だからそれだけは見届けさせてくれよ。
なあ、輔忌?

て前エは本当に――

「はあ、はあ……」

と。

しゆたつ、という風を切る音と共に現れた一人の女を俺は見遣る。

「来たか……『烈』」

今日だけは顔を出さねえもんだと思っていたがよ。どういう心境の変化があつたか
は知らんが、一足遅かつたみてーだな。

そら、もう決着が付くとこだ。

「…………違う…………」

……何？

違う？ 一体何が違うつて――

違う！ 未だです、あの吼翔が……あの程度で斃される筈が無い!!』

???????

「あれは……」

修練場に突如現れた母の靈圧に僕は瞠目した。

ここからでは距離が遠く何を言つて いるのか聞こえなかつたが……。

「いや……それは後回し、か」

自分達の戦いの外で一体何があつたのかは分からぬが、どちらにせよ、先ずもつてやるべき事があるからだ。

(死なないまでに『雷吼炮』の威力は調整した。その上で吼翔隊長に力を示し、そうして……剣八の名を預かるまでだ)

成さなければならぬ事の果てしなさを覚悟しつつ煙幕に足を踏み入れようとした
――次の瞬間。

「よオ」

ガシツ、と。

“背後”から伸ばされた左腕に、首を締め付けられた。

「が、つ!?

分からなかつた。

何が起こつたのか全く理解できなかつた。あまりにも突然の事に目を白黒させるより他に無かつた。

「やつてくれおつたな。……一瞬や。一瞬だけあの判断が遅れとつたら、俺は今ここに立つてもおれんかつたろう」

ギリギリギリ!! という音まで聞こえるかのようなくびへの圧迫にようやく気付く。「ぐつ、ああああ!!」

「ツ、ち——」

苦し紛れの蹴りによる反撃だが、身体への直撃を嫌つたその剛腕により凄まじい勢いで投げ飛ばされることで回避される。

受け身も取れず地面に叩きつけられた僕がゴロゴロと転がる姿を見ながら、もはや血と汗で全身をべつたりと汚した死神は独り言として呟いた。

「やはり……お前を素手で殺しきるのは難しいかよ。どれだけ消耗していようがな……」

「うう……っ！」

徐に僕から背を向ける。そして振り向いた先は、未だ『這縄』に縛り付けられたままの『飛掛』だった。

「無駄や……」

咄嗟に指を動かして飛掛を遠くに投げ飛ばそうとするがもう遅い。その寸前に全ての刃がその場に『固定』された。

最早何者も彼らの間を遮ることができない——そう理解し、ようやく僕は疑問に思う。

(どうして……あの場面、どうやつたって躱せなかつた筈なのに！　どうやつて僕の背後から……!?)

ちやりん、と。

「…………つ！」

その時、まるで小さい金属片が地面に落下でもしたかのよう——微かな音が辺りに響いた。

まさか。はつと息を呑みつつ、先程鬼道の余波で展開された煙幕の真下を凝視する

と。

「飛、掛……」

その十八の刃の内、たつたの一枚。

それだけが『固定』の力を失つて地に落ちていた。

「まさか、」

「固定の刃はいつでも取り外せるんだぜ。……そいつを足場に瞬歩でお前の後ろに回り込むなんてのは、そう難しい話やなかつた」

どうとう自らの斬魄刀をその手に取り戻した吼翔隊長は言う——“隠し玉を持つているのが自分だけだとでも思つたか”、と。

「…………」

「……行くぜ」

左手に得物を構え、とうとう彼は走り出す。

この体に残っている体力はほとんど限界で、既に意識も朦朧としているようなものだつた。刀を握る手にはほんの少しばかりの緩みも無かつたが、それもいつ糸が切れるようになど倒れ込むかもわからなかつた。

(駄目、か……気が遠く……)

意識が途絶えかけ、今にも前のめりに倒れ込もうとした、次の瞬間。

「——輔忌!!」

誰かの呼ぶ声が。

耳に響いた、気がした。

ただ一声、叫んだ。

「お、オイ……？」

天示郎がこちらを窺うように見てくる。もしかすると——この決闘の場で私が何か

を為出かさないかと気が気でないのかもしれないけれど。
しで

ただ一声。それだけで十分な筈だから。

私とあの子の間には、それだけで。

一瞬の交錯があつた。

襲い来る吼翔隊長の飛掛と僕の酌牽蜥蜴が接触し、そして通り過ぎる。

自己を完全に支配できる僕にとつて有り得ない話だが——自分自身を生かそうとする“本能”的な何かが僕の体を勝手に動かしたような気さえした。

「ぐう——」

バキッ、という音と共に。

鋼鉄が墮ちた。

迫り来る『絶対防衛』の刃、その全てをすり抜けた僕の剣が飛掛の“刀身”を半ばから切り落としたのだ。

極まつた技量。……それは、吼翔隊長の動きの全てを終^{つい}に掌握したからに他ならない。酌牽蜥蜴の能力で戦いの全てを記憶してしまった今となつては、もう一度と“吼翔

権十郎の始解まで”が僕に勝つことは叶わないだろう。

……だけど、それが限界らしい。

僕の目にはもう、世界が世界として映つていないので。

十四年前の災禍の記憶が、完全に意識を埋め尽くしつつあった。指尖が炭化し、足元がボロリと崩れ落ちる。自分が今両足を地につけて立っているのか、顔に付いた眼球が前を向いているのかも瞭然としない。

もう指先一本すら動かせない。あと一步、ほんのあと一步を踏み越えきれず——僕は、負けたのか。

それもいい。

あの一瞬、からうじて僕の耳まで届いた言葉。

「——輔忌!!」

ようやく分かつたんだ。どうして母さんがここに来たのか、そして——
ようやく、分かつたんだ。

僕が隊長との決闘を決めたと母さんに報告したあの夜。あの涙の理由が。

薄々気付いていた事だ。僕が生来抱えてきた“母を救いたい”という不明な衝動
……これは、僕の物じやない。

誰か、いや何か。僕の知らない何かがこの心に植え付けていった紛い物、呪いのよう
なもの。

それを僕に気付かせてくれたんだ。

僕が輔けているのは、果たして本当に己の心か。

それを訊くためにここに来たんだ。

これは、僕の心じやない。

ああ——いつそ、何もかもさつぱりと投げ出してしまおう。母さんは僕に、それをこ
そ望んでくれた。今からでも遅くないのかもしれない。

普通の死神として、生きていきたいと。

こんなにも空が青いだなんて。
もつと早く気がついていればな。

「吼翔、隊長」

「………」

喉さえもぼろぼろに擦り切れてしまっているな——そう思いながら、掠れた声で降参
の意を表明しようとした、
その、寸前。

くひつ

ぞくつ、と。

「あ——」

深淵の領域からまろび出た、不浄の怪物の声がした。

???????

先程まで感じていた晴れやかな気持ちが一気に塗り潰される。腐敗した果実からだくだと吹き出る汚液のような、あらゆる魂にとつて忌避するべき感触が、毒となつて、心に滴つている。

「やめろ——」

くいひひひつ

いかんなあ……全くいかん……

気づけば奴はそこにいた。

僕の真後ろ、息遣いさえ感じる距離。余り過ぎた皮膜に覆われた体で覆い被さるよう

に、僕の耳元で囁いている。

「やめてくれ。僕は、もう」

だから母を死なせるか？ 見捨てるか？

お前は、過去の罪に苦しむ彼女に——生きてて欲しいと願つてたんじやないのかい？

……くひ

「違う、それは」

僕の本当の心じゃない。

そう言い切る前に、僕の目にあらる光景が映し出される。

更木剣八の斬魄刀が、卯ノ花八千流の胸に突き込まれる光景を。

更木剣八の腕の中で——母は、これ以上を望むべくも無いとでもいうような満足の表情を浮かべている。

これは母さんにとっての悲願なのだろう。自分が手にした力の全てはこの一戦の為にあつたのだと、そう断言できるほどに。寧ろ……その運命の決着に僕が介入することは、彼女にとつて最悪の結果の一つとさえ言えるのかもしない。でも、どうして。

僕がそんな事を望むはずが無いのに。
どうして、この結末をこんなにも受け入れ難く感じている。こんなにも胸がざわつく
というのだろう。

お前に『輔忌』は似合わんよ

相応しい名はただ一つ、これからお前が手にするものだ
強く、孤独で、その他一切をかえりみず、ただただ“自分たちを継いでゆく”ことだけ
しか考えられぬ憐れなる者の名よ

これが僕の意思ではないだろうに。

抗いがたい欲望に、なあ——お前はただ従うだけでいいのだよ
そうだろう? ……『剣八』!!

やつぱり、僕は――

あの結末が認められない。

??????

誰しもが驚愕に目を見開いた。

刹那の一合、片方の斬魄刀を半壊せしめた衝突。その直後——輔忌は、吼翔に飛びかかっていたのだ。

その動きに精彩など欠片も無く。動かせない体を無理やり動かし、ただぶつけようとしているだけだった。

「それが……」

『何か』が輔忌をここまで決定的に追い詰めた。それが何なのかは知る由も無かつたが。

吼翔は、ぼつりとただ呟く。

「お前の答えかよ」

——壊れかけの飛掛が、体を一瞬で引き裂いた。

The 11th Battle against

輔忌が血を噴いてその場に斃れると同時。

頽れるように膝を突き、卯ノ花烈は茫然と呟いた。

「どう、して……」

どうしてこうなつた、何が輔忌にここまでの事をさせた？ もしや、その原因が自分にあるとしたら——いいや、その是非を追及したところで意味は無い。ただ一人答えを知る輔忌は今、目の前で敗れ去つたのだから。

「クソッ……」

それは麒麟寺とて同じ思いだつた。

馬鹿野郎が——そう苦渋に満ちた声で吐き捨てるも、あまりにも不明な輔忌の行動、その理由が明かされる事は最早永遠に無くなつてしまつた。

だが……彼にはまだ背負うべき役目というものがある。

決着が付いたも同然である以上、場を仕切らなければならぬのは他ならぬ自分だと。吼翔が止めを刺すのを待つてからにせよ、目を背けてばかりもいられない。

そうして、どつぶりと溢れ出した血の海に沈む輔忌の体に目を向けた時。
思わず我が目を疑つた。

「な…………」

たつぶり十秒は動けずにいた。

護廷十三隊の隊長という地位に昇り詰めるまで多くのものを見聞きしてきた吼翔は、
この靈界において自分が即座に理解の及ばない事柄などそろそろ無いだろうと、どう何處
かで考えていたのかもしぬなかつた。

そして今、それが単なる思い上がりに過ぎないのだと知つた。

する りゆり

ぶくぶく、ぶくりと。
地に伏せた輔忌の輪郭が、徐々に膨らんでいくのだ。そこに一体何があるのかは死霸
装の内側に隠れていて見えないが、明らかに人としての形を保つてなどいなかつた。

そうして倒れたまま動かない輔忌の影法師が倍ほどにまで膨れ上がった頃合だらうか——“かぎ爪”のような外形をした人ならざる腕が、その襟元からぬらりと這い出るのだ。

みち　くちゅ　ちゅ……

ゆつくりと全容を現していく悪夢を前に、しかし誰一人としてその場から動けずにいた。腕から始まり、ひだのような皮に覆われ原形を窺えないほど醜い頭部、一見すれば外套を着込んでいるかのようにも見える異形の身体——死霸装の内側からまろび出た怪物は、鷹揚に口を開いてこう呟いたものだつた。

ようやつと『一步め』……かあ？

それから怪物はニタニタとした嗤いを絶やさぬままに、とあるモノに目を向けた。

瀕死となつた輔忌がとうとう地面に投げ出した二振りの斬魄刀、酌奉蜥蜴。そのうちの一本を徐に手に取つたのだ。

くひつ

「オイ……」

ここまで来るのに随分と、くひ。苦労をかけさせられたものだなあ

吼翔の半ば呆けたような制止の声など耳にも入っていないかのように、皮膜の怪人は刀を振り上げ。

一瞬の迷いも無く。まるで何十年も前からの既定事項を淡々とこなすような気軽さで。

輔忌に向かって振り下ろした。

「うつ、っふ……」

骨子と皮膜の怪物。

その余りにも不気味な存在を目の当たりにした隊士達の中には、吐き気を催し膝をつ

く者さえあつた。無理もない。それを“誇り高き護廷十三隊として恥ずべき痴態である”などと声高に罵る輩は、少なくとも彼らと同じ光景を目にした者の中には存在しない。

それだけの醜悪、それだけの惨悽。

誰もその場から動けなかつた。

——ただ一人を除いて。

躊躇なく振り下ろされた凶刃——それを受け止める刀があつた。

「な……」

両者の間に割り入る影が一つ。声も届くかどうかという程の距離を一瞬で駆け抜けた彼女は、金属音の痕かんだか高い残響が響く中でこう言つた。

「よもや……止めはしないでしようね、吼翔」

むう——

人外の膂力をもつて押し込まれる刀を——卯ノ花烈は、眉一つ動かさずに受け止めていた。

「……確かに。時の『剣八』を決する戦いに、他ならぬ私が私情を挟むなどあつてはならない」

ここで彼女が動くということは怪人にとって予想外の展開だつた。その“名”に対する拘りの強さを知つていればこそ、例え子が殺されようとしていたとしても決して出て来る筈はないだろう、と。

「ですが。何処の者とも知れぬ不埒者がこの勝敗に水を差す様な事があれば、況してや勝利の榮誉を掠め取ろうというならば」

しかし——先代剣八の眼から渦巻く“殺氣”的念。

感じ取つた瞬間には、既に踏み込まれていた。

「其れを阻むに、些少の躊躇いも無し」

ズバアッ!! と。

目にも止まらぬ神速の斬撃により、胸部から血液を噴き出している事に数秒遅れて気が付いた。

……くいひ、つ！

直ぐ様後方へと退がる事を選んだ判断は限りなく正解に近しいものだつた。だが、それが一体何になると言うのだろうか。

たつた数歩程度の距離が、初代“剣八”の戦いに於いてどれほどの意味を持つと言うのだろうか？

後ろへと跳ね飛ぶために力を込めようとした怪物は、そこで自分の両脚が消失していふ事によくやく気が付く。斬り飛ばされた体の一部を視界に入れた次の瞬間には刀を握る右腕が落とされ、ぞつとするような浮遊感に逆らえぬまま地面に落下していた。

（貴方が敗北し、じきに死ぬとしても――）

刹那の瞬間。

圧倒的な速力により敵を追い詰める傍らで、卯ノ花烈は思いを巡らせた。

（輔忌、貴方の姿は私の中で永遠の物になる。その姿を徒に穢すものがあれば……貴方を見送ることさえ、私には耐えられないから）

だから最後に、今にも命を失おうとしている背後の我が子に向かつて。

親になりきる事さえ出来なかつた女は、ただ呟くだけだつた。

「さよなら、輔忌」

胴が地に付くまでの一瞬の時間さえ与えず。その剣が怪人の命脈を絶つべく首元にまで届かんとした、正にその時。

「待て!!」

その声で烈が刃を止める事が出来たのは、それが吼翔から発せられたものだったからに他ならないだろう。

「そいつの正体——酌牽蜥蜴です！　一遍でも戦つたことがあるから俺には分かる、あいつの斬魄刀の『具象化』や！」

「…………!!」

衝撃だつた。輔忌が『具象化』を会得していないという先入観によるのもあつたが、それにしても。

醜い皮に覆われた蝙蝠傘のような姿形は元より、不遜極まる態度、染まり切つた悪意。現在に至るまで清廉な生き方を送つてきたとは決して思はないが、そんな自分からして

も一見して嫌悪を覚えざるを得ないようなこの怪物が。

動搖し、しかし依然として剣先を退けずにいる烈へと吼翔は言う。

「斬魄刀つてことは、これが輔忌の力だつてことに違いはありません」

「何を……」

「……だつたら、そいつを倒すんは」

——俺やアないといかんでしょうが。

虚を突かれた、と言つてもいいだろう。

確かに、理屈で言えばそうはなる。しかしこの状況で“剣八”としての道理を持ち出されると、は、初代である彼女自身思つてもみない事だつた。

剣八の名に対する吼翔の執着を軽んじていた訳では無かつたが、そこに至るまでの過程への拘りは——想像の範疇を超えていた。

……ぐ、ひ　いひ

僅かな逡巡の間、足元の怪人——酌奉蜥蜴が、嘆いた声で囁いた。
しわが

「無粹な事をした」……一瞬、そう思つたな?

だからお前は駄目なんだ

己の矛盾に気が付いているか? 一丁前に子を思う心を持つてゐるくせ、戦いにおける誇りだの、流儀だと、喧しい

それこそが輔忌を死なせるというのに、尚もお前は狂わずにいられないのか?

「…………」

あまりにも——そう、自らが抱える性さがを敢えて抉らんとするその発言は、彼女にとつてあまりにも重たい衝撃を伴つて体の芯に響き渡つた。

その衝撃は恐らく、怪人の物言いが否定の隙も見当たらぬほど射たものだつたから、ということではない。酌牽蜥蜴——他ならぬ輔忌の精神が象つた“斬魄刀”的言葉だからこそ、それは彼女にとつて決して目を背けることのできない『現実』だからだ。

まあ——わたしにはどうだつていいくことだとも

しかしふと、吼翔と烈の二人は疑問を抱く。

いくら具象化によつて顕現している身といえど、精神体を本体とする斬魄刀を相手に物理的な損傷がどこまで致命的なものになるかは彼らにとつて未知数だ。本体の魂魄が正常である限り、破損しようとも自己を修復さえしてみせるのが斬魄刀だ。だが、利き腕であろう右腕と両脚をすっぱりと落とされて身動きさえ取れないこの状況。

だというのに、この余裕は何だ。身体を切り刻まれ、今にも死が迫つているというこの状況で、この余裕は——？

疵きずが付くのが外側からか、あるいは内側からかということも——わたしにとつては、どうであろうとなあ？

誰も、その瞬間を認識できた者はいなかつた。

ただ忽然と、まるで最初から何もそこにいなかつたとでも言うかのように——怪物が姿を消した瞬間を。

???????

『……………』

圧倒的な薄闇が拡がる、人皮と目玉に形作られた悍ましき空間——自身の精神世界にて、輔忌は独り蹲つていた。

青年の貌に浮かぶその表情は、生まれて始めて肺に空氣を入れたかの如き自由の歎び、それを目前に踏みつぶされた絶望すらも通り越し……『無』そのものに染め上げられていた。その内心を敢えて明らかにするとすれば、謂わば『諦念』と呼ばれるものに他ならない。

くひ――

仕上がつてきたりやないか

現れたことに気配すら無かつた。

もはや聞き慣れた嗄れ声、彼のすべてを完全に支配しつつある惡意の象徴がこの上なく唐突に耳朶を揺らすが——それにも関わらず、輔忌は俯かせた顔を上げようともしないどころか、何の反応も見せる事は無い。

鍵は『諦める』ことだった

実に愉しそうに、歌い上げるよう軽やかに。ありとあらゆる爽快の感情を乗せた限りなく醜い声が、人皮と肉、そして眼球の支配する空間へと吸い込まれるように消えていく。

おまえは、ほんとうに甘かつたんだよ

多くのものを求めすぎているといつてもいい。誰も殺さなくていい結末を望むというの

のは結構なことだが、おまえの場合、それはただの弱さだ

弱い自分の心を、目を塞ぎ耳を塞ぎ、子供のようにしゃがみこんで頭を抱えるように守

ろうとしているだけ

ごろん、と。

まるで邪魔な物でもどけるかのように蹴り押された輔忌の体は、まったく無抵抗のまま仰向けになつて転がつた。

おまえに必要だつたのは、おまえが正義感から望んでいると思いつ込んでいた下らない自己防衛の手段をきつぱり『諦める』ことだつたのさ

解るか？剥き出しになつた心は今にも崩れそうだが——くひ、ようやく一步だけ前に進めたわけだ。だからこうして『具象化』にまで漕ぎ付けられた……

朗々と語り続ける斬魄刀を目の前にして、もはや心はピクリとも動かなかつた。

やはり自分には無理だつたと、過去の選択を悔いながら何も果たせないまま死にゆく絶望を頭の中でただ吐き出すだけの、物言わぬ骸に等しい存在。それが今の輔忌——いや、輔忌だつたもの。

そんな状態を知つてか知らずか、少なくとも酌牽蜥蜴は全く意には介してなどいないという様子で、機嫌良さげにも語りを続ける。

これを覚えているか？

その言葉を口にするかしないかという瞬間に、虚空から一本の刀が滲み出た。

人ならざる五指に握られた柄、そして浅黒い緋色に染まつた鞘の特徴は正しく、解放する前の酌牽蜥蜴に他ならない。

おまえが親切にもわたしに明け渡してくれた、わたしだよ

くひつ——今でも思い出すと笑いが止まらんのだが、あのときの間抜けなおまえの顔を頭に浮かべるだけでなあ？

心底から侮蔑しきつたような嘲笑。

それに対しても何の反応も示さず、ただ仰向けに皮肉の天井をぼんやりと見つめるだけの虚ろな躰。これを一通り眺めて満足すると——限界まで顔を嗤いに歪めきつた怪人は、それは愉しそうにこう言つた。

今から、ほんの少しだけ時間をやる

その間におまえがやるべき事はたつた一つだ

誰に聞かせることを意識しているふうでもなく、ただ言うべき事を口から吐き出して
いるだけだとでも言うように。

その嗤いは顔にピツタリと貼り付けたまま、刀を握る手を上段に振り上げ——
まるでいつかの焼き増しの如く。

——せいぜい『もう一步』を踏み越えるんだ

あまりにも鋭いその刃を、胸の中心に突き込んだ。

???????

「消え、た……？」

吼翔と烈、どちらともなく呟いた言葉が果たして誰のものであつたのか、という疑問は意味を成さなかつた。なぜなら、この場における両者ともが全く同じ現象を目の前にそう思つていたからだ。

姿を消す寸前の口ぶりからは存在そのものを維持できなくなつたというふうでもない。どこかに身を隠したのかと推察するも、『酌牽蜥蜴』にそのような能力が無いというの分明らかな事だ。

そして、次の瞬間だった。

「吼翔、隊長……」

「——っ!?

吼翔と烈、その両者はほとんど同時に同じ方向へと目を向けた。

それはそうだろう。もう目を開けることさえ儘ならないほどに消耗しきつた……輔忌が声を上げたのだから。

「やつぱり……僕は貴方に勝てなかつた。剣八の名を勝ち取ることもできずに、僕は負けてしまうようです」

「…………」

しかし何故だろうか、その輔忌の表情は今までとどこか違つてゐるように見えたのだ。

血を流しすぎて青白くなつたから、というだけではないだろうが——なぜだかどこか清々しいような、憑き物が取れたかのような顔だつた。

「だけど、この戦いは……僕にとつて意味のあるものでした。僕がこの場所に来させるに至つた、とある妄執を……取り払つてくれた」

「!!」

「だからもう、良いんです。そして、そう。今更、あまりにも虫が良すぎるかもしけないけれど。この言葉を口にして初めて……僕はようやく、救われる」

——降参します、吼翔隊長。

「…………」

少しだけ何かを躊躇うように、しかしその“何か”を振り切ろうとするばかりの決意の表情と共に——戦いの終幕が告げられた。

たつた今『剣八』の資格を手に入れた吼翔は暫し茫然とした後、何事かを迷い悩むような葛藤の色を覗かせながらも……程なくして返答を寄せ越すに至る。

「……わあッたよ」

「…………」

「お前の降参、受け入れたる」
〔それ〕

決定的だつた。

その宣言をもつて、ここに決闘の勝者が決まると同時に——吼翔は『剣八』を勝ち取つた。

(終わつ……た……?)

あまりにも唐突な輔忌の告白——そして戦いの終わりを前に、私はその場に縛られたかのように動くことが出来なかつた。

「ありがとうございます」

倒れ伏したまま静かに礼を言う輔忌を見ても尚、これが現実なのだという実感が湧いてこない。あれだけ願つていた子の無事を、なぜだか上手く受け止められないのだ。

それは勿論、あまりにも急な展開に頭が追い付いていない、というだけの事かも知れないけれど。

それなら……この胸の騒めきは、一体?

「……ぐ、がはっ」

突然青年が吐き出した夥しい量の血液を目にして、吼翔は自分が彼に負わせた傷があまりにも深かつたことを今更ながらに思い出す。

当然のよう目を覚ましたことで感覚が麻痺しかけていたが、酌牽蜥蜴の能力で無理矢理意識を保つてゐるだけに過ぎなかつたのだろう。息も絶え絶えという様子で、しか

し困つたような笑みを僅かに浮かべつつ。輔忌は今までの人生で決して許されることが無かつた行い——即ち『助けを求める』ための言葉を、生まれて初めて放つたのだ。

「ぐ、吼翔隊長、麒麟寺隊長の所まで……手を貸して頂けませんか。僕も貴方も、傷を癒してもらわないと」

「……おお」

とは言うものの、吼翔の右腕はもはや殆ど使いものにならないほど潰れているのだ。手を貸すとしても、麒麟寺の元にまでそのまま移動するとなるとやはり難しい。

斬魄刀の始解を解き鞘に收め、左手を空けなければなるまい——

(――あ?)

そこまで思い至つた、正にその時だつた。

その気付きはあまりにも唐突にやつて来て、無防備にも弛緩しかけていた吼翔の防衛本能を急速に刺激し始めたのだ。

ある種『矛を収める』という類の直接的な行動そのものが——その『疑惑』を抱かせ

るに至る引き金になつたのかもしけなかつた。

「オイ、てめえ……」

「何ですか？ 正直、もう限界が近いんです。申し訳ありませんが、本当に早く——」

「なんで俺を近寄らせようとしとるんや」

瞬間、息を？ んだのは他でもない——四番隊に所属する卯ノ花烈だ。

未だ修行中の身とはいえ、既にして極めて優れた回道の才能が広く認められ始めている彼女を眼中にさえ入れる事無く、ただ吼翔に自分の手を取らせようとだけしている。

今までの遣り取り、表情に垣間見えた心境などを全く無視した、いつそ冷徹とすら取れる俯瞰を極めた視点。唯々結果としてのみ場に残つた『状況の本質』とでも言うべきもの。『気を抜いた者を至近にまで誘い込む』という振る舞いは、まるで。

「くひつ」

ズアオツ!! と。

空を切る音さえ凄まじい程の勢いで振られた『飛掛』は、瞬時に切り離した一枚の刃を音速を超える速さで打ち出した。

鞭の性質を併せ持つ飛掛の最高速度をそのままに繰り出される遠隔攻撃は、疲弊しきつた輔忌の神経が捉えられる速さを完全に凌駕していた筈だった。

しかし――

「ふふ」

すうつ、と。

飛んできた刃に沿わせるように……否、そこに来ることが分かつていた刃の側面に、まるで『置く』ように左手の斬魄刀を動かしたのだ。

「――のは、まあ『留めて』くるからあ――」

異常な事態は此れに止まらない。

いつでも刃を弾き飛ばせる、その段階に至つた彼の剣は、触れるか触れないかという

限々の位置にて完全に動きを止めた。

「…………!?」

それは、飛掛の刃がその瞬間に『固定』される事を完璧に見透かした上での敢えての静止。弾く事の出来ぬ刃を弾こうとする、そうして生まれる隙を狙う吼翔の『やり方』を知り尽くしているからこそ無防備さだつた。

眉間の寸前、半ら半尺にぴたり動きを停めた刃など、もはや既に意識の外へと消し去つていたものだつた。

代わりに『誰か』が目を背けた方向。何も存在しないはずの虚空へと、再びただ『置く』ように右手の剣を持ち上げた先に。

するつ、と。

「ぐつ？」

瞬歩にて現れた吼翔の右腕が、丸ごと切り落とされたのだ。

「が、ああああああああああ?!」

「くいひひッ！ あららア大当たりイ!! 歩きのクセが出てるぞ隊長!」

全ての動きが読まれている——静止した剣に自分から飛び込んだ形になる吼翔は、得

も言われぬその不快感に、ぞつとした。

「はー、はーッ……！　てめえは……！」

「くひひひ！　久しぶり、とでも言つておこうか？　早速で悪いんだがーーー」

身体の一部を失つた喪失感、そして激痛。そんなものに気をやつている暇など全く無かった。

今まで敵対はしながらも、戦わなければならぬ運命にあつたとしても。互いに何が為にその“名”を望むのかすらも知らないけれど、望む心の情熱だけは、確かに通じ合つていた筈だつた。

なのに、こいつは一体何なんだ？

同じ顔が吐き出す言葉、歪む表情、蔑む目。どれをとつても何一つ重なるものの無い、しかし徹底的な冒瀆だけがそこにあつた。

「——返して貰おうか。この前の借りでもなあ！」

血液が溢れ出る左腕を抑え、もがき苦しむ吼翔へと迫る刀は、残つた右腕へと吸い寄せられるように伸びていく。

それは決して敵を殺そうとするものではなく、ただ単純に更なる苦痛と辱めを与えるだけの行為。何を考えるという前に、思わず吼翔に加勢しようと烈が動きかけたほどだつた。

「——やめろッ！」

瞬間、吼翔の叫びに烈は足を止める。

左手の飛掛、その“絶対防御”は健在だ。紫電一閃、瞬時に躍り出た『固定』の壁が間に挟まり、その追撃を受け止め、軽やかに空宙で回転しながら後方へと素早く下がる。片腕を失うほどの激痛の中でも翳りの見られぬその体捌きを目にし、ほうと感心したような声を漏らす“輔忌の顔をした男”も全く無視し、吼翔は決闘に割り入ろうとした不届き者へと諭すように声をかける。

「さつきも言いましたが……あいつの正体は“酌奉蜥蜴”！ 奴はまだ戦おうとしとるだけ、そんなら！ 手出しは無用！」

「しかし……！」

息子のあまりの様子に冷静でいられないのだろう、震える声で尚も言い募る烈を横目に、醜惡なる表情を隠そうともしない男——酌奉蜥蜴が言い放つ。

「ツひひ！ 殊勝！ 全くおまえは殊勝だよ吼翔權十郎！ だがそれは、ちようつとわたしを嘗め過ぎじやないかあ？」

二振りの斬魄刀を持つ手を大きく広げ、空を仰ぎながらも高らかに、謳い上げるようになこう言つた。

「おまえは“二度”！ 二度もわたしたちと戦り合つてゐるんだぞ？ その動きも、思

考も、全部この頭の中にある！ 例えおまえが『閻魔蟋蟀』を握っていたところで万に一つも勝てやせん！ —— つひひひひ、これはおまえに言つても仕様が無いかなあ？」

「…………

一部には不明な単語が入り混じつていたが、ただ言わんとしている事は十二分に理解させられた。

その言い分はどうしようもなく正しい。

酌奉蜥蜴による『記憶』、それは余りにも克明に輔忌の脳髄へと刻み込まれ、もはや吼翔という男に負ける方が難しい。そういう体になつていてるのだ。
だが、それでも。

たつた一人で戦うことを宿命付けられた死神は、この程度では止まらない。

「……てめえが『戦士』じゃなくて助かつたぜ」

「んん？」

「あーあーあーッ……！ これじゃあよオ、こんな奴と拮抗した勝負なんて演じてやる必要なんぞ無くなつた、つてことになるよな！」

突然、堰を切ったかのように誰に向いているのかもわからない言葉を並べ立てはじめた吼翔は、胡乱げに見る目線を向ける酌奉蜥蜴を他所に、一つ、烈へと小さく目配せを送つた。

「……つ」

それを何と受け取つたか——烈は途端に踵を返し、麒麟寺の元へと全速力をもつて駆けていった。

その様子を黙つて見送つた吼翔は、唯一場に残つた酌奉蜥蜴にでもなく、誰にでもなく、宙に向かつて問い掛ける。

「なあ、そうやろ?」——『ナユ』

「くひッ、何をごちやごちやと言つてるか知らないが、おまえが頼るべき烈を行かせていいのかあ? 正直言つて、あの化け物がどこかにハケてくれたのはわたしにとつて大助かりなわけだがな」

おお怖かつた、と戯けるような仕草で両脚をさすりながら顔を歪める酌奉蜥蜴に、吼翔は真正面から言い放つ。

「心配すんな、あの人にや皆を下げる貰うだけや。——今の三倍は離れて貰わな、この場にいる奴らを潰さずに済ませられる自信がねえ」

「ほう……?」

「これが最後。正真正銘、てめえに見せたことのねえ、俺の『底』つてやつはこれしかねえ」

行くぜ、と。

今までとは比較にならないほど巨大に膨れ上がる靈圧の感覚。身を焦がすばかりのそれを身に宿しつつ、ただ相棒の『真名』を呼ぶ。

卍解

飛掛抜天爪装操腕

決着

目が覚めた。

としか言いようがないと思う、多分。

「……？」

今まで自分が何をしていたのか。これがどうも曖昧でよくわからない。ただそんなさつきまでの状態と違つて、僕は自分といふものをちゃんと認識している。それを目が覚めたというなら、そななんだろうか。

ここはどこだろう。見たことのない場所だと思ったが、覚えがあると言わればあるかも知れない。

陽が差し込み、明るくて、緑がある。分かるのはそれだけだけど、どこか安心するような、ホツとするような場所のように思えた。

「……何やつとん？」

「うわっ」

その声を聞いて驚いた。何故つて、それは吼翔副隊長のものだつたからだ。

背後から耳を揺らした困惑するような口調に慌てつつ、僕は直属の上司に向かって弁明する。

「も、申し訳ありません！ 気が付いたらこんな場所にいて、」

「オメー、人んちの庭に入つといてまず言うのが『こんな場所』か……？」

「えええ……？」

そ、そんな事言われても。って、まずい。吼翔副隊長、あれはかなり怒つてゐるぞ。血管がピキピキいつてるのが見てわかる。

「……ハア、まあええわ。話でもあるんやつたら上がつてけ。茶ぐれえ出すぞ」「はつ……はい？」

「なんでそこで疑問系やねん」

戦々恐々としていた僕をよそに、副隊長はさつさと家の奥に進んでいった。こんな所にさつきまで家なんてあつたつけ？ いや、そんな事はどうでもいい。

ここでやつぱり帰ります、なんて言つちゃまずいよなあ……。

「まつ、待つて下さいよ！」

いまいち腑に落ちない所もあるけど、考えていたつてしまふがない。置いてきぼりを食らう前に、僕は急いでその後を追わなければならなかつた。

なんだか、とても大事なことを忘れているような気がするけれど。

いつも通りの日常の空氣に、何故だか酷く心が安らいだ。

??????

最初の変化は顕著に表れた。

“飛掛”の最たる特徴は、鞭状にしなる刀身に付属する十八の刃だ。そして正解の名を口にした次の瞬間、その全ての刃が、一斉に分離し始めたのだ。

ばら、ばらばら、と。見る見る内に“牙”が削がれていく己の武器の様相を一顧だにせず、吼翔はゆらりと歩みを進めるだけである。

更なる変化は——左手に握る刀身に出た。

それは非常に微妙な変化ではあつたが、しかし明らかに“性質”そのものが組み変わっているという事が見て取れた。

ぐにやり、という擬音すら聞こえるような屈曲。弾かれるように手を離れたそれは、平べつたい帯状のような、いわは“金属製の包帯”とでも形容すべき形へと姿を変え る。

独りでに宙を舞うそれは、変形を終えると同時に吼翔の腕へと巻き付いていく。

……いや、“腕に巻き付く”という表現はあまり適切ではないのかもしねない。

その帶は先程まで腕が“あつた”場所——酌牽蜥蜴によつて切り飛ばされた、虚空の右腕を依代とするように巻き付いていたのだから。

「……正直、ホツとしたつたわ」

肉体反応を確認するかのように閉じる開くを繰り返す自らの腕を見つめながら、

「こんなになつても俺の『装腕』がちゃんと動いてくれるかどうかなんざ、当然試したことなんて無いんでな」

新たに形成された金属義手には、それぞれの指先の形が奇妙に歪んでいた。

本来爪があつた部分にすつぽりと穴が空き、内部は空洞になつてゐる。周辺には尻臭花ラフレシアの花弁を縦に潰したような装飾がくつついてゐるが、指の先端方向にだけは何も付いておらず、そこだけ隙間が空いてゐる。

そして——“刀身”は“腕”に変化した。

ならば、切り離された“刃”はどうか？

ぐつぐつぐつぐつ!! と。それは無数の金属片が互いを喰らい合うように寄り集まる音だつた。

地に落ちたそれらは徐々に浮遊しながら、元の体積を明らかに無視した大きさにまで膨れ上がつていく。直径二丈約6メートルにも及ぶ球体にまで成長した後——ばつん、ばつん、という音を立てながら、再び少しづつ分離していくのだ。

しかし、その数は元の三分の一にも満たない、五枚の板となっていた。

五枚の『刃』は始解のそれに限りなく近い、絵画的表現をとつた水滴のような形状を取り戻した。

「成程」

そこで、輔忌の顔をした男——酌牽蜥蜴くみひきとかげは得心したように頷いた。

「おまえの刃は水滴ではなく、いわば『爪』だつたというわけか。そしてその装腕は差し詰め、浮いた刃を絡繳人形のごとく操る『操腕』であり『爪腕』」

その答えとでも言うように、吼翔が横薙ぎに右腕を振るうと同時、五枚の巨大な刃が爪の位置と連動しながら飛行する。

軽く振るつただけだというのに、その速度と力強さは相当のものに見える。局地的な暴風、そして土煙に目を細め、人の皮を被つた怪物は実に愉しそうに嗤つたのだ。

時はほんの数秒だけ巻き戻り。

「烈!? 何だつたんだよアイツは、どこに消えた! 状況は!!」

麒麟寺が泡を食つたように捲し立てるのを無視しつつ、長い距離を一瞬で飛び越え降

り立つた烈は唯一伝えるべき事を言う為に口を開く。

「——吼翔が卍解をするつもりです。私達はともかく……隊長格に満たない者がここにいるのは不味い！」

「ハア!? 吼翔の卍解がどうした、解るように説明しやがれ！」

かの卍解、飛掛抜天爪操装腕。

その能力を知らない麒麟寺が、いつそ過剰なほどにこうして慌てふためく烈の様子に疑念を抱くことに無理はない。だが——次に放たれた彼女の言葉は、彼の想像を遥かに超えるものだった。

『距離』を離せと言っているんです!! この場に何百もの死体の山が積み上がるような事になる前に、早く!!』

「ヒヤア!!」

“装腕”の動きに連動して襲い来る巨大な刃の乱撃を、酌奉蜥蜴は高揚に叫びながら次々と受け流していた。

卍解によつて莫大に膨れ上がつた靈圧、そして手指を動かす速さをそのまま拡大して

損なわぬ大質量の攻撃力。大地を揺るがす轟音と共に振り下ろされるそれを真面に受けたれば、矮小な二振りの斬魄刀などたちまちの内に肉体ごとすり潰されていただろう。

「くひははは!! さあさあどうする、さあどうする！ 一度受けが成った攻撃じやあわたしを殺せんぞ！ もつともつとお……目新しいものを見せてくれんとなあ!?」しかし怪人の防御はそれ以上のものだつた。粗野な口調からは想像もつかない流麗な剣筋が織りなす受け流しの連続……見る者に舞踊を思わせる程の技量は、宙を自在に飛び翔ける爪牙の刃を全く寄せ付けずについた。

今でこそ防戦に手一杯という様子だが、その技術を尋常ならざる速さで『記憶』しつつある彼が攻勢に移るだけの技量を身につけることにはそう時間はかかるないだろう。

「…………ふん」

と——その時、吼翔の猛撃がはたと鳴りを潜めた。

金属義手を手前に折り曲げて『爪』を引き戻したかと思えば、彼は奇妙な事を口走り始める。

「そろそろ潮時。綺麗な締め括りとはちと違うがよ……さつさと終わらせたるか」

「あああ？」

あまりに唐突な勝利宣言。

当然訝る酌牽蜥蜴だが、ほどなくして得心行つたと一つ頷く。

「何だ、この期に及んで見せていない手札がまだ有るとでも？　いいだろう、わたしを殺せるようならば——」

「既に」

と。

そこで漸く怪人は気が付いた。

「見せとるわ」

ぎりぎちギチぎりギリリ……！　と。

何かが軋み、そして歪んでいくような酷く不気味な“音”が、吼翔の眼前で留まつて
いる正解の刃を中心に響いていることを。

「お前、空を掴んだことはあるか？」

「何い……？」

何が軋む音なのかは分からぬ。分かりようがない。ただその音を聴いていて感じ
るもののがどういった感情なのかは分かる。

自分でもとても信じられなかつた。彼は彼自身とその感情は全く無縁であると思つ
ていたからだつたのだが——

「始解と関連せん能力の正解なんてありやしねえ。そいつは斬魄刀のてめえ自身が一番

知つてゐる事やろうが。俺の“飛掛”的能力は『刃を宙に引っ掛け』ること。その全てが俺の指先に宿つたということ……」

それは“不安”と呼ばれるものだつた。

理由など未だに分からぬ。だがだからこそ、いわば一生物としての、いや、この世界に存在する一存在としての本能に訴えかける異常な感覚だけがそこにあつた。喻えるならば、そう。堅牢な鉄芯に支えられた巨大な塔が、その芯を丸ごと砂の柱に置き換えられたような。

これ以上あの“音”を聴いてはいけない、と。

「もう一度言うぜ、空を掴んだことはあるか？」
掴めねえもんを無理に掴んで、どころか
ただ掴む以上の馬力が出ちまつたとすりやあ、何がどうなるか想像ができるか？」

分からぬ。目の前の男が何を喋つてゐるかなど分からぬ。分かりたくもない。
力チカチという小さな雜音が新たに聴こえてきて驚いたが、それが自分の口から響いて
いることには終ぞ気がつく事はなかつた。

「よく見とけや、とんでもねえ事が起こつてるぜ……」

「何をする気だ、おまえツ―――!!」

しかし、その動きはどうしようもなく遅かった。

彼は余裕を見せ、時間を与え過ぎたのだ。自分を殺せる手立てがあるものなら見せてみろと、そんなものが間に合う筈もなく――

「天の蓋が、引っこ抜けんだよ」

ばづンツ、と。

世界から、音と光が消え去った。

???????

「ん……?」

「妙な顔しくさりおつて。どうしたよ?」

「いえ、ちょっと揺れたような気がして」

足元がぐらついたような、とても大きな振動か何かが地面を通り抜けたような。副隊長の家でお茶を頂いていた僕は、そんな不安を煽る感覚を感じたのだった。

吼翔

「魂界にも地震があるとは知らなかつた。過去や未来の出来事ある程度見渡す“記憶”を持つて生まれた僕だが、生憎とありとあらゆる知識を隙間無く持ち合わせている訳では決してない。

この世に生を享けてはや数十年経つが、始めての体験というものに事欠くことは意外と少ないものだ。——と、そんなふうに能天気に構えていたのがいけなかつたのだろうか。

ぐらあつつ!! と、先程とは比べ物にならない揺れが僕達を襲つたのだ。

「う、わツ!」

ちやぶ台の上に置いていた僕の湯呑みが音を立てて碎ける。突然の事態にどうすればいいか分からなくて吼翔副隊長のほうに目を向けると……

「わあちちちちち!!! あつ、あつづあ!?」

「…………」

その湯呑みをなんとか両手にキヤツチしていた。ただし、熱々のお茶をだばだばと辺りに溢しながら。

自宅のものが壊れるのを嫌つてどうにか手を出したのか。そうすると、彼つて意外と

貧乏性なのかもしれない。

「オイ！ 口に出てんぞ誰が貧乏性やコラ！」

「いえ、その……小さい頃から屋敷暮らしだつたもので、そういうのはちょっと僕にはわ
かんないです」

「てめえ!!」

あまり知りたくなかつた上司の価値観を目の当たりにして唸つていると。

「ちくしょう……ともかく、怪我あ無かつたか？ 割れた破片は危ねえから触んないで
待つてろ」

思いも掛けず、返つてきたのは僕を心配する言葉だつた。

ぶつくさ文句を言いながら台所に引つ込んでいつた彼を見送つて、僕はその認識を新
たにした。

——やつぱり、優しいな。

ただ強いというだけではない。口調こそ乱暴だが、殺伐とした十一番隊の副隊長とし
てはやや似つかわしくないと言えるほどの姿勢は僕にとつて心地良くもあつた。

雑巾はどこにやつたかと探している副隊長を横目に、まあ、ああは言われたけど手伝
いはしないとな。せめて自分の湯呑みが割れたものぐらいは集めておこうと、何とは無
しに一番大きい破片を手に取ると、

「あれ？」

手にあつたのは、破片ではなく、剣の柄。

それも、これは、この刀は。間違えようもない——
どくんと、心臓が跳ねた。

???????

「ブツ壊れた空間が元に戻ろうとしてんのか……神様が決めたルールってやつが乱されたからなのか」

荒廃。

赤熱した大地には何もかもが残らず、全てが死に絶えているだけだった。

死と無のみが支配するその場において、ただ一人言葉を喋る誰かが——吼翔権十郎が言つた。

「どういう理屈かは俺自身よおワカらんのだが、ともかくすげえ爆発が起こる。俺の正解が空を掴んで、ねじ切つてやるとそなんだ。そういう事になつとる」

端的な表現ながら、全くその通りだった。

その爆発は辺り一面を呑み込み、十三隊最大の敷地面積を誇る十一番修練場の実に七

割を埋め尽くしていた。

その爆風の中心に立つ吼翔がどうして無事でいられるのかといえば、それは『飛掛の刃』が持つ『絶対防御』の特性によるものに他ならない。

「グゴゴゴ……と、一列に並んだ傷一つ無い正解の刃が『固定』を解かれると同時に動きだす。その陰から姿を表した吼翔は、掌を上に向かた右腕の金属義手をゆっくりと開いていた所だった。

誰もを消し飛ばす最大の暴力から、無敵の防御によつて自分だけは逃れることができ。それこそが吼翔の正解、『飛掛抜天爪操装腕』の理不尽さだつた。

「しかしそよお——まだ生きていらるんかよ、てめーは」

驚き呆れるこども忘れているという様子で、吼翔は目の前の『かたまり』をただ見ながら呟いた。

吼翔を除き、爆心地から最も近しい場所にいた男。

輔忌の肉体を乗つ取つた斬魄刀、酌牽蠍蝎は血反吐を吐きながらも尚囁い続けた。

「くつ、ひひ。良いのを一発、貰つてしまつたなあ——本当に、良い刺激になつた」

辺りに満ちるのは爆風がもたらした虚無だけではなかつた。衝撃を食い止めるために展開された数十という数の鬼道の残骸がそこら中に散らばつている。

あの一瞬でよくもこれだけの事が出来たものだ。そう吼翔は思うが、完全にとはいか

なかつたらしい。万全の状態で同じ爆発をもう一度防ぐというなら分からぬが、どうやらあの様子では無理がある。

「まだやるか？ 先に言つとくが、今の一度や二度しか使えねえだらうなんて希望を抱いてんならやめとけよ。確かに『ねじ切る』までにもけつこ一靈力を使うが、あの『爆発』はあくまで勝手に起きたモンでしかねえ。その気になりやあ何十回でも同じことができるし、その全てを俺だけは生き延びる」

何十回。

単純に巻き起こす事ができる破壊力の量で言えば、吼翔の正解は『残火の太刀』にすら並ぶとすら言えるかもしねない。

しかし——それほどの圧倒的な脅威を目の当たりにしても尚、酌率蜥蜴の下卑た嗤いを崩すには至らなかつた。

「ぐ、ばつ……はあ、はあ……ひ、ひひひ。最強の死神……『剣八』の名を、流石狙うだけの事はある……」

「何が可笑しい？ 諦めて死んでくれる覚悟でも出来たかよ」

「いいやア……ほんとうに、羨ましいと思つたのさ。その靈圧、力量、何より……それだけの力を悠々と扱うだけの、精神力。おまえの『飛掛』といつたらまつたく果報者さ。わたしの持ち主がおまえ、吼翔であつたならばどんなにか……」

「願い下げや、下衆が」

吐き捨てるような拒絶の言葉を突き付けた直後、再び正解の装腕を握り込む。「死ぬ時の最後の一瞬ぐれえは——主人と添い遂げる覚悟を待つて逝くもんや」ギチギチぎりぎり!! と。

空間そのものを破壊する、膨大な力の奔流が五枚の刃に込められていく。解放の瞬間、起爆、来る——、

「くひツ——」

??????

「はあ、ハア、うううつ——」

どうして? どうしてこうなった?
どうして、どうして……

目の前。血の海に沈む青褪めた顔。良く知つた、あんなに優しい人の顔。

その人の胴に馬乗りになつて、僕は何度も何度も剣を振り下ろしていた。

後ろから襲い掛かられてすぐに手足を動かなくして、やめてくれと叫ぶ彼をいかに切り刻んでやつたかを思い出す――

まずは左腕の付け根を抉り込むようにめちやくちやにした。右腕を半ばから切り落としてやつた。その後は全身を見境なくズタズタに刺した。

むせ返るような血の臭いと手に残る感触。酸っぱいものが喉の奥まで込み上げてきたのを感じる。目の端に自然と涙が溜まる。口を手で押さえて、死体の上に跨つたまま、僕は子供のようにただ蹲つた。

「どうして……」

「ごうん、ごうん……！」と。

再び世界が揺れ動く音が聞こえる。地震のような、どこか遠い所で何かが爆発するようだ。

その胎動を体で感じる度に殺意が湧き上がつた。

目の前で呑気に雑巾なんかを探す吼翔副隊長がどうしようもないほど憎くなつて、殺してやりたいと思うようになつた。何故だかは全く分からぬ。だけど、確かに望んでいたんだ。

副隊長は、僕が望んだから死んだ。

この『揺れ』は何だ。どうして世界が揺れるほど……僕は、彼をどうしても殺したくなるほどに憎むんだ。

「おまえ、オマエが……」

また、まだ。世界が揺れて、動いて、また僕は彼を……

「オマエが悪いんだ……ツ」

ぐちやぐちやになつた感情を誰に向けてでもなくただ吐き出す。死体に向かつて剣を振り下ろす氣にもなれず、喉が張り裂けるのにも構わず絶叫する。

訳も分からずぐつぐつと沸き立つ苛立ちと憎悪を少しでも抑えようと歯を食いしばつて俯いていると——どこからともなく、酷く聞き慣れた声がした。

いいやア……奴は**なん**何にも悪くない

「つ……!?」

認めろよ なにもかも上手くいかなくて いい加減いやになつて殺してやりたくないつたつてこと

スカツとして気分が良くなつたこと……

「酌牽、蜥蜴？ 貴様か、僕の頭を操つたのは……」

違う 違うぞ

あれをこつちに写し取つたのは わたしだが 殺したのは正真正銘 おまえの気持ちさ

気がついてないかもしけんが……『外』が少しばかりやばいことになつてる ここが消え去るのも時間の問題

世界が揺れる 動く その度おまえが 奴に殺意を抱くのは ある種の防衛本能 当

然だ

「つあ、……うああ……」

分かつたろう 思い知つたろう
目的のため 自分のため 生き物を殺すなんてこと 大したことはないだろう
それを知つたおまえは『資格』を得た
ほんとうに おまえは良くやつた
良くなぞ わたしを『屈服』させたな

さあ 共に 奇跡をもたらそう

一度 絶望に融かされた 怯弱たる心は。
あるべき形へと 変わっていく。

めき。
めきつ
。 。

めきめきツ

??????

「何だよ、ありやあ……」

空間を引き裂く爆風が過ぎ去った直後。

身を護らせていた『爪』の刃を退かし、視界を確保した上で目に入つたモノ。

「まだ死んでねえ、だと？　いや、違う。それどころじやねえ」

——何や、あの『樹』は？

吼翔の眼前に突如現れたのは、一本の枯れ果てた樹木であつた。葉を付けず、灰色に

朽ち、どこか希薄な存在感を漂わせる。——そして最も異常な特徴は、その存在感そのものだつた。

「で、つけえな……」

巨大。

自分達が今居る十一番修練場をそれこそ覆い尽くすような、吼翔の『飛掛抜天爪操装腕』^{スケール}が巻き起こす爆発に劣らぬ規模の物体。それにも関わらず存在感が希薄なのだ。視界に入れている今でさえ気を抜けば忘れてしまいそうな、路傍の石くれでも見るような認識を抱きそうになるとでも言うようない。

今にも朽ち果てそうな、しかし十二分に太い枝の先端全てに繋がっているように見えるのは『鎖』だろうか。無数のそれが垂れ下がり、どこに繋がっているのかと見ようとすれば……意識から外れる。見ることが、鎖の先を認識すること 자체が何故かできな

い。

(なん、だ? こいつを見ると……妙な気分だ……)

決して悪い気分ではないのが不思議だつた。頭が冴えるというか、周りの空気を鋭敏に把握できるというのだろうか……。まるで冷水を頭から被つたようなハツキリとした感覚がじわじわと強くなつていくようだつた。

「ぐ、がつ」

だからこそ気が付いた、のかもしない。

遥か遠く。爆風に吹き飛ばされ、血と肉がぐしゃぐしゃになるまで痛めつけられた輔忌の体が——その時確かに動いたのだった。

「……『具象化』と来てまさかとは思ったがよ。この短時間に『屈服』まで達成するか。こんな土壇場で辯解に目覚めるやど？」

天才。

陳腐ではあるがこの上なく的確、そんな言葉を連想した吼翔だが、それ故に無念でもあつた。若き才能が芽吹いた瞬間に立ち会えたのは光榮ではあつたが、その芽を潰さなければならぬのも他ならぬ自分なのだと。

あるいは最初から辯解を身に付けていれば、胸中に巣食う『恐怖』を除いた上で戦いを挑まれば……結果は誰にも分からなかつた。

だが今の輔忌はどうだ？ 全身に限無く傷を負い、自身の斬魄刀に刻み込まれた精神の傷は計り知れない。

終わらせる。この五指を軽く振るえば、吹けば倒れるという程に衰弱しきつた肉体はもはや『爆発』の能力を使うまでもなく紙切れのように轢き潰せる。どんな技で受け

流そうと、そもそも全身の筋肉がズタズタに断裂していればどうしようもない。

「本当に、お前は良うやつたわ。ここ数年お前を一番近くで見ていた俺が認めたる。……これまで追い縋られるとは思わんかった。次に戦うような事がありや、俺はたぶん負けとつた」

「…………」

「…………」

肌を刺すような痛みを伴うばかりの沈黙が過ぎ去った後、先に動いたのは吼翔だった。絶死の爪腕を振りかぶりつつ一步を踏み出し――、

天地が裏返った。

少なくとも吼翔にはそう感じられた。しかしそれを喰らつた彼自身でさえまるで意味が分からなかつた。

今の状態を一体どう形容すべきなのであろうか。天と地が、裏返っている。

文字通り、地面が上に、空が下に在るよう見えるのだ。

「なつ……!?」

上下がそつくり逆様さかさまに見える。視界がぐるりと反転するという異常な感覚に、吼翔は一度歩みを止めざるを得なかつた。

たちまちバランスを崩し、その場にもんどり打つて倒れ込む。身に降りかかつた事を思えば無理からぬ事のようにも感ぜられるが、とんでもない。

目を瞑つても問題無く歩けるほどに優れた運動神經と空間把握能力を持つ吼翔が視界の上下を逆転された程度で転ぶなど、到底有り得ない話ではないか。

「? ……!?

早い話——最初に起つた“分かり易い”異変が、更なる異変の感知を妨げていたからだ。

足に力が入らない。

息が詰まつて苦しい。

体中に鈍い痛みが奔る。

なのに上手く呼吸ができない。

ギラギラと周りが眩しくてたまらない。

腕の痛みに噴き出していた汗がぴたりと止まつた。

そして何より、ひどく眠い。

(何や、これは……！ 奴の正解の能力!? つつうか、)

——どういう能力だよッ!?

始解との繋がりが無い正解の能力は存在しないと言うが、吼翔の身に降りかかった異変は余りにも多様だつた。確認できただけでも十を越えるそれらが次々と増え、または減つていく。

(不味い……ツ、この隙はヤバい！ だが力が……)

「グオああ?!?
ツ ツ
!!!!!!」
??
??
??
??
??
?ア
オーーーーツツツツ

耳を疑つた。

仕事柄、地獄の門が開く瞬間など数多く目にしてきた吼翔だつたが——その絶叫は、その悍ましさは、この絶叫にも遙かに及びはしないだろう、と感じた。

こんな音が、自分と同じ生き物の喉から発せられるとは思いたくもなかつた。

「うつ、あ……」

上下が反転した視界から辛うじて目に入つたのは——二刀の頃の酌牽蜥蜴とは似ても似つかぬ片刃の直剣をたつた一本ずらずらと引き摺り、ゆつくり、ゆつくりと此方へと歩み寄る輔忌の姿であつた。

脇差より少し長い程度の短小な刀身は通常の長さと同程度に伸びていたが、握り拳二つばかりという刃の縱幅は特徴的だつた。

尸魂界では目を引くタイプの刀剣ではあるが、例の巨木と同様の存在感の希薄さが目についた。柄の先端にはやはりというべきか、何処に繋がつていてのかが認識できない奇妙な鎖が下がつてゐる。

（あいつツ、俺を殺す氣でいやがる！　どうにかして……立たなけりやあ……）
これほど無様に地べたを這つたことなど今までの人生で一度もなかつた。生きるの

に必死だつた。勝つのに必死だつた。勝たなければならなかつた。

少しづつ体に力が戻りはしていたのだ。平方感覺も正常に戻りつつあつた。どうやらこの能力は強大かつ不明瞭だが、抗うこと自体は不可能ではないらしい。もう少し時間があれば立つことだつてできると思つた。

しかしそれも——『症状』の進行が、命に届くまでは。

「あえ……？」

気がつけば、意識が朦朧としていた。

全身の力が再び抜け落ちていく感覺。

(おれの、心臓とまつて？)

どしゃつと音を立てて倒れ込み、なんとか目を向けた先に見たモノ。

胸のど真ん中に突き刺さつた刃と溢れ出る血液を最後に、冷たい闇の底へと永遠に消え去つた。

剣八の墓標

最初の記憶は、土と血のにおいだつた。

男たちの怒号と悲鳴だけが響く場所。

殺して奪うが当たり前。掃き溜めのような暮らしの中で、ただ一つ焼き付いた覚えがあつた。

でつけえ背中が、俺を守つていたことを。

流魂街の末も末。北の最低地区、第八十地区『更木』に生きることを強いられた俺——吼翔権十郎は、この土地の例に漏れず盗賊まがいの仕事で食いぶちを得ていた。食いぶちと言うが、当時の俺はハラが減る魂なんてのはそうそういないつてことを知りもしなかつた。

といつても俺のようなガキンちよがこんな土地で生きてられるわけもないから、ああ、守ってくれる大人がいたことだけはマジに幸運だつた。

物心ついた頃、俺は一人の男と暮らしていた。

やつは馬鹿みてえに腕つぶしが強いんで、そちらのごろつきの身ぐるみ剥いだりする

のが楽でよかつた。

俺はそいつのことを『親父』と呼ぶようにしていたが、実の父親なのかどうかは知らん。母親はいなかつた。もしかしたら、みなしごを集めて育てるのが趣味なのかもしない。

人が住んでる草ぶきの家を燃やして回つて俺と一緒に爆笑してるようなどクズだつたが（ガキンちよのした事だ。奴はともかく、俺は許せ）ともかく、どうもその説はアリなのやもしれぬと思うに至る事件が起きた。

「ごん！ めしの支度できてつかー？」

「親父ー？ どやつた、今日の釣果はー？」

「喜べ！ おめえ妹できたぞ！」

「は？」

驚くべきことに、俺に妹ができたらしい。

そりや『は？』だよ、マジで。

奴の大きな腕にちょこんと抱かれた、俺の半分くらいのちっこい人間。今にも泣き出しそうな女の子がぶるぶると震えあがつっていた。

「なんで？」

「よく見ろ、この子……」

「うん」

「かわいいじやん」

「バカ」

犬や猫じやないんだから、人の子をさらうな。しかし、もしかすると俺もこんな風に拾われたのかもしれんのだと思うと強くは言えん。

まあなんやかんやあつて、吼翔奈優なゆという立派な名前をもらつた女の子と一緒に暮らすことにはいなつた。そんな一大事を軽く流すなつて？ うるせー、これが我ら吼翔一家のノリや。なんでも面白けりや、まあいいつてことよ。

わざわざ親父がみそめるだけの事はあり、ナユはかわいいやつだつた。いつつもオドオドしとる臆病者で、正直なところ居ても良いこととかは特に無かつたが、お兄ちゃんと呼ばれるのは悪くなかつたので、俺らも精一杯守つてやつたさ。

ところで、俺も喧嘩はまあまあやる方だつた。親父のもとでのびのびと鍛えられたからか、近頃は奴と一緒になつて暴れまわつていた。知らん人をフクロにして金目のものを奪つたり場合によつては殺したりすることを悪く思わないでもなかつたが、こんなところにいるのは大抵クズばつかりなのでやめることはなかつた。

親父は本当に楽しそうに人を殴るから、俺も戦いは嫌いじやなかつた。朱に染まつていつたんだな、二つの意味で。

それで、しばらくナユと暮らしていく、なんだか俺に訊きたいことでもありそうな遠慮がちな視線を向けてきたもんだから、俺はお兄ちゃんだからな、快く聞いてやつた。「どうすれば、お父さんやお兄ちゃんみたいな強い人になれますか?」

「お前にやムリ!」

泣きそうになつたナユを慌てて宥めすかしていると騒ぎをききつけた親父にゲンコツをくらつた。くそが。

だつてしまふがない。ナユはどう見ても荒っぽいことなんて出来ないもんな。

そんな俺たち一家の暮らしは楽しいもので、あつという間に数年が経過した。めちゃくちゃ強い奴の下で思いきり暴れて、家に帰つたらかわいい妹と笑つて、食べて、風呂入つて寝る。

最低地区とは思えない面白おかしい暮らしは、言つても貧しくはあつたが、何度でも言おう。楽しかつたさ。

ある夜。

寒風吹き荒ぶ森の中で、俺らはとあるボロの木造小屋に居を構えていた。今日もよく暴れると、ある種心地よい疲労感と共に寝に入つていたところだつた。

ちやりちやり、刀を研ぐ音が聞こえてくる。

「親父？ 今夜も出るん？」

「起きんでええよ、ハナタレ。くうー、今日はやけに寝れんくてなあー」

あの刀、あれは死神たちの斬魄刀だ。

何年か前に見かけた死神の死体、ありや虚ホロウにやられたんだと思うけど、そこから盗み出した一品だ。親父は勝手に我が吼翔一家の家宝だと何か抜かしていたが、それからだ。親父の『趣味』が始まつたのは。

しばしば、眠れぬ夜に人を斬る。

イカれてるなーと思うかもしけんけど、ここじや割と普通のこと。戦うのが好きな親父のことだから、俺も別に思うところは無かつたさ。

「何でも相当の使い手があらわれたつて話だぜ。」幾度斬り殺されても絶対に倒れない”……それを指しててめえに『剣八』と名を付けた女”

「ふーん。そういや昼にボコつたチンピラがそんな事言つとつたなあ」

そう言い残して、親父は小屋を出ていった。

程なくして雨が降り、帰りは遅くなるかもなー、なんて漠然と思つたりもした。

そうして、朝になつても親父は帰つてこなかつた。

そんなこと、そんなバカなことがあるかと思つたさ。はつきり言やあ俺はある人のを無敵だと思つていた。斬魄刀まで持つて鬼に金棒。噂に聞く刀剣解放とやらが出来るようには見えなかつたが、一度、天を見上げるばかりのくそでかい虚を一撃でぶつた斬つたのを見てからは、誰もあの人を止めらんねえなど確信したもんだつたからな。

昼を回り、夕方になつても帰つてこない。ナユのやつが不安げに俺を見る。いよいよ泣きそうだ。慰めてやんなきや。

「大丈夫や。……あいつが帰つてこないことなんて、ないつて」

「うん……」

その日の仕事はやめにして、俺らは飯を食つてそのまま寝た。明日、親父が帰つてすることを心から信じながらだ。

その晩、夜更けのことだつた。

親父は帰つてきた。

見知らぬ長髪の女に肩を貸してもらつて、親父はどうにか帰つてきたのだつた。俺らは俄かに喜んで出迎えた。

だが、その傷に俺は絶望した。血だらけで、顔は真っ白。衣服はあちこち穴が空いて、襟襷を着ているのと変わらなかつた。それを見て、もう助からない、と悟つた。

親父を連れてきた女は親父と同じほどではないが、負けず劣らずといったふうに傷だらけの血まみれだつた。相当疲弊した様子だつたが、確かな余裕がまだあつた。女は言つた。

「その男の誇り高き強さに免じ、最期の願いは確かに聞き入れました」

「こいつだ。

件の剣八。親父をやつた奴。俺はそいつに飛びかかるうとしたが、目を向けた先には既に誰もいなかつた。消え去つた。

「……ナ、ユ……」

ハツと気がつき、親父にかけ寄る。

なんだ、何を言おうつてんだよ、くそ。俺たちを……ナユを置いていつてくれるなよ。「あの、剣八……卯ノ花、剣八。……恨まないで、やつてくれ。あいつは、おれの光でいてくれた……最後まで……。おれのような人間にとつて、あんなに嬉しいことはなかつた……」

「ば、バカ！　くそ親父！　んな事言われたつて……俺らはどうすりやあいいんだよ……ツ！」

「う、ああ……お父さん、お父さん……」「……」免なあ

息が浅くなってきた。もう時間がない。

「ごん……聞いてくんねえか」

「なんだよ……ツ」

「あいつの強さに、おれあ……惚れちまつたんや。何度斬つても倒れねえってのは、本物やつた……」

「…………」
そう語る親父の目は、これから死ぬものとはとても思えないほど爛々と輝いて、まるで子供のようだつた。

戦いの愉しみを知らんでもない俺の心根に、その目はぎくりと深く突き刺さつた。
「いいなあ……『剣八』だつてよ、俺も……あの名、を……」

親父は、息を引き取つた。

朝になり、小屋の裏に遺体を埋めて、小さな墓を建ててやつた。ナユが泣きながら手伝うといつて聞かないでの、余計に時間が立つたような気がする。

小屋に戻つて泣いてるナユを慰めてるうちに日が沈みかけてきて、外はすっかり夕焼けに染まってきた。いたたまれなくなつた俺は外の空気を吸うため、裏の墓のところに行つた。

墓には親父が使つてた斬魄刀が掛けてあつて、何だか寂しそうに見えさえした。この下にあの無敵の親父が眠つてるなんて、どうも現実感のないことに思えた。

「お兄ちゃん」

「わッ」

驚いた。中で泣きじやくつていたナユがいつの間にか後ろにいたからだ。

俯いた顔の表情は見えないけど、その雰囲気がなんだか幽霊みたいで少し怖かつた。俺らはもともと幽霊みたいなもんだけども。

「お父さんの遺言……覚えてる?」

「あ、ああ。『剣八』を恨まないでやつてくれ、とか。……バカげた話やな。てめえを斬り殺した奴を気にかけるなんて」

あの人らしいと言えば、らしい。

という言葉までは出てこなかつたが、それくらいナユも分かっているだろうな。

「違う。そつちじやないよ。……お父さん、『剣八』の名前を、欲しがつてた」

「……そうやな」

自分では手が届かないことを分かつても、それでも焦がれずにはいられなかつた。……その夢を、最期は俺に語りかけた。

「そうだよ。お兄ちゃんなら、できる。そう信じたから、お父さんはお兄ちゃんに託し

たんじやないのかな？　お兄ちゃんなら……！」

「……悪いな」

俺は……そんなものの為に命を捨てられるほど、強くはねえんだ。あの人の代わりには、とてもじゃないがなれやしない。

もう、この戦いは終わつたことだ。これからは二人で生きていくことを考えなきやならん。そう言い捨てて、俺は逃げるようく小屋に入つた。

この時、俺が気付いていれば、全てが変わつていたのかもしれない。それが出来なかつたからこそ――。

翌朝、ナユの遺体が見つかった。

目が覚め、隣に寝ているはずだつた妹がどこにも居ない。まさかと思い裏の墓を見に行くと、立て掛けた斬魄刀がどこにもない。こそ泥が入つただけならどれほど良かったことか。だが、始めから犯人などいなかつた。

森の奥。陽の光も疎らな奥地に、ナユの体はバラバラに喰い千切られて散らばつてい

た。

虚なんて大層なものじやない。オオカミだ。なんて事のない獣の群れが、家族を食わすために妹を殺したに過ぎなかつた。

「あ、ああ……」

なんで、どうしてこんな事を。何の力も持つていなし、非力な妹が、なぜこんな事を。理由なんてもちろん分かつていた。分からぬんてしちゃいけない。妹の遺体のすぐ側、魚の小骨でも除けるように打ち捨てられた一本の刀は……親父の墓の、斬魄刀だ。

「うつ…………うわあああ!!!!!!」

妹は、妹は、俺の代わりになろうとしたんだ。

不甲斐ない俺の代わりに、強くなつて『剣八』を手に入れようとひただけなんだ。強くもない、刀の振り方なんててんで知らないってのに、どこまでも親父のために！

親父の形見をもつて、あの臆病なナユが小さな勇気を精一杯に振り絞つて、暗闇の森に一步を踏み出し、ただの獣に喰い殺されて無様に死んだ。

「うううう、あっ、ぐあああ……」
どこまでも腑抜けな俺のせいで死んだ。死んだ。俺に代わつて、親父のために。

たつた一日のことだった。俺は二人の家族を失い、孤独になつた。
そして誓つた。必ず、妹の無念だけは晴らさなくてはならないと。
二人の形見となつた斬魄刀を手に取り、俺は瀬靈廷へと旅立つた。

それから気の遠くなるほどの鍛錬を経て、卯ノ花剣八と出逢い、いつの日か挑む勝負
の時のために力を磨き、副隊長の座を手に入れ、ついには十一番隊の隊長となつた。
この日、俺は四年間を共にした弟子を殺す。

今日という日に至るまで、一度たりともあの亡靈が見えなかつた日は無かつた。
こちらをじつ……と見つめる、俺だけに見える妹の亡靈が。

親父。

悲願を果たす為、剣八の名を捧げよう。

ナユ。

無念を晴らす為、この戦いを捧げよう。

ああ。やつぱり、輔忌よ。

お前は、俺に似ているな。

??????

くひつ、くひひひ

どうだつた？ 感想は
奴も家族のために『剣八』を捧げようと命を賭した者だつた。感じるものがありはしないか？ くひつ

肉と眼。

最早見慣れてしまつた自らの精神世界で、卯ノ花輔忌は記憶の奔流の余韻に浸つていた。

とても……長い夢を見ていた。

吼翔隊長の過去を辿る、長い長い夢。

『今のは何だ？ 何故貴様が吼翔隊長の記憶を持つている？』

くひつ、正解の能力とでも言つておこう。わたしの力を掌握した今、徐々にわかつていくことだ

それより、どうだつたと訊いている。今のグツとくる過去を通して、おまえは一体何を感じた……？

ふむ。

率直な感想を言わせてもらえば……

『自分でも不思議なものだが、特に何も』

どういう事だろう。僕は吼翔隊長を生かした上で勝つなんて大層難儀な計画を立てていた筈なのだが、そんな気もすっかり消えて無くなってしまった。

もし隊長がこれこれこういう事情があるから俺に剣八を譲ってくれなんて言つてきたら、後ろから斬りつけてやるだらうな。

そう、それでいいのだ！

おまえが克服するべきだつたのはあの甘さ！　まったく、過去や未来を見通すゆえの傲慢とも言うべきか……

これならどうやら問題無いだらうが、いちおう確認はしておこう

『ああ、いつでもいいぞ』

では早速……”剣八の名を狙つて挑んでくる連中はどうする?”

『更木剣八以外は例え相手が部下だろうとキツチリ殺しておく。実力者が変に生き残つては”記憶”との差異が広がるばかりで良いことはない』

”志波都が死亡するはずの任務に向かうところを見かけたら?”

『無視だ。朽木ルキアを程々に絶望させておかないと、崩玉によつて黒崎一護へ完全譲渡される筈だつた靈力量が不安事項になるからな』

”歌匡が死ぬ日、おまえはどう動く?”

『それも無視……と言いたい所だがそ
うはいかないな。東仙要には死神を憎んで貰わなくては事だ。この目で彼女が止めを刺される瞬間を確しかと確認しなくては』

どれもこれも、来る日に僕の力や知識を活かす為に必要不可欠な工程だ。むしろ不思議なのは、事前に考えておいて然るべきこれだけの方針を今に至るまで思いもよらな

かつたということだ。

……いいや、不思議ではないな。

殺すとか見捨てるとか、以前の僕なら耳を塞ぎたくなるような単語ばかり。考えることを無意識に放棄していたんだろう。あのまま何も考えずに更木剣八が来るまで漫然と生きていくとなると、それはそれでぞつとしない話だ。

とどのつまり、啓蒙。

僕にはそれが必要だった。

『貴様の底意地の悪さは心底嫌いだ』

ほう

『だが……今なら分かる。少なくとも僕が役目を終えるまでは、貴様とは上手くやつていけそうだつてことぐらいはな』

ふん。口が減らないのは据え置きにしても、大分わたし好みの顔になってきたじやあないか。気に入つた

やらなければならぬ事がある。

その為なら、僕はいくらでも汚れてみせよう。

そうだ、殺せ。殺せ殺せ殺せ！　ただ自分のためだけにひたすら殺せ！　この世で最も血に染まつた道の上にこそ、おまえの野望は叶えられよう！

さあ殺せ！　狡猾に、巧みに、鮮やかに艶やかに！　何より傲慢に殺せ！　殺せ、殺せ

.....

??????

柔らかな光を瞼越しに感じる。

病室の寝具に横たわる身体を感触として確認しながら、意識の覚醒を自覚する。嗅ぎ慣れた薬のにおいからここが四番隊舎であることはすぐに分かつたが、どれだけ眠つていたのかが不明だ。

「ん……」

ゆっくりと目を開き、辺りを見渡していると——一人の女性と目が合つた。

僕のたつた一人の母親、卯ノ花烈が驚いたようにこちらを凝視していたのだつた。

「お早う、御座います。僕はどれだけ——つ？」

ふわりとした感触に目を白黒させていると、どうやら母さんに抱きしめられているらしいという事が分かつた。かすかに腕が震えているのが分かる。
 ……心配を掛けさせてしまつただろうな。どれぐらい眠つていたのかは分からないが、いつまで側に寄り添つてくれていたのだろうか。そう思いを巡らせるだけで、大切なものが欠け落ちてしまつた筈の胸が一杯になる。

静かに、動く両手で母さんを抱き返した。

いつまでも、こうしていられたら。

そう思つたが、僕は黙つて手を離した。そんな資格は元より有りはしないのだから。
 『己が心』を『輔ぐ』べし。

母さんが僕にただ一つ願い、そして与えた名前。それを僕は捨て去つたのだ。自らの在り様をこうして捻じ曲げ、目的の為だけに跡形も無く破壊した。

今ここに居るのは、力に生き、更なる力に死ぬ事を宿命付けられた、謂わば時代の贊とも形容される者。

母の名前を受け継いだ、ただの卯ノ花剣八だ。

「母さん……麒麟寺隊長を」

ぱつり、と。

意識的に抑揚を抑えた頬み事を口にする。母さんは少しだけ肩を揺らした後——一言も発さず、病室を後にした。

入れ替わるようになつて来たのは麒麟寺隊長だつた。目を覚ました僕に驚くこともせず、ぶつきらぼうに椅子を持ち出し、寝具の側で行儀悪くガタンと音を立てて腰を下ろした。

足を組みつつそっぽを向いて何も喋らない麒麟寺隊長に、相変わらずの気難しさだと苦笑しながら僕から声を掛けた。

「お早う御座います。僕は何日ほど眠つていたのですか?」

「七日」

なんと。そんなに傷は深かつたのか。酌奉蜥蜴の奴、勝手に体を動かしてきた割には散々なやられようじやないか。

「……傷はその半分の時間で治してやつた。俺を誰だと思つていやがる。……問題は、

あの症状だつた

「症状?」

「ありやあ一体何時の話だつたか……て前エにも話してやつた事があるだろう。烈のヤツと俺が、どうやって出逢つたのかつてえ話は」

「…………?」

確かに……母さんが一人の男を、血相を変えて抱き込んでやつて來たという話だ。その男は麒麟寺隊長ですら手の施しようがない状態で、原因も不明なまま衰弱していく、亡くなつた。

その時の縁で、隊長と母さんは少しばかりの交流が有つたのだとか。

「そうだ。……俺が見てからそいつが逝つちまうまでの時間が——丁度、七日だつたともな」

「…………え?」

「原因がわからねえ。どこにも異常が無いつてのに、靈圧が日に日に衰えていく。俺にはどうする事も出来なかつた。……はつきり言つて、手前エが今日になつてスッカリ元気になりやがるは思わなかつたぜ」

そう語る麒麟寺隊長の表情は言葉と裏腹に、あまりにも強烈な慙愧の念を浮かべていた。

医術の敗北。靈界の最高峰として築き上げてきた誇りを崩される悔しさは、僕なんか察するに余りあるものだろう。

「そして……その男は、て前工の父親だつた男だ」

「…………。」

僕の、父親。

今まで母さんから話を聞いた事は、思えば一度たりとも無いだろう。片親である事を疑問に思わなかつたのかと言えば嘘になる。

「聞かされていなかつたのには、何か事情があるのだと考えていました」

「俺もそう思う。だが、この症状を再び目にしたとくれば、この俺がて前工に伝えてやらないつて選択肢は無えだろう。……この話はここまでだ。これ以上は何も知らねえし、言つてやれる事も無えよ」

「……有難う御座います」

「礼には及ばねーよ。それより、俺が訊きたい事は他にある」

「体調なら今の所問題はありませんが」

「吼翔を殺したな」

「……ええ」

不機嫌そうに銛え楊枝を上下に揺らす隊長を見た瞬間、僕は彼が何を言いたいのかを

すぐに覚つた。

「あれが俺にとつて『納得の行く結末』だったのかつてのは、正直なところ分からねえ。分からねえから、何としてでも前エを治してやつて、起きたその顔を見てから決めようと俺は思つていた。……実際はワケもわからず勝手に治つちまつたんだから世話をねーがよ」

意識は朦朧としていたが、吼翔隊長を殺した時の感触はハツキリと覚えている。そして後悔は無い。目的を妨げる敵を殺した事に後悔は無い。

が、こういつた生き方をする以上、今までとは比べ物にならない程の敵を作ることも確かだろう。無論、その覚悟は出来てゐるのだが。

「……今分かつた。変わつたんだな、て前エは」

「そうらしいですね」

「そんならまだマシだ。俺が思う最悪の場合つて奴にはならなかつたらしいからな。……良いとこ、最悪から二番目つてトコだがよ」

そう言つて麒麟寺隊長は立ち上がつた。

変わらず不機嫌そうではあるが、どうやらお眼鏡には適つたようだ。今ここで彼を始末しなければいけないような事態にはならないようで内心胸を撫で下ろす。そうなれば“記憶”との乖離が取り返しのつかない事になつてしまふ。

「最後に……て前工の辯解の事だが」

「つ？」

「一つ前置きした上で隊長の口から出てきた単語は、僕自身ですら未だに全容を掴めていない能力についてだった。

「あの『樹』を視た奴らが全員動けなくなつてな……次々と倒れていつた。そいつはて前工の母親ですら例外じやなかつた。とんでもねえ範囲を攻撃する辯解だ。そのままにしていたらあの場にいた全員が死んでいたかもしだれねえな」

「それは……そのままにしていたら、とは？」

「俺がて前工を直接止めた。あの場で俺だけは動くことが出来たんだ。あの力はどうやら抵抗の仕様がある類のモンらしい。そん時は流石の俺も必死で、自分がどうやって立つことができたのかも分からなかつたが……今にして考えりや、あの能力の正体についていくらかアタリを付けるぐらいの事はできる」

「…………」

「しかし、ま……答え合わせはやめとこう。ちよいと前なら兎も角、今ので前工がそう易々と弱味を握られてくれるとは思えねーしな。精々次の機会まで、斬魄刀の手綱ぐれえは握れるようになつとけよ」

「…………何から何まで、感謝します」

「そんじや、俺はさつさと靈王宮に行つてくらア。昇進の話が来てから大分経つちまつてるからな。て前工を治しや、心残りはもうねえよ」

「そうですか。……寂しくなりますね」

嘘偽らざる本心を言うと、彼は何でもないかのようになこう言つた。

「て前工は思つたよりしぶとそうだし、今生の別れつて事にもならんだろオがよ。……じゃあな」

部屋を後にした隊長に軽く手を振つて、僕は再び寝具に背中を預けるのだつた。

???????

「皆、揃つたようじやの」

三日後、一番隊舎にて。

護廷十三隊総隊長である山本元柳斎が、この場の二十名以上の隊長格へと朗々とした声で宣言する。

「それではこれより、新任の儀を執り行う」

ほんの一週間前までは顔もまともに見ることができなかつた総隊長だが、今では彼と相対しても正解の脅威を頭に過ぎりすらしなくなつた。

未だにこの人と同じ領域に至つたとは言えないが、もはや時間の問題だろう。

「各隊長の耳には伝わつてゐる事と思うが。十日前、一番隊隊長吼翔権十郎が二百名以上の隊員立ち会いの下、決闘に敗北を喫した」

初めて袖を通した隊長羽織に妙な感覚を覚えるが、思えば吼翔隊長も同じ思いをしたのだろうか。今となつては尋ねようもない、それこそ益体の無い考えだな。

「よつて隊長任命の掟に基づき、件の決闘の勝者である卯ノ花輔忌——改め、卯ノ花剣八を一番隊新隊長に任ずるものとする」

ようやく、この一步を踏み出した。

必ず野望を果たしてみせる。

母より継いだ、卯ノ花剣八の名に懸けて。

剣八の墓標はこれにて完結。丁度一年間に渡るご愛読ありがとうございました！

.....

正確に言えば、短編パートは完結、という事です。

本作は被殺願望杯という催しに合わせて急遽物語を詰めたもので、輔忌が剣八の名を手に入れるまでの物語、つまり『原作知識をインストールされた二代目剣八がいろいろと足搔くお話』の本筋に至る前、いわばプロローグまでを書く予定だったんですね。

だからこれまでに残っている多くの謎、例えば『二代目の父親つて結局何者なの?』とか『例の原作知識つてどこから生えてきたの?』とか『二代目の正解はどういう能力なの?』とか……そういった諸々の設定は結局明かされないまま、暫くは私の脳内で眠つていて貰うことになります。

いつかこの短編が連載として帰つてきた時は、全ての謎は明らかになるでしょう。しかし……。

ここまでを形にするのに丸一年、はつきり言つて計算外でした。完全にエネルギーが切れました。ジャンプ読み切りからの設定で（ほんの一部とはいえ）書きたいネタが破綻する可能性すら浮上しました。

はい、ぶつちやけやる気が無くなつてきましたんですね。はい……。書きたい構想だけは最後まで、というか最後よりも後のことまで考えてはいるのですが、書くのに疲れました。こればつかしやしようがない。

しばらくは別の作品でものんびり書きながら英気を養うことにします。とはいえ、まあ、折角積み上げた多くの設定を出力しないのは勿体無いにも程があるので、無論いつかは続きを書くとは思います。

しかし私は中々単純な生き物ですので、感想や評価が思いの外伸びれば連載執筆までのハードルは多少なりとも下がるかもしません。わかりますか?僕は今乞食をして

い　ま　す（ゴミ野郎）

……とはいえ、こんなやる気のない勘違い野郎にくれてやるかよ！べつ！という方が大半でしよう。大丈夫。そうなると思って、一番読者が喜ぶやつを最後に持つてきましたから。

それではどうぞ、Cパート的なものです。

「おーい、待つたかーい？」

「いいや京楽、今来たとこだ」

小川のせせらぎの音が心地良く響く。

立派な桜の木の下で、いかにも目付きの悪い男が、華やかな女物の着物を着込み笠を被つた派手な男を迎えていた。

「全く、キミの方から花見に誘うだなんて珍しいじゃないの。いつつもボクが誘うと『木なんか見て何が面白えんだ』なんて言つて荒事の方に吸い寄せられちゃうんだからさ」「悪りい悪りい、今日ばかりはそういう気分じゃなくつてよ。何だ、浮竹の奴はまたいつものかよ？」

「うん、口惜しそうにはしていたけどね。具合が悪いなら寝てなさいって、柄にも無くお

母さんみたいな事を言つてきちゃつたよ」

二人は親友同士であつた。

軽薄な性格で戦いを好みない京楽に対し、もう一人の男は戦闘専門部隊として名を馳せる十一番隊の副隊長を務める生糸の戦士だつたが、二人は不思議と馬が合うのだつた。靈術院時代からの交友は今も続き、こうしてしばしば酒を酌み交わす仲である。

持参した酒をちびちびと飲みながら、久しぶりの安らかな時間を会話に花を咲かせていた。

「いやあ、それにしても二代目にはボク達三人とも頭が上がらないよね、相変わらず。入隊した頃から目を掛けてもらつてさ……キミなんてすつごく優秀だから、どこか他の隊で隊長として何年かキャリアを積めば零番隊への昇進もありえるつて噂だよ」

「うげつ、その話はやめてくれよ。斬り合う相手もいねえお空の宮殿でずっと暮らすなんて御免だぜ」

心底嫌そうに舌を出す親友を見て、変わらないな、と京楽は笑う。彼と気軽に会えなくなるのも寂しい話だったので、出世に意欲の無いその態度は有難かつた。

「しつかし……『二代目かあ』

「……また嫌な事を考えてそうだね？」

「嫌な事なんてどんでもねえな！　むしろ逆だつての、あの人は本当に強え人だよ。前

線にあまり出ないことをよく思わねえ奴らもいるがな。……くつそお」

親友の悪い癖が出た、と京楽は顔を顰める。

「あの人と……死合つてみてえな……」

最近はこればかりだ。飲みに誘われる頻度が日に日に上がってきていたが、この話をしたいがために京楽らを誘っているのだという事はとつくに察していたものだった。

「……確かに、キミは強いさ。本当に。言っちゃ悪いかもしねないが、今の隊長さん方の大半と比べたってキミの方がずっと、というぐらいにはね。しかしあの人は……」

「二代目『剣八』。七百年間もその名前を守り続けてきた男。……やつぱり俺は、あの人との果し合いがしてえんだよ」

こういう時に真っ先に反論するのが浮竹だった。恩のある上司と親友が命を奪い合う。戦士の誇りを重んじるあの優男といえど、そう易々と見過ごせる考えではないのだった。

しかし一方で京楽はこうも考えていた。こいつは決して諦めないと。遅かれ早かれではあるが、背を押されれば彼はすぐにも決心するだろう。ならば浮竹がこの場にい

ない今、その後ろ髪を引くことは、果たして親友として正しい行いなのだろうか？

「分からぬ……」

「ああ？」

「止めたって聞かないだろうし、それでも止まつて欲しいという思いもある。さてどうすればいいのやら……ボクにはとても分からぬよ、くるやしき 剥屋敷。くろやしき だけど、キミも知らない訳じやないだろう？ あの人の『異名』を」

神妙な顔をして頷く親友の眼を見据えて、京樂は肅々と言葉を紡ぐ。

「あの人は、挑む者を決して生きては帰さなかつた。剣八の名前を守り続け、時にはその名に相応しいと思えるような強者こわいひと え何人も屠つてきたという。積み上がつた死体の上に表情を変えずただ佇むその様子を指して、渾名あだな を――……」

剣八の墓標、と。